

まさとも
正友ヤチャマ窯跡

—広域営農団地農道整備事業羽咋地区に係る発掘調査報告書(その2)—

1994

石川県立埋蔵文化財センター

まさとも
正友ヤチヤマ窯跡

石川県立埋蔵文化財センター



1号窯完掘状況（北から）



1号窯遺物出土状況（北から）

例 言

- 1 本書は平成元年、2年度に実施した広域営農団地農道整備事業羽咋地区に係る緊急発掘調査報告書第2分冊で、石川県羽咋郡押水町字正友地内に所在する正友ヤチャマ窯跡の報告をおこなっている。
- 2 調査は石川県農林水産部耕地建設課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査に係る費用は県農林水産部耕地建設課の負担による。
- 3 本書に係る現地調査の期間、面積、担当は以下のとおりである。

調査期間 平成2年7月6日～同年10月25日

調査面積 約1,500㎡

調査担当 調査第1課主事 川畑 誠、安 英樹
- 4 事前協議および現地調査の実施に関しては下記の関係機関の御協力を得ている。

県農林水産部耕地建設課、県羽咋土地改良事務所、押水町教育委員会、嶺東和
- 5 現地調査での調査前地形測量、調査後地形測量および図化作業は嶺東和に、また出土遺物の整理作業は平成2年～4年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に、それぞれ委託して実施した。また資料整理、図版作成、写真撮影等などに関して下記の方々の協力を得ている。

大藤雅男、藤重 啓、越田洋子、野村祥子、中野照子、丸山敦子、竹田倫子、伊藤康子
- 6 本書を作成にあたり、広岡公夫氏（富山大学理学部地球科学科教授）、酒井英男氏（同助教授）より玉稿をいただいている。記して感謝申し上げる。
- 7 本書の編集は川畑と安が担当し、以下のように分担執筆した。なお遺跡の位置と周辺の環境に関しては、第1分冊に記載しているので参照されたい。

序章、第1、3、5章第2節	川畑 誠
第2、5章第1節、6章	安 英樹
第4章第1節	酒井英男、小林 剛
第4章第2節	広岡公夫、田中 豊
- 8 本書における挿図等の扱いは以下のとおりである。
 - (1) 挿図中に指示した方位はすべて真北である。また断面図の水準線に付した数値は海拔高（単位m）である。
 - (2) 挿図の縮尺は図中に明記した。
 - (3) 写真図版の出土遺物の縮尺は不定であり、付した番号は挿図の番号に一致する。
- 9 調査によって得られた実測図、写真などの記録資料と出土遺物は、県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。貸し出しをおこなっているので有効に利用していただきたい。

目 次

序 章	1
第1章 調査の経緯と経過	3
第2章 遺構	7
第1節 発掘調査の概要	7
第2節 1号窯	12
第3節 灰原	23
第4節 その他の遺構	31
第3章 出土遺物	33
第1節 整理の方法と分類	33
第2節 出土遺物	35
第3節 小結	62
第4章 自然科学的調査	77
第1節 窯跡周辺の磁気探査	77
第2節 1号窯の考古地磁気年代	83
第5章 考察	87
第1節 正友ヤチャマ1号窯の焼成技術について	87
第2節 高松・押水窯跡群の8世紀の展開に関する一考察	99
第6章 結び	115

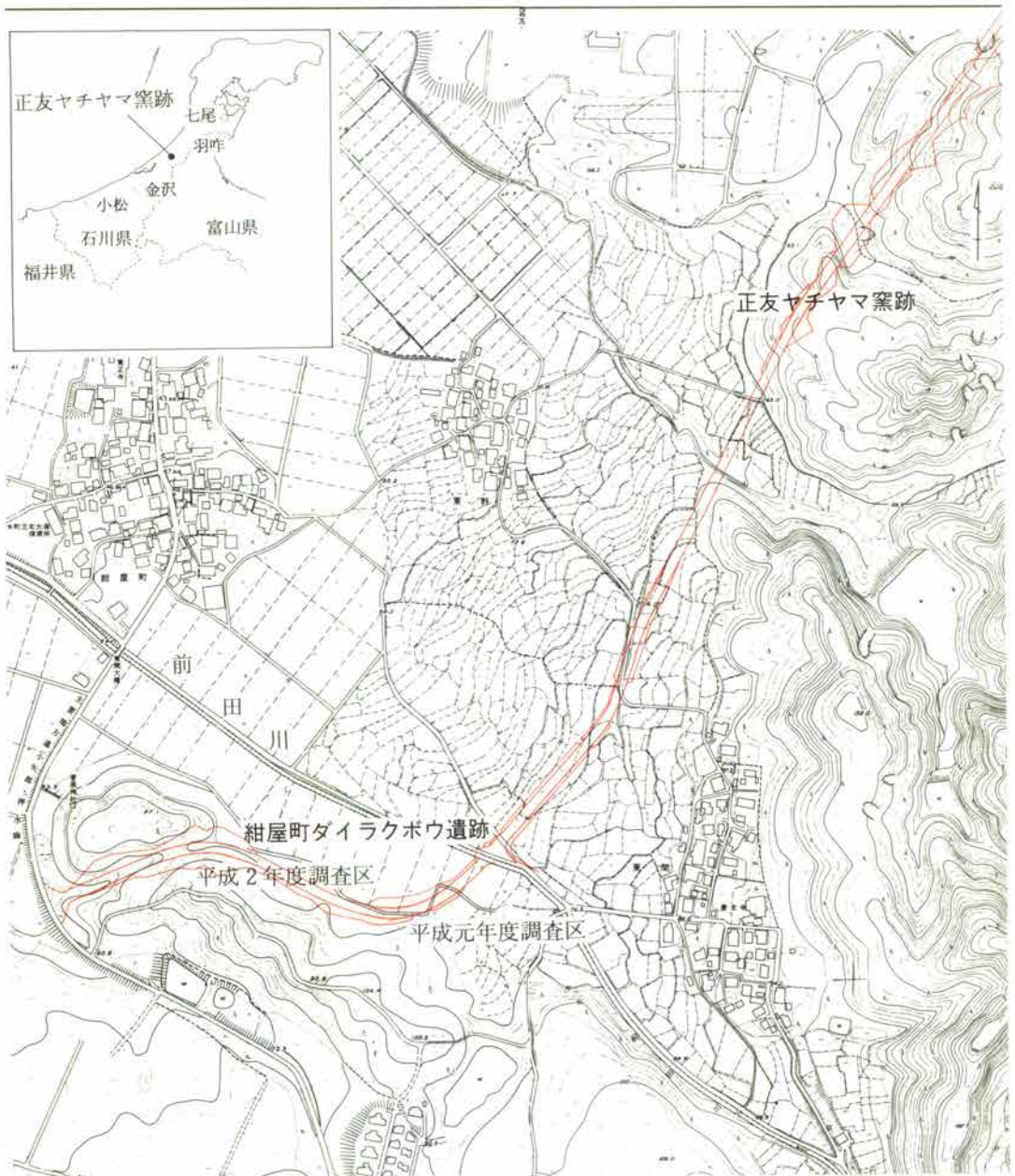
序 章

本書に報告する正友ヤチャマ窯跡の発掘調査は、県農林水産部耕地建設課と県羽咋土地改良事務所所管の広域営農団地農道整備事業羽咋地区に係るものである。本事業は、細長く連なる羽咋市、羽咋郡富来町、志賀町、志雄町、押水町の1市4町に点在する圃場整備、排水改良、農地開発、施設整備の各事業の生産・加工・流通システムなどの合理的な確立を図るための幹線道路として計画策定がなされた。そのうち羽咋地区は昭和61年度に着工され、羽咋郡押水町字紺屋町地内より羽咋市^{つばらい}門井町地内までの総延長約15.6kmを建設する計画である。

本事業に対して、県農林水産部耕地建設課、県羽咋土地改良事務所、県立埋蔵文化財センターは、昭和61年度に遺跡の保護と同事業との調整をおこない、事業予定区域内について事前に分布調査を実施する必要があること、遺跡が存在した場合は分布調査の結果に基づき、工事計画との調整をおこなうことを確認した。昭和62年度以降、数年にわたり県立埋蔵文化財センターで分布調査を実施、遺跡範囲を確定し、その都度、県農林水産部耕地建設課に対して回答、協議をおこなった。その結果、遺跡の保護に影響の生じる箇所については、発掘調査による記録保存措置を講ずることとなった。それを受けて県立埋蔵文化財センターでは、平成元年、2年度に押水町字紺屋町地内に所在する紺屋町ダイラクボウ遺跡を、また平成2年度に紺屋町ダイラクボウ遺跡および同町字正友地内に所在する正友ヤチャマ窯跡の発掘調査をそれぞれ実施した。以下に調査概要を述べる。

第1分冊に報告する紺屋町ダイラクボウ遺跡は、平成元年7月～12月にかけて約2,300㎡で発掘調査を実施し、丘陵裾部で縄文時代後期～晩期の大小あわせて21基が連なる貯蔵穴群と丘陵部で性格不明の古代の整地面および室町時代の建物跡などを検出した。平成2年6月～8月にかけて引き続き実施した発掘調査(約700㎡)では、丘陵斜面に上下2段の整地面を確認、上段の整地面では中世末に建立された1棟の礎石建物跡や焼土坑などを、また下段の整地面ではほぼ同時代の掘立建物跡や井戸などをそれぞれ検出した。前者は神社跡地の伝承をもつことから社殿と、後者は神社に付随する僧坊的な屋敷地と推定される。詳細は第1分冊をご覧ください。

本書に報告する正友ヤチャマ窯跡の発掘調査は、平成2年7月6日～同年10月25日にかけて約1,500㎡を対象に実施した。調査の結果、丘陵谷部北向きの斜面に奈良時代中頃の須恵器窯が単独立地することが明らかとなった。この1号窯の構造は、第2章で詳しく述べるとおり、全長約9mの地下式有段窯で、焼成部～窯尻にかけて13段以上の階段状の床面をもつことが大きな特徴となる。また出土遺物から本窯跡が属する高松・押水窯跡群の大きな転換期に操業をおこなわれたことが確認され、特徴的な窯体構造とあわせて当時代の土器生産体制の一端をかいまみることとなった。なお高松・押水窯跡群についていえば、7世紀～10世紀前葉にかけて、律令期以降の能登国と加賀国の境の丘陵部一帯に操業した同地域の中核的な土器生産遺跡群とされ、現在須恵器窯跡60基以上が確認されている。



第1図 事業区間と発掘調査範囲 (S=1/7,500)

第1章 調査の経緯と経過

本窯跡は石川県羽咋郡押水町字正友地内に所在する生産遺跡である。平成2年度の事業予定区間については、平成元年秋に県立埋蔵文化財センターが現地踏査と重機による試掘調査を実施、北側に面する同一丘陵斜面2箇所で見積り層と遺物を確認、新発見の須恵器窯2基が存在するとの回答をおこなった。その結果をもとに関係機関と協議をおこない、平成2年度に約1,500㎡を対象に発掘調査を実施した。

発掘調査は平成2年7月6日～同年10月25日にかけて実施した。その結果、奈良時代中頃に操業したと考えられる須恵器窯1基を確認した。当初2号窯と推定した丘陵斜面の凹部は見積り層の堆積を確認したのみで須恵器窯ではなく、また周辺に工房などの付属施設も検出できなかった。

整理作業は、平成2年度に図面、写真整理作業を、また(株)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して遺物洗浄作業を実施した。平成3年度は直営で図面整理作業と遺物整理作業を、また(株)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して遺物整理作業を実施した。平成4年度は遺物整理作業、調査報告書の原稿執筆、また(株)石川県埋蔵文化財保存協会に委託して遺物整理作業を実施した。

以下、調査参加者、現地調査日誌抄を記す（敬称略、順不同）。

〔調査参加者〕

平成2年度調査

現地調査

調査員 川畑 誠、安 英樹（調査第1課主事）

指導員 村井一郎（石川考古学研究会評議員）

広岡公夫（富山大学理学部地球科学科教授）

酒井英男（富山大学理学部地球科学科助教授）

宇野隆夫（富山大学人文学部考古学研究室教授）

前川 要（富山大学人文学部考古学研究室助教授）

調査補助員 宮下栄仁、藤重 啓、中村繁和

作業員 井田重吉、奥村忠次、中村理貞、松井外茂、松田平順、松永 清、山本敏雄、

大島清枝、岡部節子、白川久子、松井弥生子、山本静江、（以上、押水町）

田中英樹、田中 豊、平井 徹、森定 尚（以上、富山大学学生）

屋内調査

作業員 中野照子

平成3年度調査

屋内調査

作業員 丸山敦子

平成4年度調査

屋内調査

調査補助員 大藤雅男

平成5年度調査

屋内調査

調査補助員 大藤雅男

作業員 伊藤康子、越田洋子、竹田倫子、野村祥子

[現地調査日誌抄]

- | | | | |
|---------|--|----------|--|
| 7. 6～ 9 | 磁気探査により窯跡位置の推定調査を実施。 | 8.31 | 1号窯窯内の掘り下げ作業はほぼ完了。遅れている図面作成作業を本格的に始める。また灰原にグリッドを設定し、掘り下げ作業を始める。遺物量はそれ程多くないようだ。 |
| 7.11 | 羽咋土地改良事務所担当者と現地で最終打ち合わせをおこなう。 | 9. 1～ 7 | 1号窯窯内のベルトを取り外しながら図面作成作業を進める。灰原の掘り下げ作業はかなり進捗する。 |
| 7.12～21 | 重機による表土除去作業を実施。 | 9. 9 | 引き続き調査を実施。押水町中央公民館の子供会が見学。大変にぎやかであった。 |
| 7.21 | 表土除去後、再び磁気探査を実施。伐採木の燃やした痕が除去されたため、探査は順調に進む。 | 9.10～20 | 1号窯窯内の遺物を取り上げながら図面作成作業続行。灰原掘り下げ作業はほぼ終了。 |
| 7.23～26 | プレハブ設営、機材搬入等の現地調査の準備を進める。 | 9.20～29 | 1号窯窯内に併せ灰原の図面作成実施。あわせて尾根上および丘陵斜面の遺構検出作業に入る。 |
| 7.27 | 本日より作業員による表土除去および遺構検出作業を始める。 | 10. 1～ 5 | 1号窯窯内の遺物取り上げ後、7.8区で階段状の床面を検出する。尾根上および丘陵斜面の図面作成作業を実施。 |
| 8. 1～ 7 | 引き続き遺構検出作業を進める。排土量が多く、ベルコンの移動に難渋する。トレンチ調査により谷部の黒色土の状況を確認、併せて図面作成作業を実施。 | 10. 6～11 | 1号窯床面にトレンチを入れ、床面の状況を確認。図面作成作業は続行。清掃作業後、完掘状況の写真を撮影。 |
| 8. 8～17 | 1号窯窯内の調査に入る。窯体下部より掘り下げ作業を実施。中途盆休み。 | 10.12 | 地磁気年代測定を実施。 |
| 8.18～22 | 引き続き1号窯窯内の掘り下げ作業を実施、併せて2号窯推定箇所も掘り下げ作業に入る。押水町教育委員会職員、富山県立山町教育委員会職員来訪。 | 10.13～17 | 遅れていた図面作成作業は、ほぼ終了。尾根上および丘陵斜面の最終確認のため試掘調査を実施。機材整理作業、除草作業を実施。調査区完掘状況の写真を撮影。 |
| 8.23 | 1号窯窯内、2号窯推定箇所掘り下げ作業を続行、断面図作成作業を実施。富山県立山町教養講座受講生来訪。 | 10.18 | 報道機関への資料提供を実施。 |
| 8.24～30 | 1号窯窯内、2号窯推定箇所掘り下げ作業と併せて断面図作成作業実施。2号窯は周辺にサブトレンチを設定し、窯体でないことが確定する。また1号窯は窯内が狭いため、図面作成に苦勞する。 | 10.20 | 現地説明会を実施。多くの見学者が訪れる。感謝。 |
| | | 10.22～25 | 機材撤収作業。現地調査終了。 |



写真1
磁気探査調査風景



写真2
表土除去作業風景



写真3
1号窯窯内調査風景



写真4
推定2号窯調査風景



写真5
考古地磁気測定
試料採取風景



写真6
現地説明会風景

第2章 遺 構

第1節 発掘調査の概要

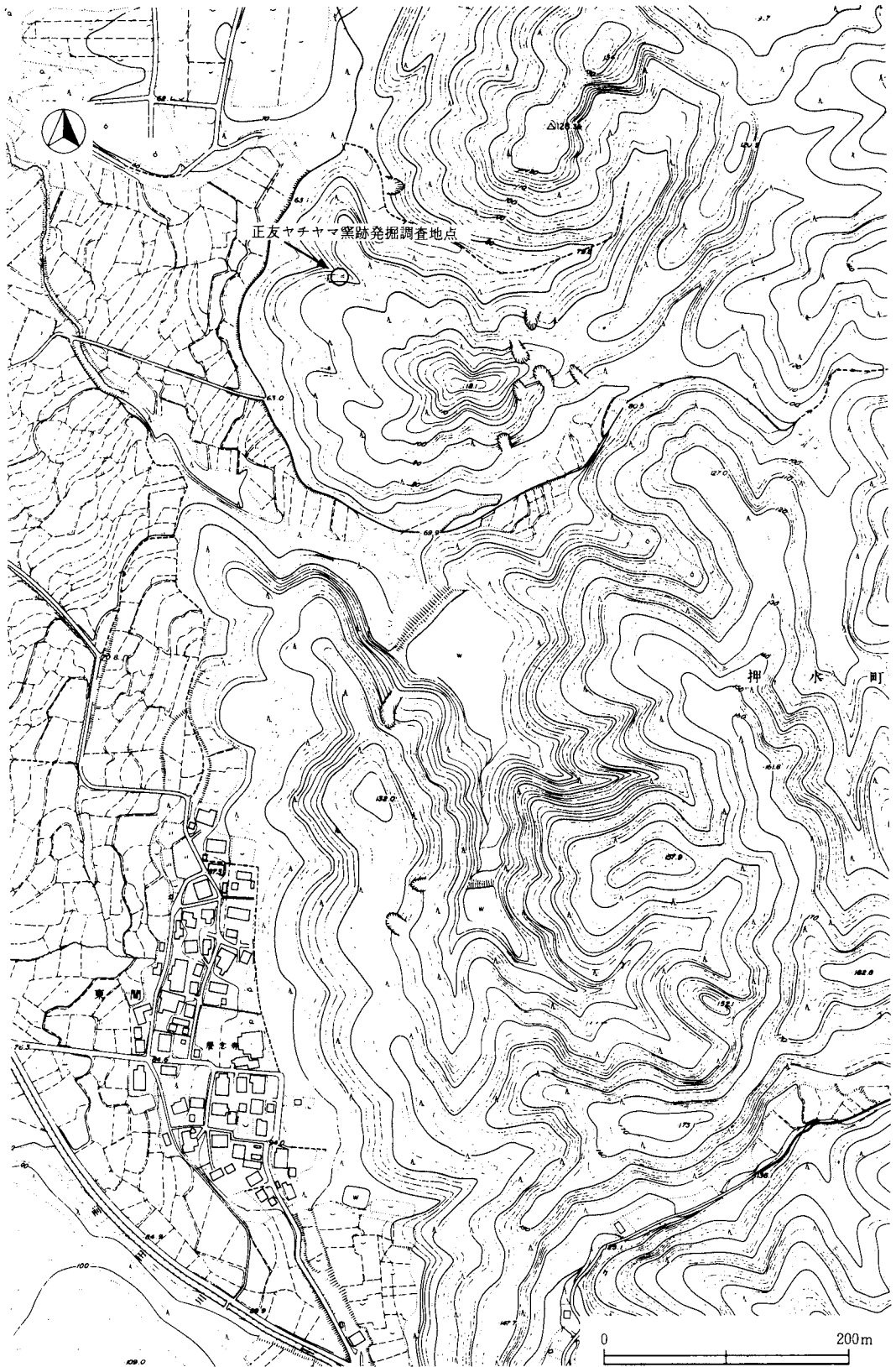
1. 調査前の所見

正友ヤチャマ窯跡は、宝達山系に連なる山地帯の末端で、平野部に舌状に張り出す小尾根の斜面に築かれた、奈良時代の須恵器窯跡である。窯跡が位置する斜面は平野に面する部分ではなく、山地に組み入る小支谷を囲むように伸びる北向きの斜面である。現在の押水町東間の集落からは北側約700m離れた位置になる（第2図）。尾根頂部は馬の背状の平坦に近い面を持つが、その幅は狭く、すぐ側面の谷に落ち込んで行く。谷部は平野側から見て南東方向に入り込み、山側から見て北西に落ち込んで広がっている。周辺の標高は尾根上の最高所で約80m、谷央部の最低所で66mほどを測り、10mを超える比高差を有する。窯跡が築かれた斜面の傾斜はかなり強いものと言えよう。斜面の裾は谷筋に沿ってカットされ強い段がついており、さらに谷央部にも同方向に段が見られる。どちらも近現代に造成されたものであり、谷部については近年まで畑地として利用されていたようである。尾根部については比較的原地形を保っているようであり、地形の改変がなされているとしたら近現代の植林程度の軽微なものと推測された。

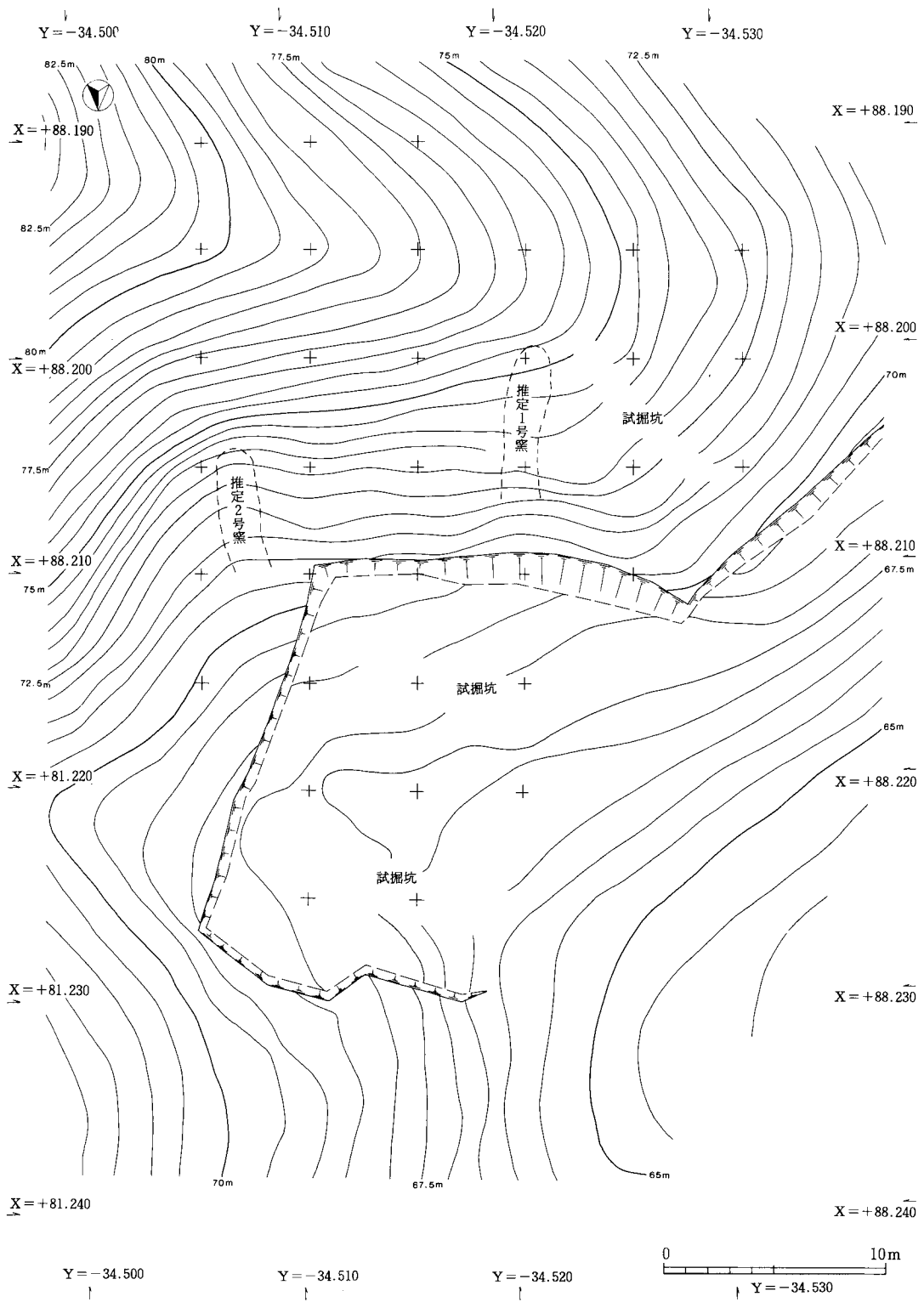
当窯跡は高松・押水窯跡群の一部であり、採集遺物から8世紀代の須恵器窯跡と推定されていた⁽¹⁾。調査前には、地表面の陥没が2箇所で見られ、よって当窯跡には2基の窯体の存在が推定された。尾根の先端近くが1号窯、谷の奥のほうに2号窯と仮称されており、推定2号窯は推定1号窯に比して斜面の傾斜が少し強い箇所に位置している。それらの下方の谷部には、灰原の存在が試掘調査で確認されている。よって、発掘調査前の時点では窯体2基とその灰原の存在が想定されたのである（第3図）。調査直前に富山大学理学部酒井英男氏らによる全磁力探査を行った。結果は後章で詳述するが、推定1号窯・灰原とほぼ同様の箇所に反応が認められた。

2. 発掘調査の結果（第5図）

正友ヤチャマ窯跡の発掘調査に際しては、5m角のグリッドが四方をほぼ東西南北に揃うように基準杭を設定し、そのうちの南北のラインの1本が仮称1号窯に重なるように配置した。正方位との対応は、グリッドの南北ラインがN-1°-Wを指向する。国土座標との対応は第3図・5図に示した通りである。発掘調査は表土除去後、まず旧微地形の確認と窯体等の遺構の検出に主眼をおいて進められた。旧地形については谷部の流土の堆積がきわめて厚く、かつてはより深かったであろう谷間が確認された（第4図）。最深部では現地表から1.6mの深さで地山が確認された。その土層堆積はゆるやかなレンズ状を呈し、最上位が床土、以下は黄褐色系地山質土、茶・灰褐色土、黒褐色土の3種に大別される。これらの土層は堆積状況からいずれも流土と判断され、長い年月にわたる自然堆積と推定できる。自然堆積によってある程度谷が埋まり落ち込みがゆるくなった時点で谷部の人為的な利用が始まったものであろう。窯跡の灰原もその一つである。



第2図 正友ヤチヤマ窯跡の位置 (S=1/5,000)

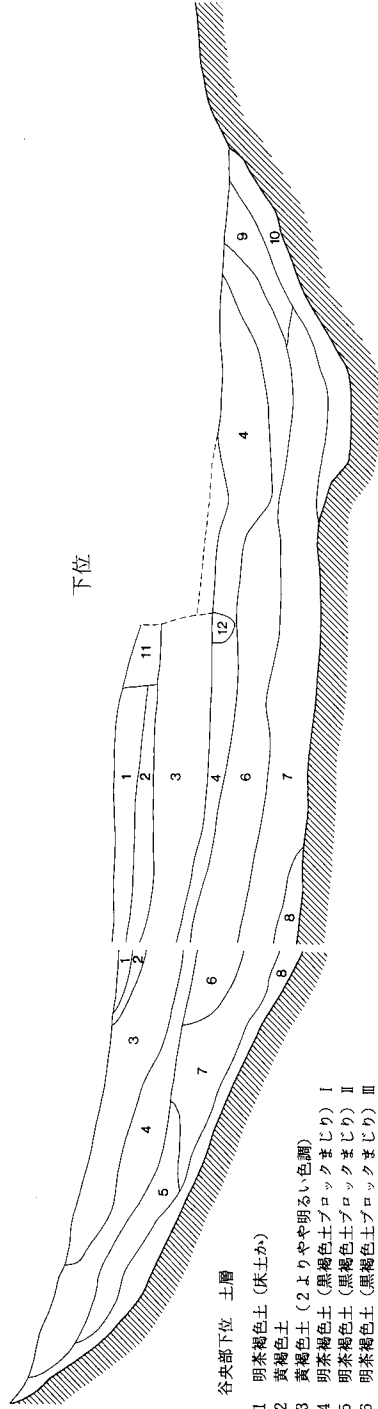


第3図 発掘調査前地形図 (S=1/300)

(北)

(南)

— 69m



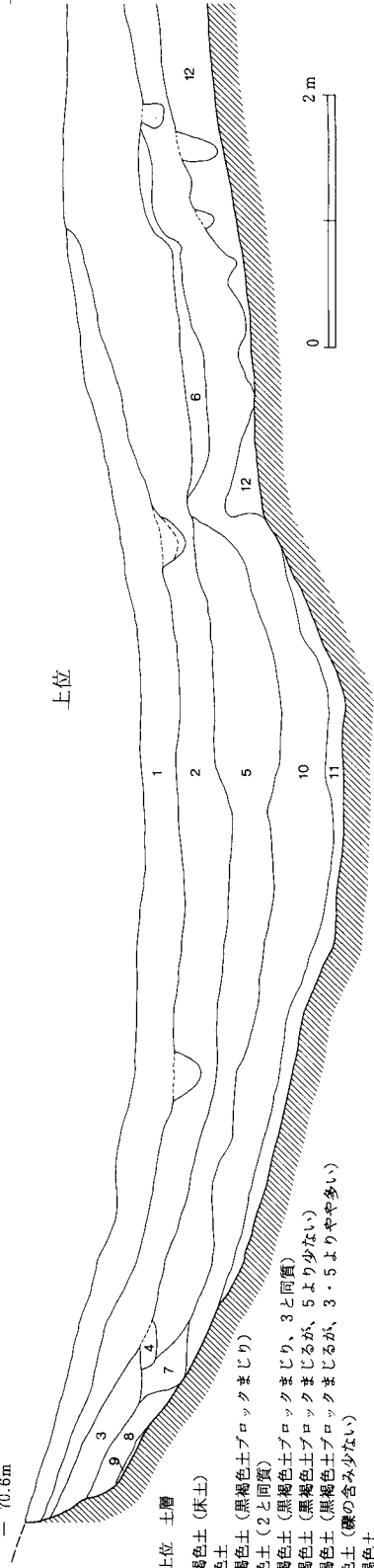
谷底部下位 土層

- 1 明茶褐色土 (床土か)
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土 (2よりやや明るい色調)
- 4 明茶褐色土 (黒褐色土ブロックまじり) I
- 5 明茶褐色土 (黒褐色土ブロックまじり) II
- 6 明茶褐色土 (黒褐色土ブロックまじり) III
- 7 黒褐色土
- 8 黄褐色土 (地山質強い)
- 9 暗灰褐色土
- 10 暗灰褐色土 (地山ブロックまじり)
- 11 Iを多く含む埋土
- 12 3・4の混層

(北)

— 70.6m

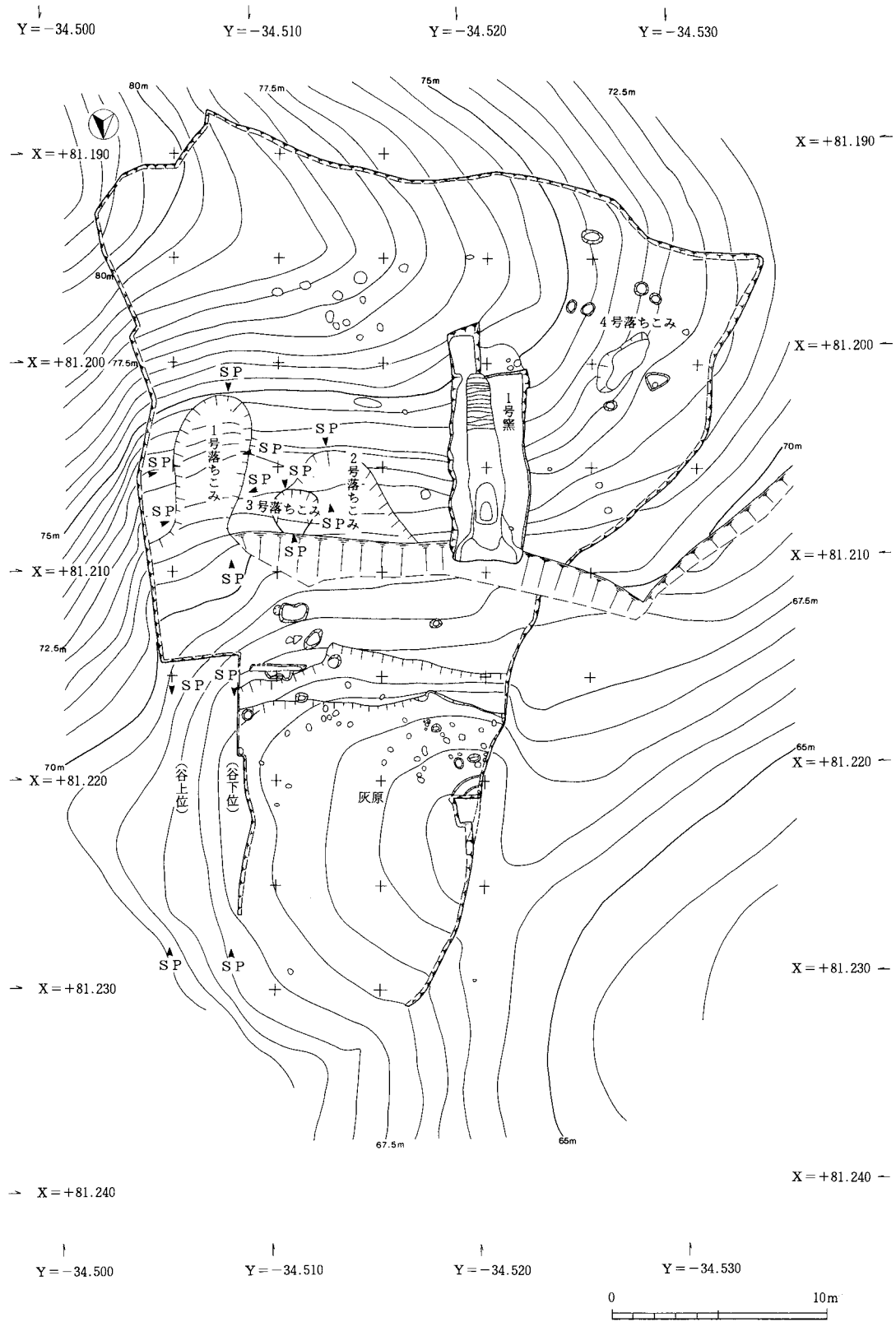
(南)



谷底部上位 土層

- 1 明茶褐色土 (床土)
- 2 黄褐色土
- 3 明茶褐色土 (黒褐色土ブロックまじり)
- 4 黄褐色土 (2と同質)
- 5 明茶褐色土 (黒褐色土ブロックまじり、3と同質)
- 6 明茶褐色土 (黒褐色土ブロックまじりが、5より少ない)
- 7 明茶褐色土 (黒褐色土ブロックまじりが、3・5よりやや多い)
- 8 黄褐色土 (礫の含まれない)
- 9 暗黄褐色土
- 10 黒褐色土
- 11 暗灰褐色土
- 12 黄褐色土 (地山質、礫多く含む)

第4図 谷地形土層断面図 (S=1/60)



第5図 発掘調査後全体図 (S=1/300)

出土遺物は流土中より弥生土器らしい土器小破片が出土しているのが唯一であり、谷の堆積時期が大まかに推察される。そして近年は畑地として利用されていたものである。

遺構の検出に着手してしばらくすると推定1号窯・2号窯間にさらに窯状の陥没が確認され、3基以上の窯体の存在が推定された。1号窯については後世の斜面裾の改変によって前庭部の前面がカットされていたため、横断面が斜面に露出し、その位置が確認された。そのプランや主軸方向を把握するために斜面上に数箇所のトレンチを設定し、1mほど慎重に掘り下げてみた。しかし窯体は確認されず、ゆえに1号窯が地下式窯である可能性を想定し、露出した前庭部から窯尻に向かって掘り進める調査方法に切り替えた。確認できなかった窯体の主軸については、5m毎に設定された南北の基準ラインのうちの1号窯に重なるラインが、地形的に見て1号窯の主軸とはほぼ一致するものと判断して、それに沿って畦を残して掘り進め、完掘した。結果的に実際の主軸はわずかにずれていたのであるが、調査に大きな支障は生じなかった。完掘後は富山大学理学部広岡公夫氏らによる地磁気年代測定を行っている。

推定2号窯については、落ちこみのプランを検出し掘り下げたものの、窯体や明確な焼土層を確認できず、サブトレンチで地山をたち割って地山を確認した後、性格不明の落ちこみ（1号落ちこみ）とした。その西に位置する推定3号窯についても同様の調査状況であるが、こちらは2基の落ちこみが複合しているように見受けられ、西半の大きな方を2号落ちこみ、東半の小さな方を3号落ちこみとした。推定2号窯（1号落ちこみ）は調査直前に実施した全磁力探査においては反応が認められていなかったが、窯体の存在を確実に視していただければこの調査結果はいささか意外であった。落ちこみは他に尾根頂部の先端に1基確認されており、4号落ちこみとした。

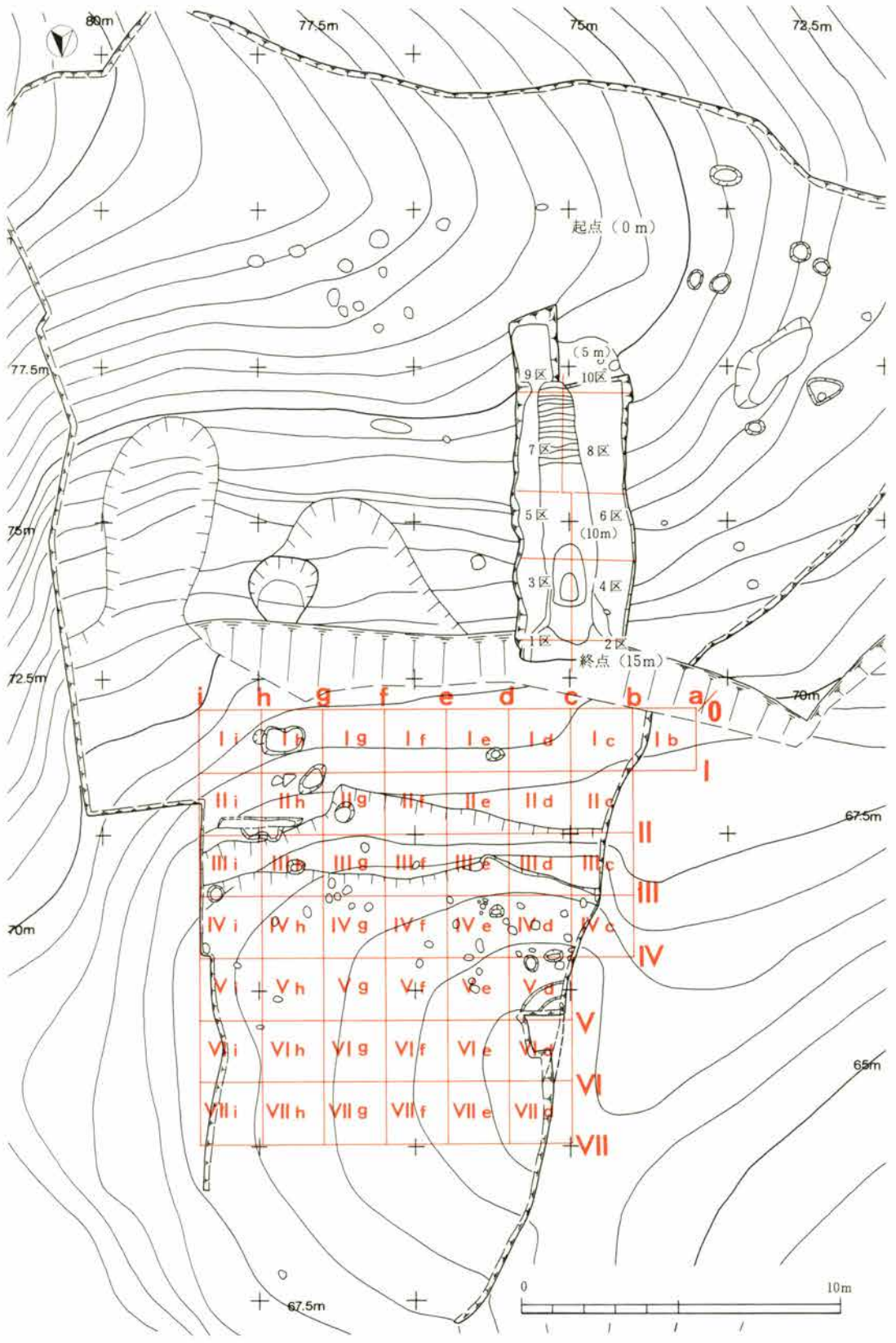
灰原についてはより小枠のグリッドを設定し、そのラインに沿って格子状に畦を残して土層堆積、出土遺物、範囲などを確認しながら掘下げていき、完掘した。

その他の遺構としては、尾根頂部、斜面、谷部各所に大小の穴を多く確認している。最終的に確認された遺構は窯体1基（1号窯）、灰原、落ちこみ4基（1～4号落ちこみ）、多数の小穴類であった。

第2節 1号窯

1. 調査の方法

1号窯の調査を進める上では、窯体の主軸とはほぼ一致すると推定された南北基準ラインの、尾根頂部の基準杭を起点（0m）とし、露出した前庭部の直下の斜面裾の基準杭を終点（15m）とし、その範囲内で細かく位置を表すことにした。1号窯の土層堆積は基準ラインに沿って畦を残して縦断面を、掘り進めながら適宜主軸に直行させた畦を残して横断面をそれぞれ観察・記録しながら前庭部から窯尻へ向かって掘り進めたものである。窯体内の区割は畦を残した位置によって行い、窯の下方から上方へ、北から南を見た時の左から右へ、数字を順にふった。すると前庭部から煙道部に向かって1区（左）・2区（右）その奥が3区（左）・4区（右）、5区（左）・6区（右）、7区（左）・8区（右）、9区（左）・10区（右）まで連なった。結果として窯体を



第6图 1号窯・灰原区割图 (S=1/200)

十分割して調査したことになる（第6図）。

1号窯の実際の主軸は基準ラインとわずかながらずれており、下方から見て若干東へ振っている。このため9・10区では西側面の窯壁にあたり、窯尻の正しい縦断面を表しえなくなる。よって主軸を東へ27cm平行移動させて残した畦を観察し、土層を合成して縦断面土層図を完成させている。掘り下げは地山陥没土、天井崩落土を順次除去し、遺物は区・層位別に取り上げ、集中が顕著なものは出土状況を記録した。そして床面を確認、床面出土遺物を記録し取り上げ、完掘した。さらにその後基準ラインに沿ってサブトレンチを設定し床面をたち割り、床面厚を測定すると同時に、累積する床面がないことを確認し、調査を終了した。

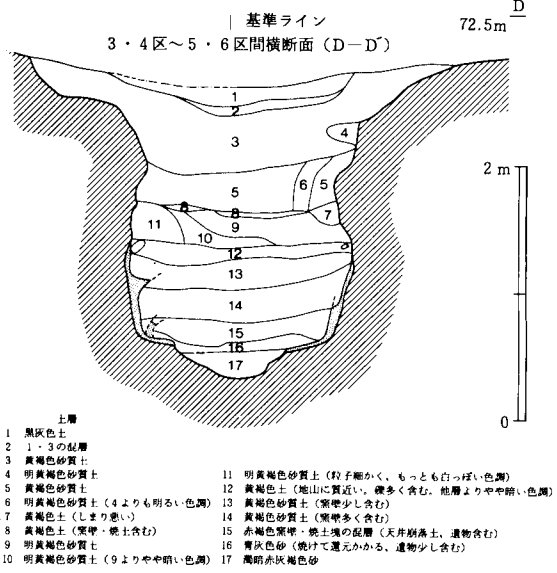
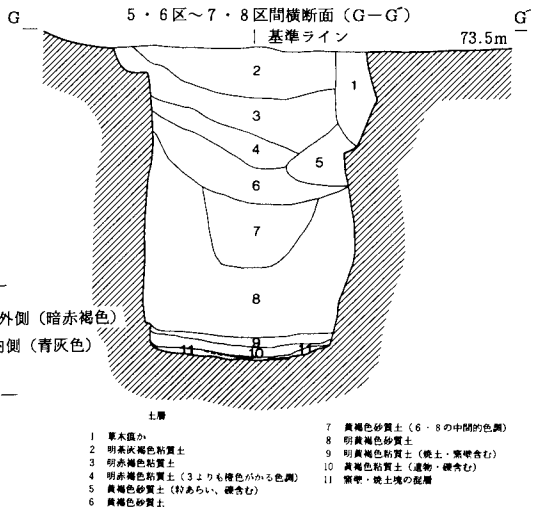
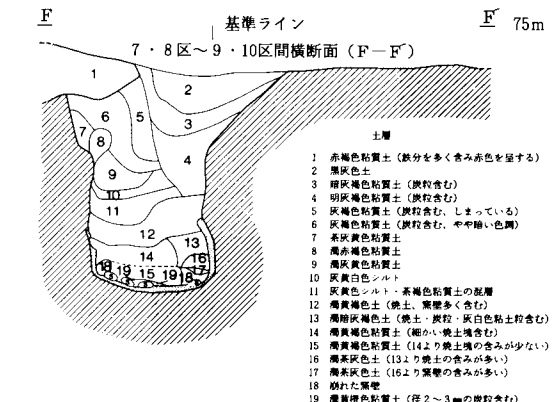
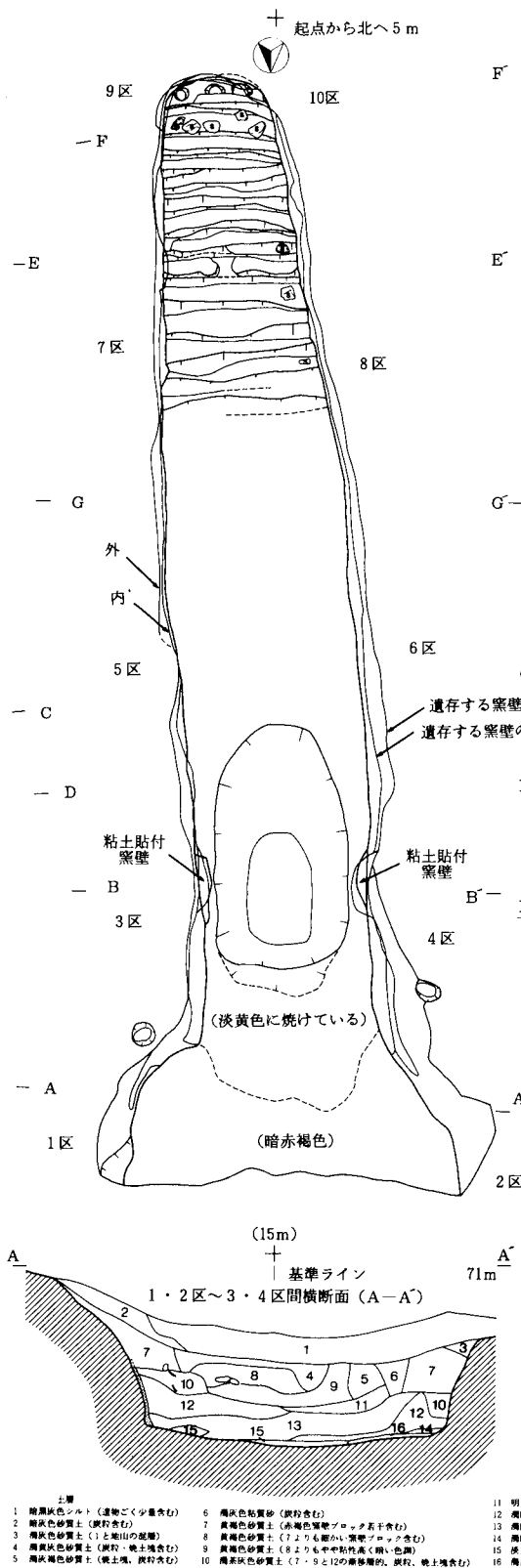
2. 窯体の規模・形状（第7図）

1号窯の窯体主軸はほぼ南北方向に沿うが若干のずれがあり、N-5°-Wを指す。すなわち、北の前庭部から見て、窯尻はわずかに東に振れて行くものである。窯体は前庭部の下半が近年の造成でカットされていたが、そこから窯尻に向かっては燃焼部、焼成部が良好に遺存していた。ただし床面と窯壁については比較的良好な状態であったが、天井部はすでに崩落しており、地下トンネル状を呈したであろう往時の姿はとどめていなかった。煙道についてはやや東寄りの窯尻の立ち上がり部に痕跡をとどめる程度で、その大半は流出したようであった。後述するが、窯内には舟底ピット、階段状の床面が確認された。

1号窯は現存長（床面で測定、以下同じ）9.2mを測り、基準ラインの5.5m～14.5mの範囲に位置している。床面は、前庭部ではほぼフラットであるが、舟底ピットの周辺から傾斜が徐々に強くなり窯尻へ至る。傾斜角度は燃焼部では28°、焼成部では35°を測り、窯尻ではほぼ垂直に立ち上がり、煙道につながるものであろう。1号窯の幅員は前庭部が最も広く、現存長2.7mを測る。前庭部は削平されているため、実際はより幅広くなるものであろう。そこから窯尻に向かっては舟底ピットの手前で窯体を絞こむように大きく幅を狭め基準ライン13mの地点で1.35mを測り、以降はほぼ同幅で続くが、床面が階段状を呈するあたりから緩やかに幅が狭くなって行き、窯尻で収束する。焼成部での窯体幅は基準ライン10mの地点で1.45m、階段が現れる同8mの地点で1.1m、窯尻近くの同6mの地点で80cmを測っている。床面と地表面との比高は同様に基準ライン13mの前庭部で1.1m、焼成部の同10mの地点で2.3m、階段が現れる同8mの地点で2.4m、窯尻近くの同6mの地点で1.6mを測っている。燃焼部・焼成部がきわめて地下深くに位置することになり、1号窯の構造は斜面をトンネル状に掘り込んで窯体を築く、地下式登窯に相当するものと考えられる。煙道の構造は確証に欠けるが、窯尻の立ち上がりラインの延長線上に伸びて直立する、地下式登窯に一般的なタイプと推定している。

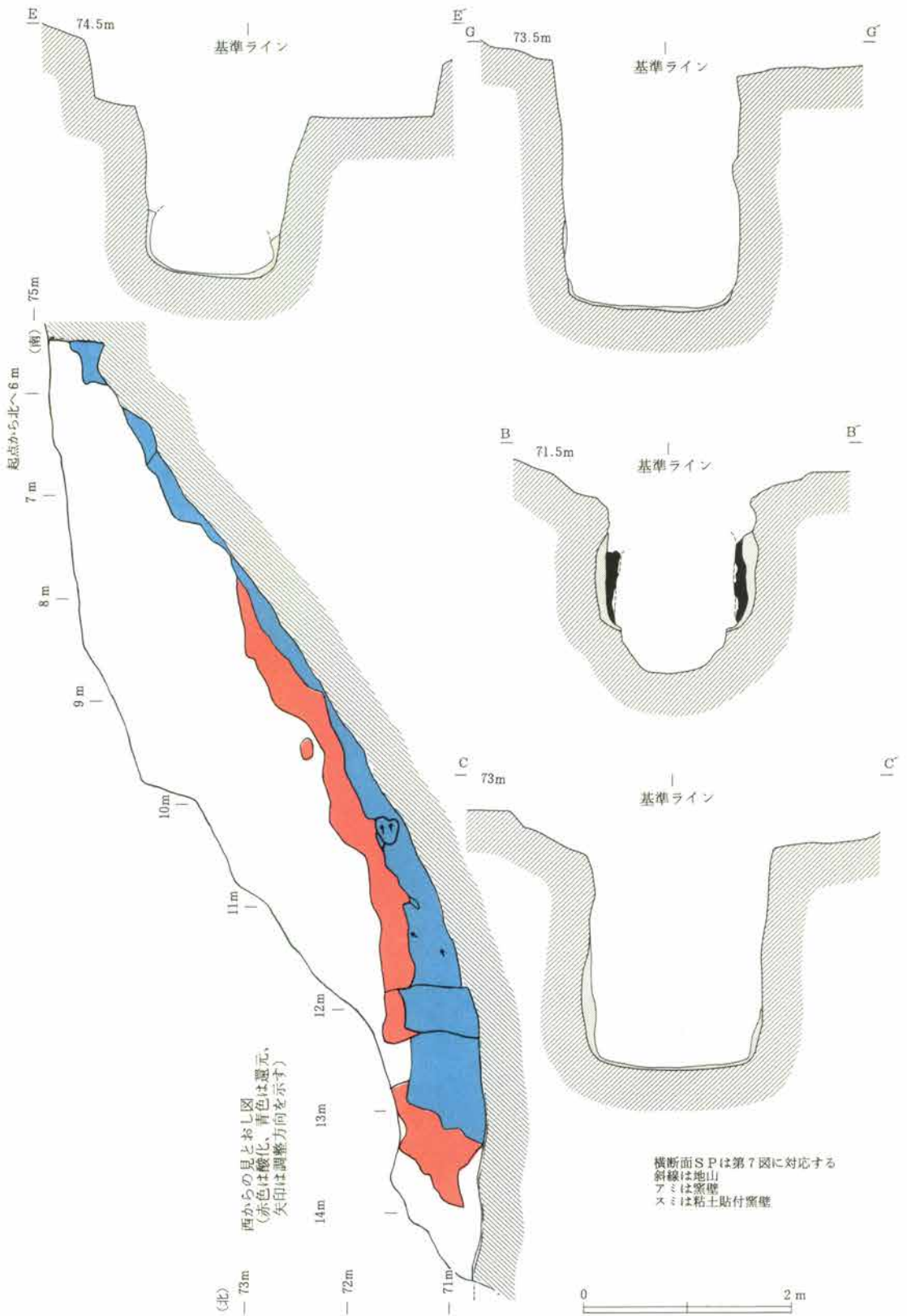
3. 床面・窯壁（第7図・第8図）

1号窯の床面については、基準ラインの8.3mの周辺で残りが悪かったが、その他の地点では概ね良好であった。基本的には掘削した地山面を使用したものと思われる。床面の色調は、基本的に舟底ピットから窯尻に至るまでは表面が還元焼成を受けて青灰色、その下位は暗赤褐色を呈



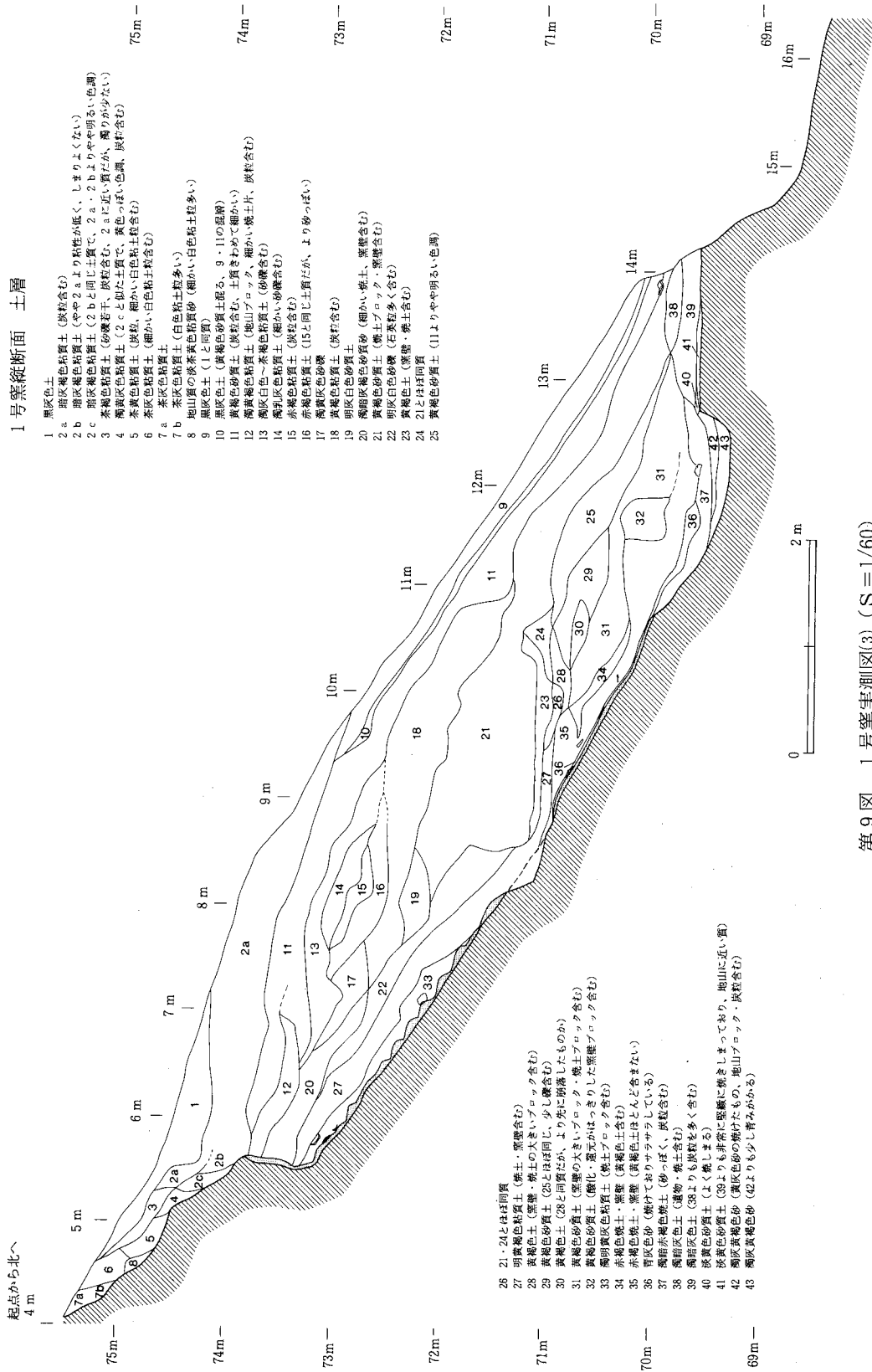
※アミスクリートーンは床面を示す
Sは石を示す

第7図 1号窯実測図(1) (S=1/60)



第8図 1号竈実測図(2) (S=1/60)

1号築堤断面 土層



- 1 黒灰色土
- 2 a 暗灰色粘質土 (炭粒含む)
- 2 b 暗灰色粘質土 (やや2 aより粘性が低く、しまりよりやや明るい色調)
- 2 c 暗灰色粘質土 (2 bと同じ土質で、2 a・2 bよりやや明るい色調)
- 3 黄褐色粘質土 (砂礫若干、炭粒含む、2 aに近い質だが、腐りが少ない)
- 4 黄褐色粘質土 (2 cと似た土質で、黄色っぽい色調、炭粒含む)
- 5 赤褐色粘質土 (細粒、細かい白色粘土粒含む)
- 6 赤褐色粘質土 (細粒、細かい白色粘土粒含む)
- 7 a 赤褐色粘質土
- 7 b 赤褐色粘質土 (白色粘土粒多い)
- 8 地山層の淡茶色粘質砂 (細かい白色粘土粒多い)
- 9 黒灰色土 (1と同じ質)
- 10 黒灰色土 (黄褐色粘質土混る、9・11の境界)
- 11 黄褐色粘質土 (炭粒含む、土質きわめて細かい)
- 12 黄褐色粘質土 (地山ブロック、細かい礫片、炭粒含む)
- 13 黄褐色粘質土 (細かい砂礫含む)
- 14 黄褐色粘質土 (13と同じ土質だが、より砂っぽい)
- 15 赤褐色粘質土 (細かい砂礫含む)
- 16 赤褐色粘質土 (15と同じ土質だが、より砂っぽい)
- 17 黄褐色粘質土 (炭粒含む)
- 18 黄褐色粘質土
- 19 明灰白色粘質土
- 20 明灰白色粘質土 (細かい礫片、炭粒含む)
- 21 黄褐色粘質土 (礫土ブロック・炭粒含む)
- 22 明灰白色粘質土 (石炭粒多く含む)
- 23 黄褐色土 (炭粒・礫土含む)
- 24 21とはほぼ同質
- 25 黄褐色粘質土 (11よりやや明るい色調)

- 26 21・24とはほぼ同質
- 27 明灰褐色粘質土 (礫土・炭粒含む)
- 28 黄褐色土 (礫土・礫土の大きいブロック含む)
- 29 黄褐色粘質土 (28とはほぼ同じ、少し礫含む) も
- 30 黄褐色土 (28と同質だが、より赤っぽく、礫土ブロック含む)
- 31 黄褐色粘質土 (礫土・礫土の大きいブロック・礫土ブロック含む)
- 32 黄褐色粘質土 (礫土・礫土の大きいブロック・礫土ブロック含む)
- 33 黄褐色粘質土 (礫土・礫土の大きいブロック・礫土ブロック含む)
- 34 赤褐色粘質土・礫土 (黄褐色土含む)
- 35 赤褐色粘質土・礫土 (黄褐色土ほとんど含まない)
- 36 黄褐色粘質土 (細かい砂礫・礫土を含む)
- 37 黄褐色粘質土 (礫土・礫土を含む)
- 38 黄褐色粘質土 (礫土・礫土を含む)
- 39 黄褐色粘質土 (38よりも礫粒を多く含む)
- 40 黄褐色粘質土 (39よりも礫粒を多く含む)
- 41 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土の礫土・礫土を含む)
- 42 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土の礫土・礫土を含む)
- 43 黄褐色粘質土 (42よりも少し礫粒を多く含む)

第9図 1号築堤断面(3) (S=1/60)

する。床面厚は厚いところで5 cm程度、その下層はすぐ黄褐色粘土の地山となり、床面の累積はない。前庭部については還元焼成を受けていないようであり、暗赤褐色を呈する。床面厚は同様に5 cm程度である。残りが悪かった8.3m付近の床面についても暗赤褐色を呈するが、火まわり等の具合が悪いためからか還元が不完全であったようであり、軟質で定着せず、流出したものと考えられる。窯体崩壊土を除去すると床面を確認する前にすぐ地山が露呈してしまい、地山質の崩壊土と誤認して少し掘りすぎてしまった。

窯壁については側壁が窯体の全体に比較的良好に遺存しており、第8図横断面図E-E'などでは崩落した天井部のカーブを推測できる。窯壁は基本的には掘削した地山面を使用したと思われる、窯の操業にともない被熱して現況の如く変質したものであり、変質した部分の厚みを窯壁と認識したものである。その色調は床面同様に還元焼成を受けた青灰色の部分と、還元焼成を受けていないか不完全な暗赤褐色の部分がある。前庭部では暗赤褐色を呈し、壁面の厚さは5 cmを測る。青灰色面は確認されない。舟底ピットの周辺から窯尻に至るまでは還元焼成を受けて表面青灰色を呈する。青灰色面の厚さは焼成部下方で8 cm程度、窯尻近くでは6 cm程度であり、それより外側は暗赤褐色面が概ね5 cmほど続いている。床面で残りが悪かった8.3m付近の焼成部も、窯壁については表面青灰色を呈し厚さ4 cm程度で他の壁面部分とそう変わらない。

窯壁についてはただ1箇所だけ粘土貼り付けがはっきりしている部位がある。それは基準ライン12m付近、すなわち舟底ピットの位置とほぼ一致する壁面に顕著で、床面からの比で約70cmの高さまで残り、その厚さは最大で10cm程度を測る。両側で貼られているため、窯体内の幅を20cm以上は狭めていることになろう。この位置の貼り壁はよく焼きしまり還元されているが、粒子が粗くて脆く、表面は一面に細かい凹凸が見られる。他の地山質の窯壁とは明らかに質感が異なり、スサを混和した粘土のようである。ここより上から9 m付近までは同様に貼り壁を行っているものの、粒子の粗い感じが薄れており、より地山土に近い質の粘土が貼られたと思われる。その表面はノミ状の工具痕が斜め上の方向に向かって無数に走り平滑になっており、貼り付け後、削り取る調整を加えたものであろう。この粘土貼り付けについては、窯体構築時に壁面調整と焚き口付近の絞り込みを行ったものか、もしくは操業期間の中で窯体の補修を行っているものと考えられるが、他の須恵器窯での状況を参考にすると前者の可能性が高い⁽²⁾。

4. 層位 (第7図・第9図)

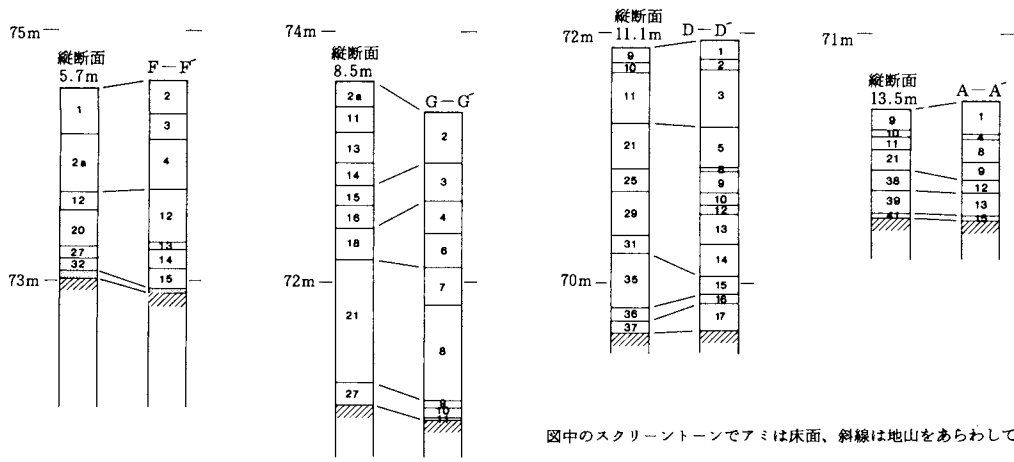
1号窯内の堆積土層は、第9図の縦断面の通り、総計43層に分層されるが、上位・下位でその土質が一変する。その識別は、下位のほとんど全ての土層に概ね焼土・窯壁・遺物等が含まれているのに対して、上位の土層にはほとんど含まれない点によってなされる。焼土・窯壁・遺物等は窯体の構成因子であって、基本的にその包含は窯体と密接に関係する土層であることを、無包含は窯体と直接関係しない土層であることを示している。前者には窯体内の最終残留物や天井・窯壁の崩落・崩壊土、後者には窯体の崩壊にともなう陥没地山土やさらにその上に流れこんだ流土といった性格が想定されよう。両者の境界は上位層11・13・17・18・19と下位層12・20・21・22の間を考えている。以下、詳細な堆積状況について、縦断面図を中心に、上位から述べて行き

たい。第7図各横断面図との対応は第10図に示した通りである。

第9図縦断面図の2・11～19の土層についてはほぼ無遺物で無被熱な地山質土・流土であり、陥没地山土とその上に流れこんだ流土であろう。1・9・10の土層については微量の遺物を含んではいるが、その堆積位置から判断して、窯体内に出自を持つものとは言い難く、周辺遺構・施設からの流れこみと考えたい。可能性が高いのは煙道の周辺からの流れ込みであろうか。

12・20～36の土層については焼土・窯壁・遺物等の窯体構成因子を含む層であり、基本的に窯体の崩壊による堆積と考えている。12の土層、濁黄褐色粘質土についてはその下層20の濁暗灰色粘砂との関係が注目される。すなわち窯尻部分では上下に密着していた両層が、窯体の下部に向かっては徐々に遊離していき11・13・17といった無遺物の間層が入る。この層序を解釈するとすなわち、20が堆積しそれにともなってある程度地山が陥没した後で、もともと窯尻付近に位置した12が崩壊し堆積したと推定できる。このような両層の位置と堆積状況から、12は煙道部の崩壊土であり、20は窯体崩壊土と推定できる。煙道部については窯尻から直立するタイプであろう事は前述したが、おそらくは2b層の辺りに伸びていたものと推定している。

20～36の土層については概ね上位より下位のほうが焼土・窯壁・遺物等の含みが多い。これらの堆積については、土質の違いから非常に細かい分層が可能であること、各層の層厚や広がりが一様でないこと、その中に25・29など地山土質の間層が見られること、などから判断すれば決して一時的で急激な落磐（天井崩落）で形成されたものとは考えにくくなる。すなわち数次にわたる大小さまざまな規模・箇所の落磐・崩壊を想定するものである。また、各層が窯体の傾斜に沿って水平・鉛直方向に広がるのは斜面の堆積原理そのものであるのだが、同時に窯内の低い方向への流出をも示すものと言える。当然、崩落した土はその直下の床面を滑り下りて移動しているものと見なければならぬだろう。このような土層の流動については遺物の出土状況からも傍証される。36の青灰色砂層は他の天井・窯壁崩壊土とは土質・色調の点で一線を画する存在である。36は基準ラインの9～11mの床面の直上から舟底ピットの上面にかけて堆積しており、層厚は2～3cmと薄い。還元焼成によって青灰色を呈し、比較的均一な堆積状況から、床面の流出土と考えられる。残りが悪かった8～9m付近の床面の青灰色面が流れて堆積した可能性が高い。



第10図 1号窯土層対応図 (S=1/60)

37～43の土層については窯体崩壊土ではなく、その多くは操業時に堆積したものと考えている土層である。37・42・43は舟底ピットへの堆積土層、38・39・40・41は前庭部でのみ認められる堆積土層である。舟底ピットから前庭部にかけての土層各層は、その層序から43⇒42⇒40⇒39⇒37の順に堆積の先後関係を掴むことができる。この堆積の過程については舟底ピットの機能も含めて後述する。41の淡黄色砂質土は、地山質土に炭粒が混じった層であるが、非常によく焼きしまっておりかつ踏み固められたかのように堅緻であった。40よりも前の堆積だが、42との先後はわからない。この上位に位置する38・39の土層は焼土と遺物を多く含んでおり、41とは明らかに堆積の性格を異にするものと言えよう。41については、その上面で直接操業行為を行っていた可能性が高く、前庭部での作業面の一つと考えている。40の土層については、形成は後出的であるけれども、41と基本的に同一の意義を有する層と考えている。37・38・39の各層については窯の操業にともなって生成される土質ではあるが、操業時の原位置を保っているのかそれとも流動し堆積したものなのかは明確にはしえない。少なくとも41の面での作業時には存在しえない層であるため、流動した二次堆積か、あるいは窯出しや補修・整備など操業の別局面での堆積といった性格を想定することができる。このうち38・39は第7図横断面図A-A'では12・13の両層が対応する。天井・窯壁等も大きいものはほとんど含まれず、他の崩壊土層とも質的に異なっている。また各層からの出土須恵器には他層と接合するものが多く、7・8区の焼成部床面資料と接合するものもある。以上のような条件から考えて焼成後の窯出しや灰の掻き出し等を複数回行った際の堆積、もしくは二次堆積かの両方の性格を可能視しておきたい。

5. 舟底ピット

舟底ピットは、1号窯内の床面に掘り込まれており、基準ラインで10.7～12.9mにかけて、焼成部と燃焼部の境界と考える部分に位置している。平面形は窯の主軸方向に長い長楕円形であり、長径は2.2m、短径は窯体幅とほぼ同じ1.1mを測る。前庭部側は2段掘り状を呈し、外側の掘り込みはきわめて弱く緩やかである。外側の掘り込みはおそらくはピット掘削時か地山の崩壊の痕跡であり、本来の機能を果たしたのは内側の掘り込みと思われる。底へはすりばち状に狭まっていき、底面で長径90cm、短径52cmとなる。底面は窯の床面よりは傾斜が緩いが、基本的に傾斜に沿った高低差があり、決してフラットなものではない。深さはもっとも近接する床面との比高で、最深部で30cmを測る。舟底ピットの底面は橙赤色を呈する焼けた地山土に薄く被覆されてはいたが、その下は黄褐色粘質土の地山がすぐに露出する状況であり、その被熱度は、周囲の床面に比べてきわめて低いように感じられた。

舟底ピットの覆土は3層、第9図縦断面の37・42・43の土層である。いずれも被熱層であり、焼土・遺物もすべてに含まれるが、37が最多である。37については前述した通り、39・40の後の堆積であり、前庭部での作業時には存在しない土層である。その下層に位置する42・43については前庭部の41との先後関係がはっきりしない。が、42は43の上位にありかつ41とほぼ同質の40には切られており、41より先行する堆積である可能性が高いことがわかる。43はさらにそれ以前の堆積ということになる。

以上のような上層堆積と底面の状況から、舟底ピットはおそらくは焼成時にはすでにある程度埋まった状態にあり、その覆土が熱を受けていたものと見なすのが自然であろう。また、焼成終了後は製品の取り出し、掻き出し等の作業に益する窪みであったろう事は容易に想像できる。付け加えると、焚き口すなわち焼成部は舟底ピットと前庭部の接する部分に位置し、ある程度埋まった舟底ピットの下方を若干取り込んでいたものと考えている。

6. 階段状床面

焼成部の上方、基準ラインで5.7～8.2mにかけては、床面がテラス状の緩傾斜面と段状の急傾斜面を短いピッチで交互に織り成しており、階段状を呈する。以下は前者を階部、後者を段部と言い表すこととする。両者のセットは階段として13段が数えられるが、最下段以下については、周囲の床面そのものが非常に残りが悪く軟質な箇所であり、その存在は不確実である。逆に、13段で完結するものではなくむしろそれ以上の段を下方に重ねていた可能性も高いと言える。階部の奥行きは最大のもので20cm、段部の高さは最大のもので10cm程である。段部については還元焼成が十分ではないようで、表面が赤褐色を呈する酸化状態のものが多かった。また、表面は平滑とも言えず、小さな窪みがよく見られ、焼土や地山土が詰まった状態であった。階部は段部と較べれば還元された面が拡大するものの、表面はやはり平滑ではなく大小の窪みや段の切れ目が目立つに見られた。

この階段状の床面に密着して須恵器坏類数個体、石数個が出土した。焼成部下位や燃焼部からの出土、また床面から浮いた状態での出土も定量あり、それらを含めるとかなりの量となる。石は花崗岩質の礫である。調査区の地山には含まれない石質であり、窯跡外から持ちこまれたものと思われる。加工等の痕跡は不明確で、形態・大きさは規格性に乏しく成人の握り拳から人頭大ぐらいまでのばらつきが見られる。ただし階段状床面から出土したものについては拳大にほぼ揃っているように感じられた。石は階部・段部の窪みにぴったりと密着して貼り付いており、意図的に床面に配されたものであることは明らかである。このような石を除去するとその跡は浅い窪みとなって残るが、それは前述した階部・段部に多く見られた窪み・切れ目といった不整部分に酷似し、判別が難しくなる。床面の不整部分については、検出時点では、還元が不十分であったか、築成が雑であったのか、残りが悪くて流出したのかいずれかであろうと考えていた。しかし、設置された石が抜けた跡とする推定は高い確実性を帯びて提唱することが可能であろう。不整部分は階段状床面の各所にはほぼ普遍的に認められるので、そのうちのすべてとは限らないまでも、石が非常に多く配されていた可能性が高い。焼成部下位や燃焼部など窯体下方から出土した石の中には、配置されていた階段状床面から滑落したものも多く含まれるものと思われる。

以上から、階段状の床面は配置された石と非常に密接な関係にあり、両者が複合して一体的に機能していた可能性が高い。その目的と機能については、急傾斜の床面で須恵器を滑落しないように安置して焼成するための焼き台（置き台）的な存在であったと考えている。

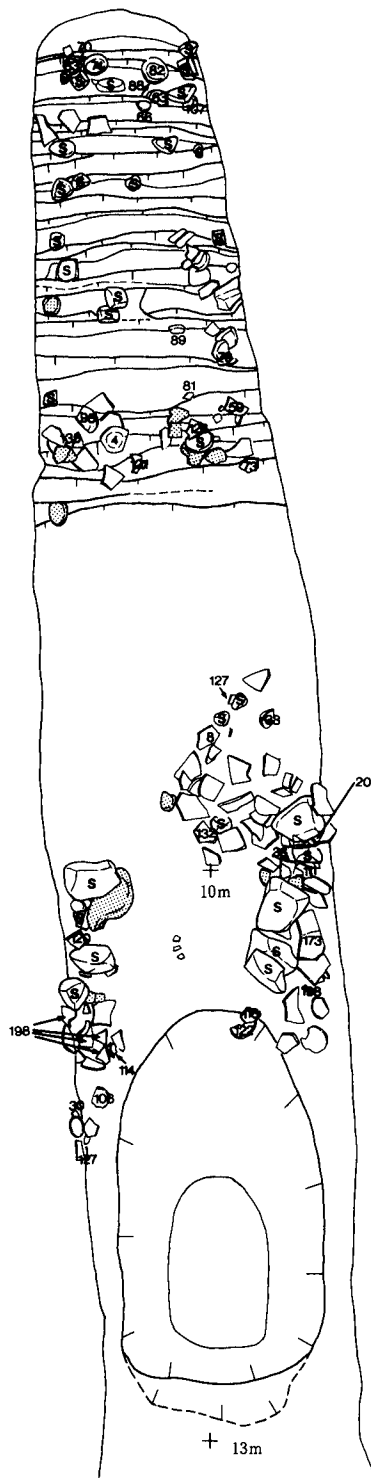
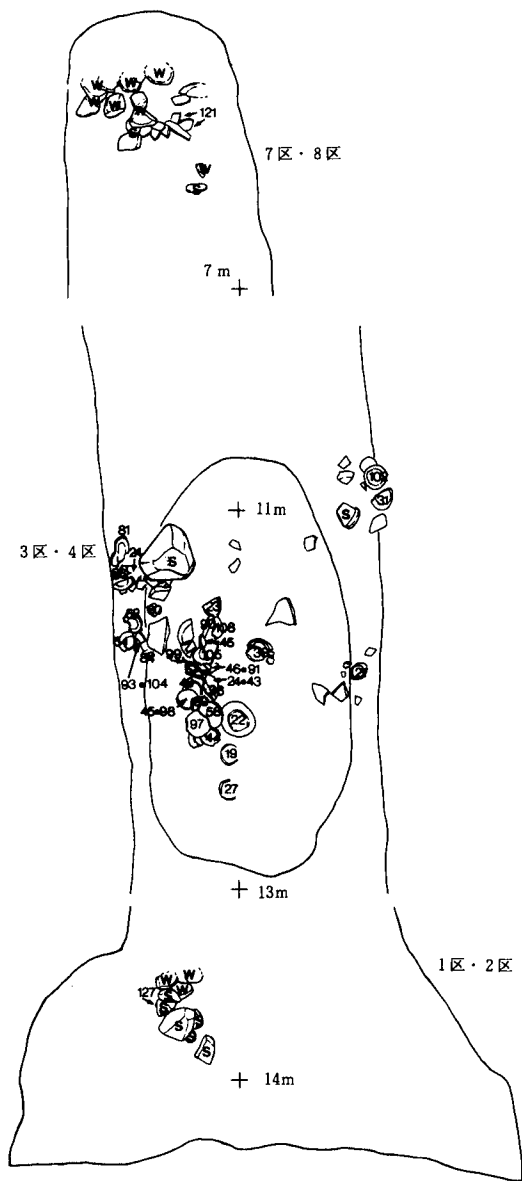
起点から北へ + 5 m



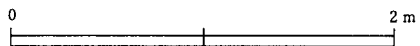
起点から北へ + 5 m

(窯体崩壊土中)

(床面)



数字は遺物実測図番号に対応する
Wは窯壁、Sは石、アミは焼土を示す



第11図 1号窯遺物出土状況図 (S=1/40)

7. 遺物の出土状況（第11図）

窯体内の出土遺物は須恵器が大半、他に石が若干あり、あわせてコンテナバット20ケース弱に及ぶ。遺物は主として窯体崩壊土、床面、舟底ピット覆土、前庭部堆積土に含まれており、そのなかでも窯体崩壊土が最も多かった。床面直上に位置した遺物は2箇所にとままって確認された。1箇所は階段状を呈する床面直上であり、密集度はさほど高くない状況下で、器種的には坏類が圧倒的に多かった。窯内にとりのこされた品が階段の凹凸で滑落を免れた品という印象である。もう1箇所は舟底ピットに近接する窯尻側の床面直上であり、器種的には甕・瓶・鉢類が多かった。密集度は高いが、床面に食いこんだり貼りついた品は少なく、原位置からここまで滑落して集まった印象である。須恵器器種の位置的な偏りは面白い傾向であるが、滑落等による原位置移動もまた進んでおり、特に後者については1号窯の窯詰め器種とその位置を考える資料としては確実性に欠けるものと判断できる。

8. その他

窯体外であるが前庭部の掘り方近くに小穴が、左右岸にそれぞれ1つずつ確認された。1対になる可能性もある。不整形プランで、覆土は流土質であったように記憶している。窯跡に伴う覆い屋状の施設の柱穴になる可能性もなくはない。しかし掘り方も持たず確実に柱穴とは言えない。窯に伴う施設であったとしてもかなり簡易な構造のものと思われる。不確実な要素があまりに多いのでこれ以上は言及を避けるべきであろう。

9. 小結

正友ヤチャマ1号窯は、ここまで記述してきた通り、斜面を掘り込んで築かれる地下式の登窯である。前庭部は比較的地表から浅い位置にあり、一部半地下構造が考えられるものの、舟底ピットとの前半部辺りに位置するであろう焼成部からは地下深くもぐり込んでいる。床面は1層のみしか確認されず、窯体の補修も確実ではないが、複数回の操業が行われたであろうことは、前庭部の土層堆積や、また後章でより詳しく述べられている出土須恵器の分析から明らかである。また窯内には舟底ピット、階段状床面が確認されており、操業時に果たしていたと思われるそれぞれの機能については前述した通りである。舟底ピット付近の窯壁は両側とも粘土が貼り付けられ窯体幅を絞っているようである。階段状床面は配置石と一体的な存在と捉えたが、技術系譜的にどう位置付けられるのか興味深く、後章で再検討したい。煙道については不明確ながら窯尻で直立し地表へは最短距離をとって排気を行ったものと推定している。以上のように、1号窯の調査成果は略記され、小結に代わるものとする。

第3節 灰原

1. 調査の方法（第6図）

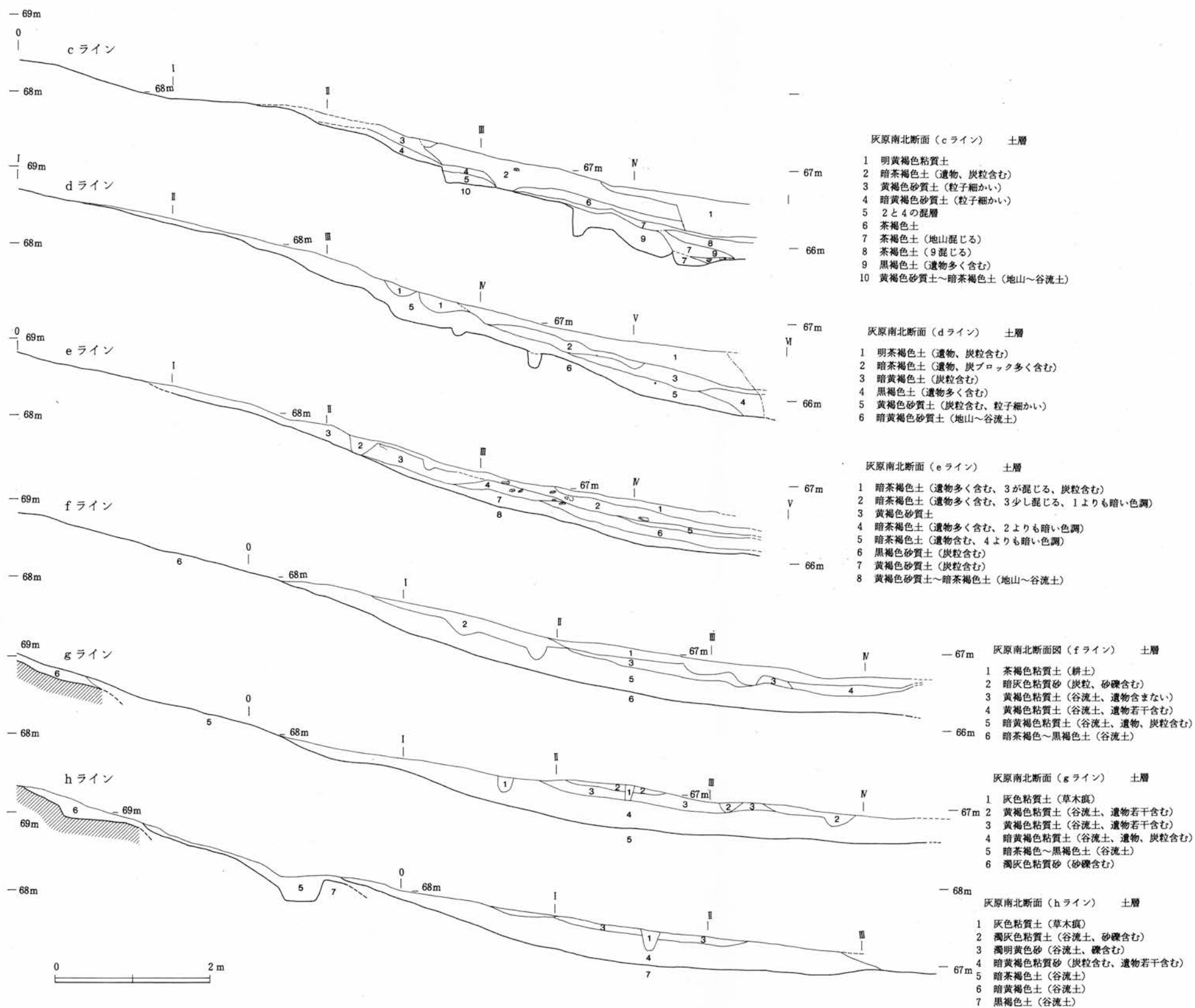
灰原については試掘時に斜面裾から谷央部にかけての広がりが見込まれていた。調査にあつ

ては、大量の出土遺物が予想され、細かく分層して取り上げる必要を感じていた。よって詳細な土層観察のために、調査区内に設定された5 mグリッドの基準杭よりもさらに小枠のグリッドを設定し、掘下げを敢行した。小枠グリッドは、1号窯の仮主軸となった基準ラインの延長線にあわせ、起点は1号窯終点(15m)から北へさらに1 m進んだラインに置いた。小グリッドは2 m角で、灰原想定範囲すべてを網羅するように東西16m、南北14mの範囲で設定された。基準ラインには東西ラインに西からa～iのアルファベット小文字、南北ラインに南から0～Ⅶのローマ数字をそれぞれふった。cラインが1号窯仮主軸と一致するものになる。グリッドの表記については、そのグリッドの南・東のラインの文字・数字を組み合わせて表すことにした。掘下げの際は各ラインはすべて畦を残し、土層の堆積状況を観察、記録している。完掘後はベース面上の精査を行い、若干の小穴を確認している。

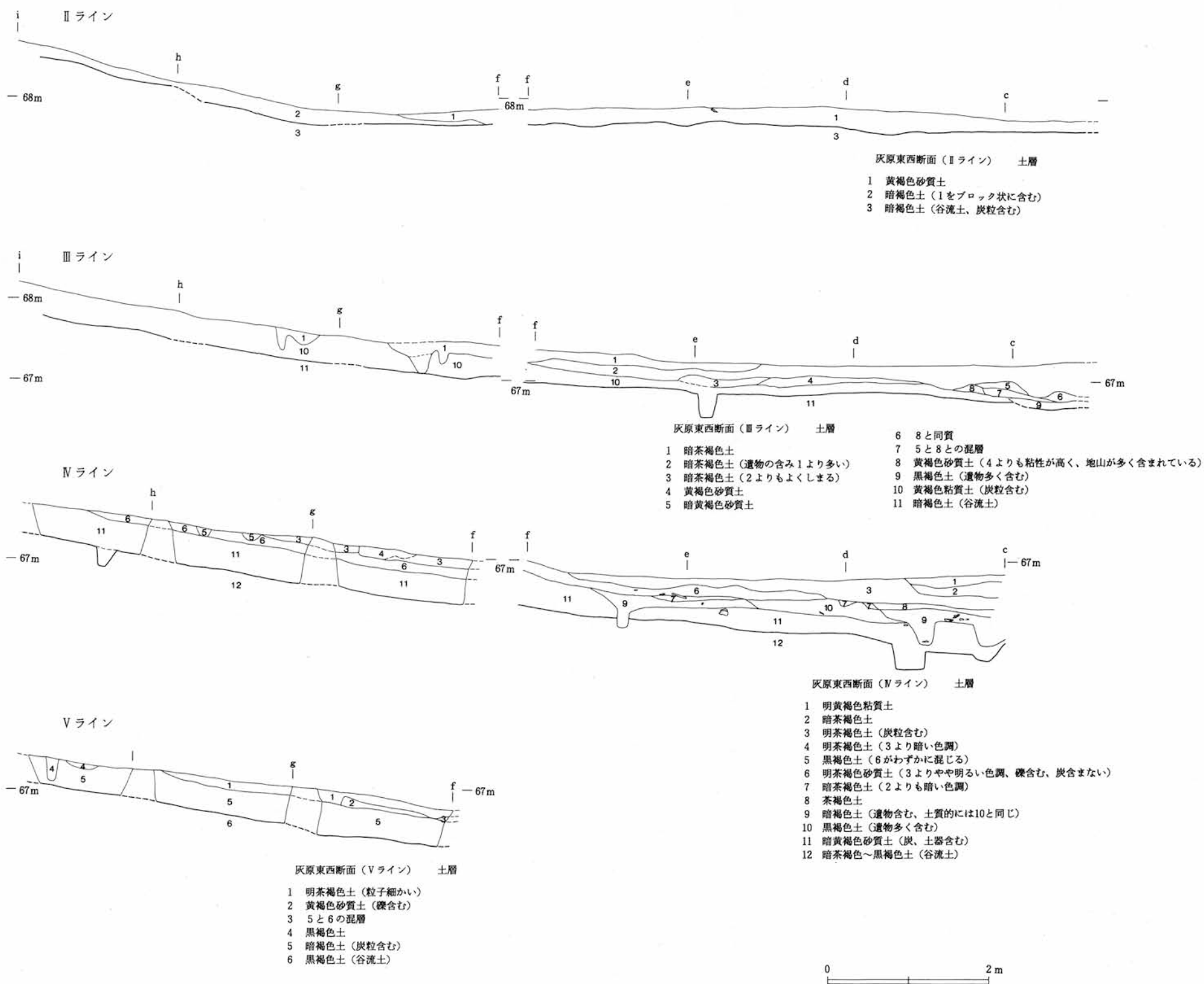
2. 層位(第12図・第13図)

灰原の土層は土質・色調によって(暗)茶褐色土、黒褐色土、黄褐色土、灰褐色土の4種に大別できる。このうち焼土・炭・須恵器が多く含まれる有機質層が、窯の操業によって形成される本来の灰原層と判断される。それは、第12図南北断面ではcラインの2・9、同dラインの1・2・4、同eラインの1・2・4・5・6、第13図東西断面ではⅢラインの2・9、同Ⅳラインの3・4・9・10・11の各層が該当する。これら以外の層は、規則性なく灰原層の上下に堆積が認められる。その中には若干の遺物が含まれる層もあるが、散発的で有機成分に乏しい層であり、灰原層やその間層といった性格は考えにくい。むしろ谷央部のたちわりで確認した流土に類似していると言える。

灰原層は色調・土質的には、第13図Ⅳライン11の土層が地山質であるのを除けば、(暗)茶褐色土か黒褐色土を呈する土層で構成される。基本的には茶褐色土が上位に、黒褐色土が下位に位置する層序をとる。上位の茶褐色土もしくは暗茶褐色土(第12図cライン2、同dライン1・2、同eライン1・2・4・5、第13図Ⅲライン2、同Ⅳライン3・4)はグリッド内にかなり万遍なく分布する。しかし土質は概してしまりがなく、堆積も不均一であり、また草木根状の小穴が多く掘り込まれた状況にある。遺物の含みは概して北西側すなわち標高が低くなるほど多く含まれる傾向にある。下位の黒褐色土(第12図cライン9、同dライン4、同eライン6、第13図Ⅲライン9、同Ⅳライン9・10)は分布がきわめて限定されており、Vd～Vf、Mc、Meグリッドでしか認められない。比較的均質で混じりは少なく、締まりもよい土層である。上位の茶褐色土もしくは暗茶褐色土についてはその不均一性や締まりのなさ、混じりの多さ等から、現在までに耕作等で受けた攪乱やローリングによってかなり変質・変色したものと考えられる。土質的には下位の黒褐色土によく似るため、かつては同色であったものが淡く変色し他の土と混成されて形成されたものと考えたい。灰原層としてのプライマリーな部分を抽出することは非常に難しいと言えよう。下位の黒褐色土は標高の低い位置にしか分布しておらず、形成位置から流動した可能性もある。茶褐色土の下位にある層序が確認される箇所もあるが、前述したように同一層が変質した可能性があり、堆積に明確な時間差を与えることは問題がある。以上のような理由か



第12図 灰原土層南北断面図 (S=1/60)



第13図 灰原土層東西断面図 (S=1/60)

ら、現況の灰原の堆積層序から操業回数を追求することは非常に難しいものと思われる。

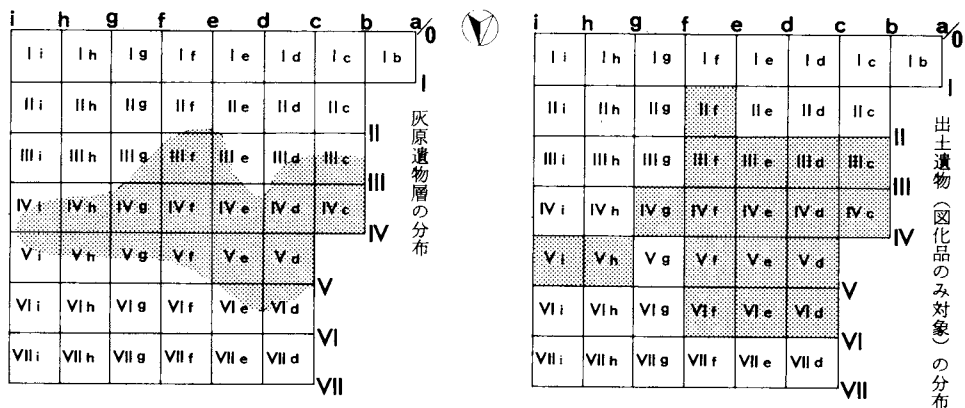
灰原のベース面は I c ~ I i 間では丘陵部で見られた黄褐色粘質土の地山であるが、それ以外では谷の流土となる。灰原が谷がある程度埋まった地形を利用して形成された条件を考えると、谷の流土が灰原の大半のベースとなって当然であろう。灰原層の堆積は基本的に谷地形が活かされて、低標高になる北側が厚く、南側ほど薄かった。I ライン・II ライン間のグリッド列に関しては削平が著しく表土下はすぐ地山となり、堆積土は確認できなかった。1号窯の前庭部の端と灰原の南端は共におそらくこのグリッド内にあったと思われるが、今となっては確認のしようがない。また、東西方向ではやはり低標高になる西側が厚く、東側は薄い状況である。特に g・i ライン間については表土下が谷流土で、灰原の堆積は確認できなかった。結果的には旧地形と、灰原の遺存状況がきわめて明確になり、その状態はあまり良くないものと言える。

3. 遺物の出土状況

灰原の出土遺物の大半は須恵器であり、主として茶褐色土、黒褐色土の両層から得られている。第14図は出土遺物のグリッド別の分布を示したものであるが、これによると d ~ f、III ~ V の周辺に集中する傾向が見られる。しかし層内において須恵器が集積しているといった過密さはなく、むしろ低密度とさえ言える出土状況であった。遺物量はコンテナバット6ケースに及んでいるが、須恵器窯の灰原として予想された面積から考えるときわめて少量と言える。出土遺物の取り上げについては、土層の堆積が当初考えていた以上に不均一であったため、厳密な分層は不可能と判断して、概ね上半をI層、下半をII層とした。結果的にI層が茶褐色土、II層が黒褐色土にほぼ対応することになったが、上下層で出土須恵器に明確な時期差はなかった。

4. 小結

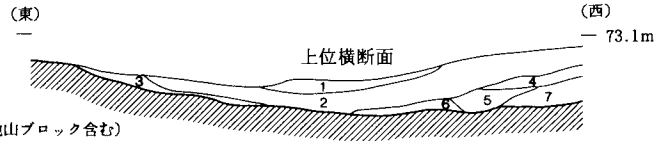
ここまで述べてきたように、灰原の遺存状況はあまり良くないようであり、遺物もまとまって出土することはなかった。第14図のグリッド別の灰原層の分布と出土遺物の分布の領域を比較すると、灰原の遺存が低標高の箇所には良好で、高標高の箇所では削平を受けているような状況が明



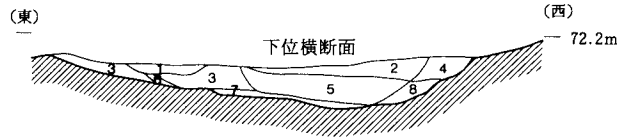
第14図 灰原遺物層・遺物分布図 (S=1/300)

1号落ち込み上位横断面 土層

- 1 茶灰褐色土 (耕土的)
- 2 暗灰褐色土
- 3 茶灰褐色土 (地山ブロック含む)
- 4 茶灰褐色土

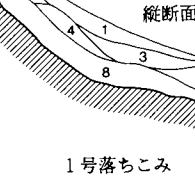


- 5 茶灰褐色土 (暗灰褐色土・地山ブロック含む)
- 6 茶灰褐色土 (地山ブロックの含みが多い)
- 7 暗灰褐色土



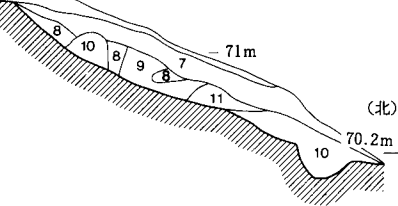
1号落ち込み縦断面 土層

- 1 暗灰褐色土
- 2 茶灰褐色土
- 3 黒褐色土 (1と6の中間的色調)
- 4 茶灰褐色土 (礫まじり)
- 5 明茶褐色砂質土
- 6 黒褐色土 (最も黒っぽい色調)
- 7 茶褐色土 (礫まじり)
- 8 茶褐色土 (やや粘質、粒子細かい)
- 9 暗茶褐色土
- 10 黄褐色土 (礫まじり)
- 11 茶褐色土 (やや暗い、7と9の中間的色調)

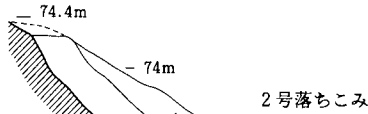


1号落ち込み下位横断面 土層

- 1 茶灰褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 茶灰褐色土 (1とはほぼ同質で、やや黒っぽい色調)
- 4 茶灰褐色土 (礫を含んでいる)
- 5 黒褐色土
- 6 茶褐色砂質土
- 7 茶褐色砂質土 (礫・黄褐色土含む)
- 8 茶褐色砂質土 (7より礫・黄褐色土の含み多い)

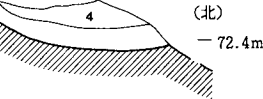


(南)

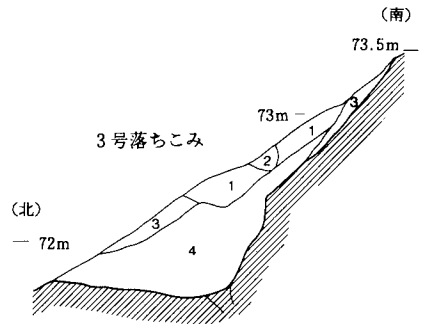


2号落ち込み断面 土層

- 1 黄灰色砂質土
- 2 濁黄灰色砂質土
- 3 灰色粘質土
- 4 灰褐色粘質土
- 5 灰褐色粘質土 (4より若干暗い色調)

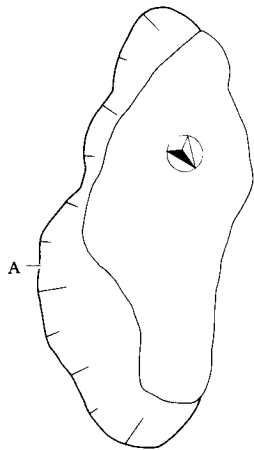


3号落ちこみ

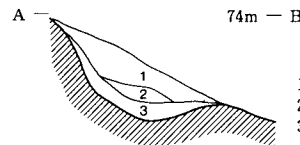


3号落ち込み断面 土層

- 1 黄茶色粘質土 (炭粒含む)
- 2 暗黄茶色粘質土 (炭粒多く含む)
- 3 濁黄褐色粘質土 (砂礫含む)
- 4 灰色砂 (やや粘性を持ち、炭粒含む)

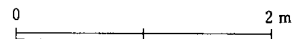


4号落ちこみ



4号落ち込み断面 土層

- 1 黄茶色粘質土 (炭粒含む)
- 2 暗黄茶色粘質土 (炭粒多く含む)
- 3 黄茶色粘質土 (1よりも粘性強く、やや暗い色調)



第15図 落ちこみ実測図 (S=1/60)

確になる。しかし同時に、現状の分布の中心は谷の南西岸、最も1号窯に近接する位置にあり、1号窯の灰原としてはもっとも適切な位置にあるものと換言もできる。調査区内の斜面で窯体は1号窯しか確認されていない。当然、この灰原は1号窯の操業にともない形成されたものと考えており、その分布は1号窯の真南下方の谷肩部の傾斜地に中心を持ちつつ東西に少し広がっているのであろう。灰原は若干調査区外西方の谷底へ向かってもう少し広がっているため、今回の開発を免れて若干は遺存している可能性もある。後世の改変はあったとしても、基本的に灰原の中心部はやはりこの範囲であり、それゆえに残りが良かったとも考えられよう。

第4節 その他の遺構

調査区内において、1号窯と灰原以外で確認できた遺構は、4基の落ちこみと大小無数のピットであった。ピットは丘陵頂部と谷部に多く検出され、斜面には少なかった。柱痕の様に定型的なものは皆無であり、遺物を出土したのも皆無であった。よって形成時期も不明である。以下は4基の落ちこみについてそれぞれ記述することにしたい。

1号落ちこみ（土層のみ 第15図）

1号窯から東へ約14m離れ、調査区のはぼ西端の同じ斜面に位置する。位置する標高は70～75mを測る。調査当初は2号窯と仮称し、窯体と推定していた遺構である。落ちこみは、斜面の傾斜に沿って長く伸びる平面形長楕円形を呈し、裾が屈曲して広がって行くように見える。規模は長径で7.5m、短径で3.5m程度を測る。深さは15～50cmと一定でないが、平均すると30～40cmぐらいであろうか。底面は不揃いで凹凸が見られる。覆土は縦断面で見て11層、茶褐色土、黒褐色土、黄褐色土・灰褐色土などに分層されるが、きわめて不規則・不均一な積層状況であり、全体的に非常に締まりが悪い。覆土の一部には有機成分は少ないが灰原層にやや類似したのがあり、この遺構が窯操業となんらかの関係をもつものと考えたいところであるが、確証はない。出土遺物も皆無であった。不規則・不均一な土層の堆積状況からは、急傾斜地の窪みへ流土が自然堆積していったような可能性も考慮しておく必要がある。1号落ちこみの性格については窯跡と関連する可能性を残すが、やはり自然堆積的な面が大きいように思われる。

2号落ちこみ（土層のみ 第15図）

1号窯と1号落ちこみのほぼ中間、同一斜面に位置し、3号落ちこみと複合する。位置する標高は72～74mを測る。平面形は上位が丸まって下位はハの字状にゆるやかに広がって行き、下端は不明確になる。後世にカットされた斜面裾までも伸びていた可能性はある。現存長は4.1m、最大幅は約7mを測る。深さは最深部では70cmに及んでいる。覆土は5層、基本的に上位が黄灰色砂質土、下位が灰褐色粘質土である。上位の覆土は締まりが悪く流土的な印象を受ける。下位はより締まりが良い。遺物は出土しておらず、遺構の時期・性格を特定することは難しい。1号落ちこみとは規模・形状・層位等が異なるが、その関係については不明である。

3号落ちこみ（土層のみ 第15図）

2号落ちこみの東部に位置し、2号落ちこみと複合している。位置する標高は72～73mを測る。

平面形は不整形円形を呈するようだが、下方は若干カットされ不明確になっている。構造的には斜面を断面L字に掘り込んだもので、底面はほぼ水平で平坦に整形している。現存長は2.1m、最大幅は2.1m、深さは最深部では90cmを越える。覆土は4層に分層されるが、いずれもしまりが悪く、上位の1・2は流土的である。2号落ちこみとの先後関係は層位では確認できなかった。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

4号落ちこみ（第15図）

舌状小尾根の先端部で、調査区のほぼ南東端に位置する。位置する標高は73～74mを測る。平面形は菱形にも見えるがきわめて不整形である。掘り込みは弱く不明確で、底面は平坦ではない。長径3.5m、短径90cm～1.4m、深さは最深部で45cmを測る。覆土は3層に分層され、いずれも炭粒を含んではいるがしまりは良くない。出土遺物はなく、時期は不明である。形状から判断して風倒木痕の可能性が高い。

註

- (1) 木立雅朗「第6章第4節 竹生野遺跡出土須恵器について」『竹生野遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1988年
- (2) 小松市教育委員会の望月精司氏から教示を得た。

第3章 出土遺物

第1節 整理の方法と分類

今回の調査では、1号窯窯内とそれに伴う灰原および周辺部からコンテナバットで30ケース弱の遺物が出土した。遺物の大部分は1号窯に伴う須恵器で、他には土師器、床面に配された石がある。また周辺部から若干量の縄文～近世の遺物が出土した。

現地調査では、遺物は窯内、灰原とも、第2章で記したグリッドの土層ごとに取り上げることが基本とした。そして当初、整理作業は出土地点、層位を重視して実施するつもりであった。しかし1号窯床面の改修が確認できず、遺物を層位的に把握できないこと、また整理を実施する中で第7～14表の遺物観察表でもみるとおり、グリッド・層位を越えての破片の接合はもとより、窯内と灰原間での破片の接合もかなり存在することが明らかとなった。そこで、窯内では焼成具合を重視し、また灰原は遺物量が少ないことも考慮して一括資料と考えることにした。このことは1号窯の操業期間や操業回数と関連をもつものと考えられる。

窯内の須恵器、土師器を、その焼成具合から、①淡灰茶色～灰橙色を呈した生焼けに近い焼成で、最終操業段階での取り残しと考えられる一群（最終段階群）、②堅緻な焼成で青灰色の色調をもち、かつ焼台への再利用が認められない一群（中間段階群）、③堅緻な焼成で降灰や自然釉の付着状況から焼台への再利用が認められる一群（前段階群）に大別した。結果からいえば、最終段階群と前段階群は明瞭に分別でき、中間段階群は大部分が最終段階群に近い様相を示しながらも一部前段階群の個体を含んだ群となる。そして各段階群で各器種の小分類を試み、それに従って口縁部計測法と破片数計測法⁽¹⁾により全点数の計測を実施した。なお図中では須恵器と還元を受けた土師器は断面黒塗りで、酸化焼成の土師器は断面を塗らないことで示し、窯内と灰原間で接合する遺物は大きい破片の出土した地点の図版に載せてある。また文中では特に断らない限り、全て須恵器である。以下、窯内の供膳具を中心に分類の基準を記す。

坏蓋 基本的に1法量と考えられ、天井部は回転ヘラ切り後に回転ケズリ調整を施す個体が大部分を占める。形態から、やや扁平で天井部から肩部にかけてなだらかに移行するaタイプと、扁平なbタイプ、特殊品と考えられるcタイプに小分類した。

有台坏 蓋の有無、法量でⅠ、Ⅱ類に分かれ、ともに基本的に1法量となる。有蓋の有台坏（Ⅰ類）は、台部の形態から特徴的な外端接地する台部（aタイプ）と、断面方形で外展または直立する台部（bタイプ）に小分類した。aタイプの台部は底部外側につく特徴をもつ。有台坏（Ⅱ類）はⅠ類に比べ法量も小さく、1点を除き無蓋でⅠ類aタイプと類似した台部をつける。

無台坏 基本的に1法量で、形態、胎土、調整などからa～dタイプに小分類した。cタイプを除き、底部外面はヘラ切り後をナデ調整または末調整とする点で共通する。丸底風を呈するaタイプは量的に最も多く、体部は直線的にのびる特徴をもつ。bタイプは完形品が多く、形態・胎

土ともまとまりをもつ一群である。底部の器肉は厚く、口縁下部内面を一度薄くした後、端部を肥厚させる特徴をもつ。aタイプより身の深い個体が多い。また胎土は微砂粒を多量に含み、他のタイプと明瞭に区別できる。cタイプは形態、法量ともaタイプに近似するが、窯詰め時に製品ではなく焼台に転用された個体を集めた。aタイプとは異なり、底部に粗いミガキ調整を施す個体が多い。dタイプはbタイプに準じた形態であるが、bタイプとは胎土が異なる個体を集めた。

鉄鉢 量的にかなり多く、1号窯の器種構成の特徴のひとつとなる。a～cタイプに小分類した。aタイプは厚手で、底部をナデのみで仕上げ、調整が簡略化された一群で量的に大部分を占める。bタイプは薄手の精品で、体部下半～底部外面に回転ケズリ調整を加える。cタイプは薄手で口縁部の内屈度合いが大きい。

鉢 すり鉢形態のaタイプと鉢形態のbタイプの2タイプに小分類した。

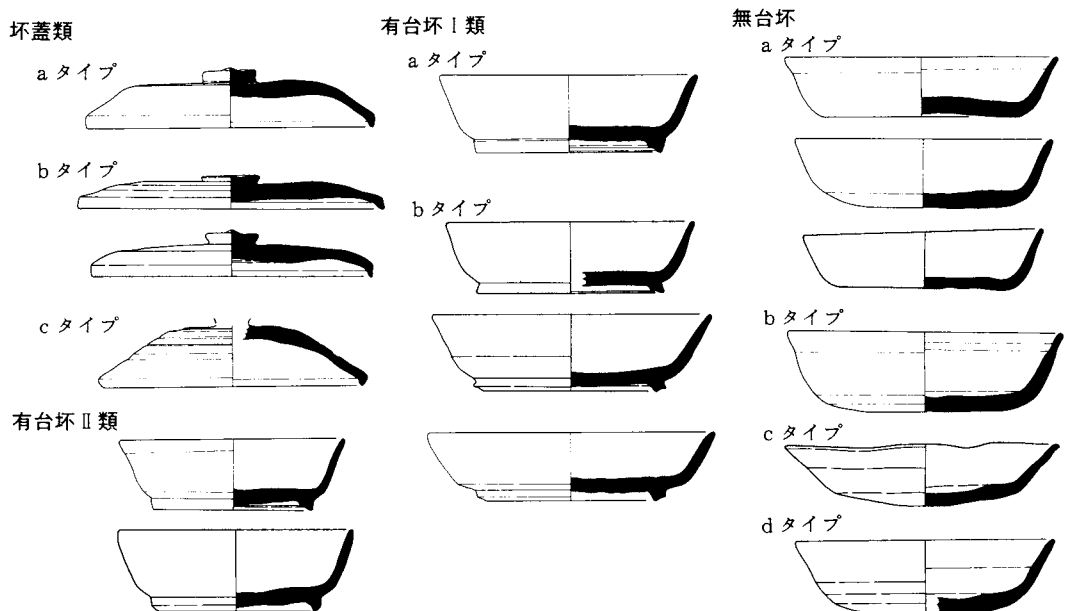
壺・瓶類 いずれも小片での出土が多い。器種が分かるものとして長頸瓶、短頸壺、横瓶、広口瓶があり、短頸壺は2タイプに小分類した。有台で口縁部直立するaタイプが精品であるのに対し、口縁部が外反するbタイプは胎土が粗いものとなる。また口縁部直立気味で胴部が横方向に大きく張る甕に近い形態（口径20cm前後）は、その特徴から壺・瓶類に含めた。

甕 口径から小型（25cm前後）、中型（40～45cm）、大型（60cm前後）に分けた。中型以上には口頸部外面を沈線や波状文で加飾する。

土師器長甕 a、bタイプに小分類した。aタイプはいわゆる「北陸型長甕」とされるもので、須恵器技法でつくられる。bタイプも須恵器技法によりつくられるが、厚手で鉢に近い形態をとる。aタイプが大部分を占める。

土師器小甕 非ロクロ、平底と考えられる個体が1点出土した。

土師器鍋 胴部片があるため分類したが、土師器長甕bタイプの可能性をもつ。



第16図 供膳具の形態分類 (S=1/4)

第2節 出土遺物

1. 窯内出土遺物

坏蓋 (1~15)

2~6が最終段階群、1、7、8が中間段階群、9~15が前段階群に属する。

最終段階群はaタイプのみ確認され、口径15~16cm、器高3cm前後を測る。同工の2、3は丁寧なつくりの鈕を付け、天井部から口縁部へなだらかに移行、口縁端部の面取りはしっかりとす。また天井部の回転ケズリ調整を施す幅は広く、かつ丁寧である。2は天井部が重ね焼きによる歪みで背が高くなる。4~6の口縁端部は短く下方にのび、面取りもあまい。4、6の鈕は小振りでボタン状を呈する。5、6は天井部の回転ケズリ調整を施す幅が狭く、切り離し時の段が明瞭に残る。重ね焼きは2~5が北野博司氏による重ね焼き分類⁽²⁾Ⅱa類で、不明瞭だが6がⅡb類の可能性をもつ。

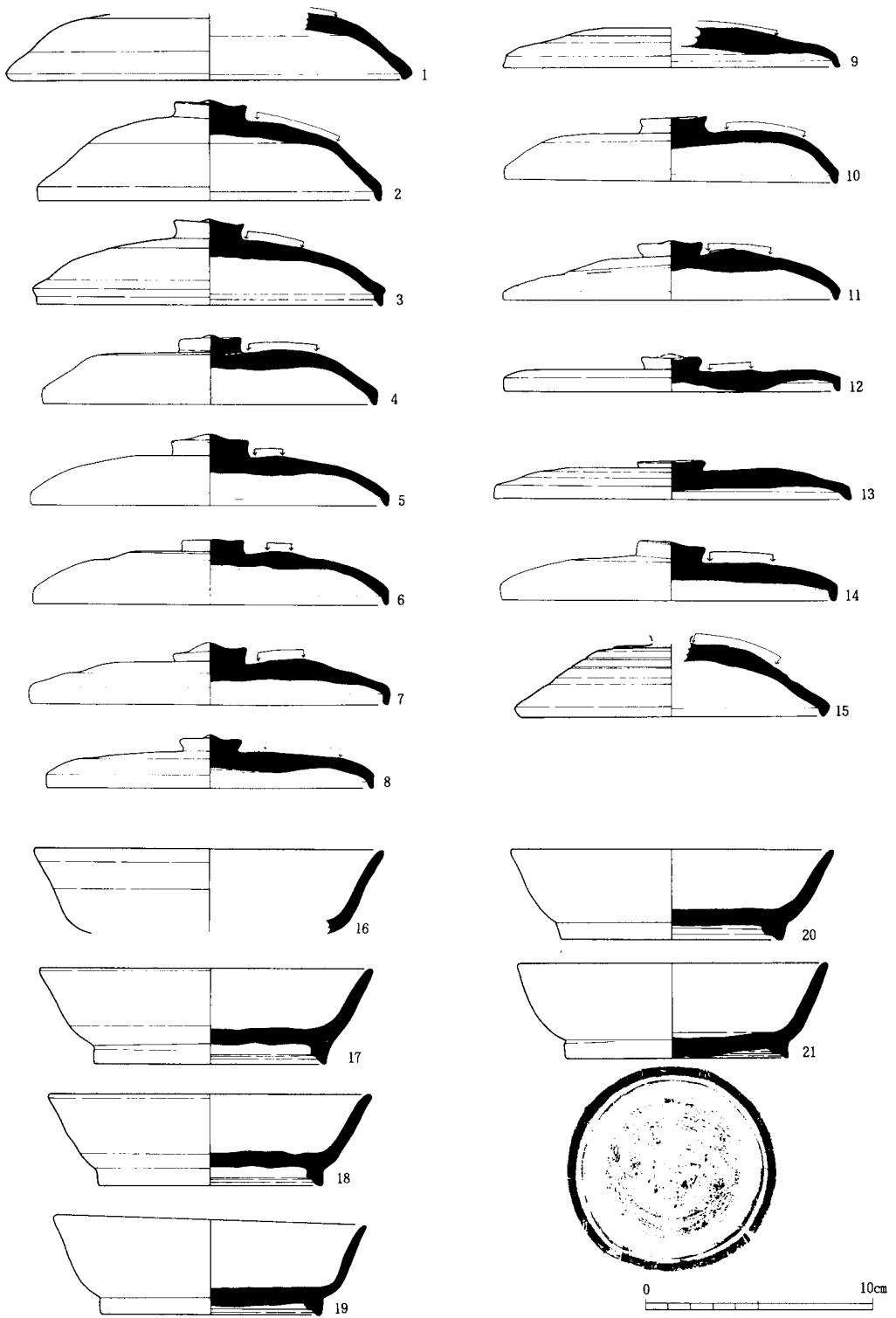
中間段階群に属する1は口径17.6cmと他の個体より大きく、口縁端部は小さな断面三角形状を呈する。7もaタイプで、7区床面より出土したことから窯詰め時の原位置を保つと考えられる。乳頭状の鈕をつけ、口縁端部は下方に長くのびる。8は偏平なbタイプで口径14.8cm、器高2.5cmを測る。天井部に雑な回転ケズリ調整を幅広く施す。また胎土は1~7が石英・長石を含み砂っぽい印象を受けるのに対して、8は石英・長石が通常量含み粘質な印象を受ける。重ね焼きは1がⅡa類で、7、8は不明。

前段階群はa、b両タイプが同量程度存在する。13、15を除き口径15cm前後を測る。9の天井部回転ケズリ調整はかなり雑で、口縁端部は長くのびる。10の鈕の面取りはしっかりとし、口縁端部は下方に短くのびる。11、12の鈕は小さく、5、6と同様に天井部に切り離し時の段が明瞭に残る。13はbタイプで口径16.0cm、器高1.8cmを測る。偏平な鈕をつけ、天井部はナデ調整ですませる。14はbタイプで8と類似した形態をとる。15はcタイプで口径13.6cmを測り、有台坏Ⅱ類以外の器種の蓋と考えられる。肩部まで丁寧な回転ケズリ調整を施した後に3条の沈線を加える。前段階群の重ね焼きはⅠ類とⅡa類が確認され、胎土は一様でない。

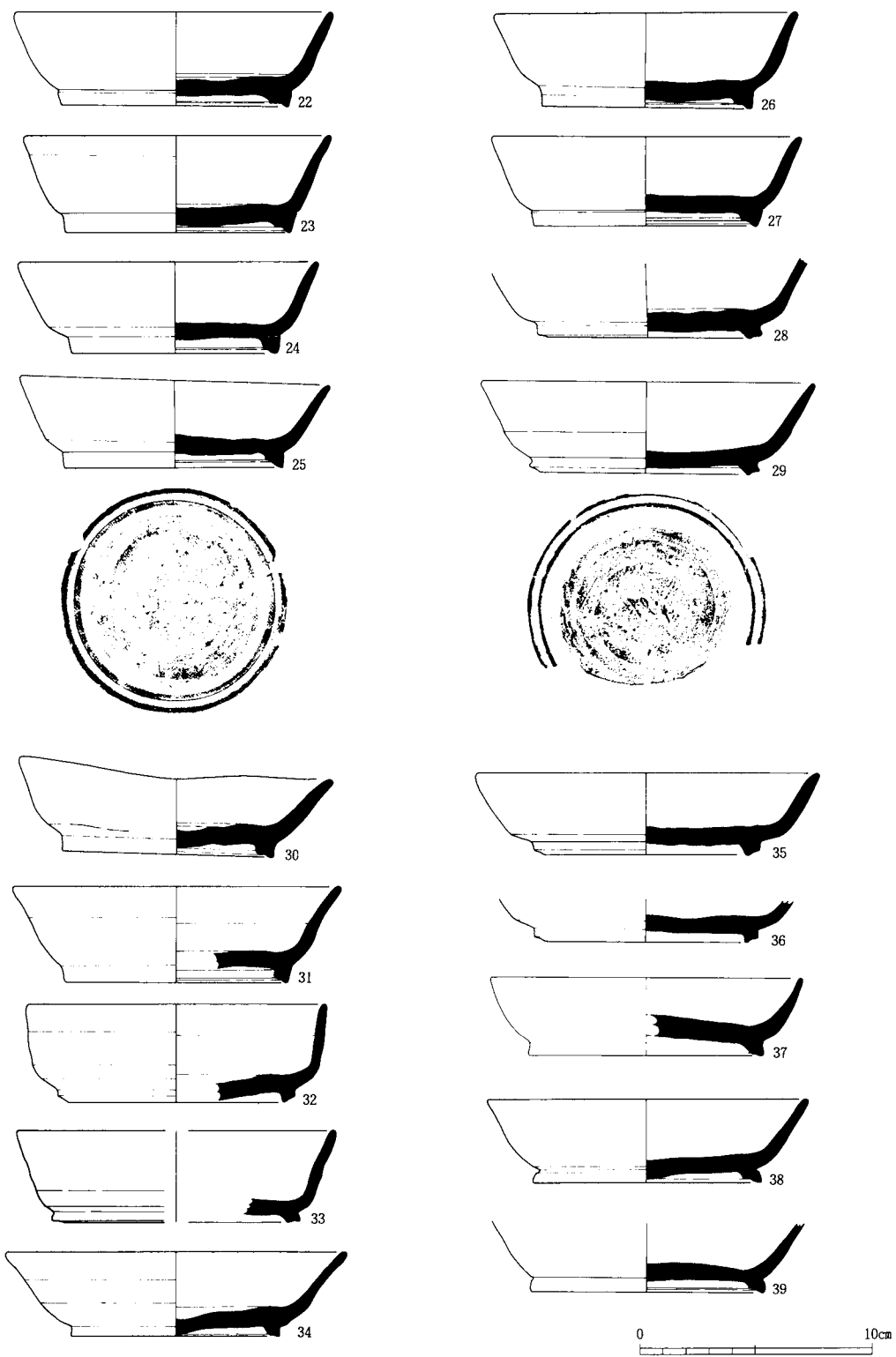
有台坏Ⅰ類 (16~39)

大部分が1~4区床面または窯体崩壊土より出土し、16~21、27、30が最終段階群、22~26、28、29が中間段階群、31~39が前段階群に属する。

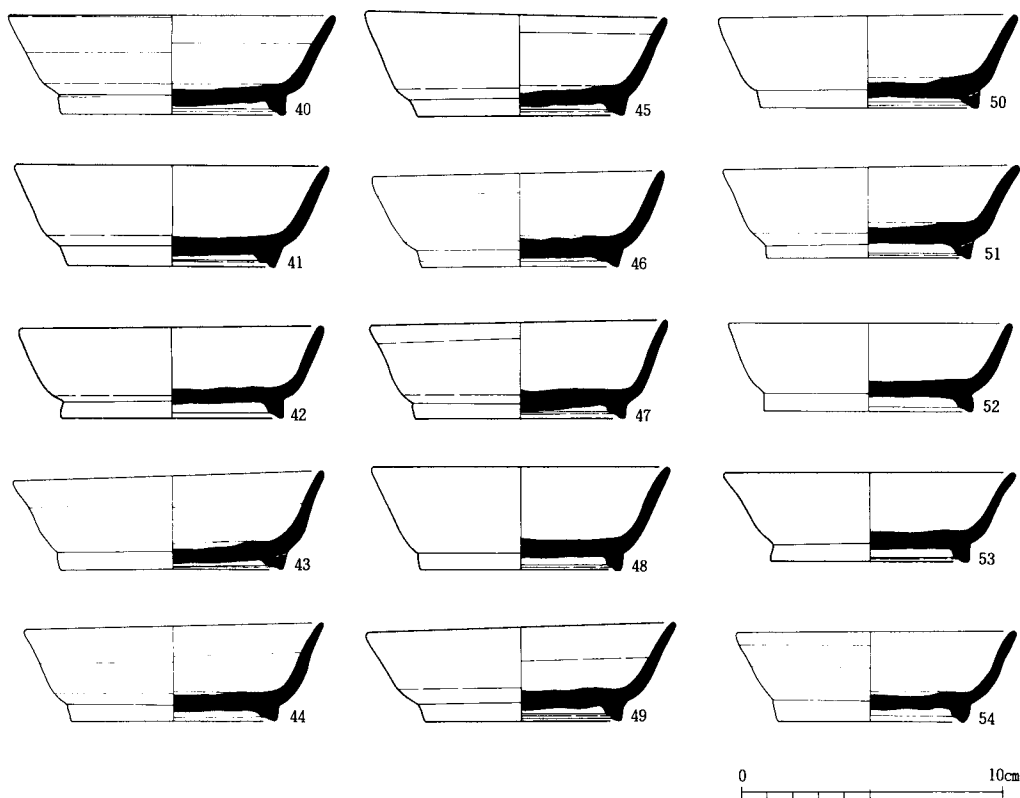
最終段階群は、外端で接地する特徴的なaタイプの台部のみに統一される。重ね焼き痕から有蓋となり、坏蓋2~6が伴うと考えられる。16が口径15.6cmとやや大きいことを除けば、口径13.6~14.9cm、器高4.1~4.4cmと法量にまとまりをもつ。台部は底部外縁につき、体部は外側に直線的に開く。口縁端部が小さく外反する個体が目立つ。17、18の台部は面取りがしっかりとした細身・足高のものであるのに対して、18~21、27は幅広で低い。底部外面の調整は、17が若干のナデ調整、19、27が丁寧なナデ調整、18が未調整、20が全面ナデ調整の後に周縁部のみに回転ケズリ調整、21が全面丁寧な回転ケズリ調整をそれぞれ施すとおりバラエティーに富む。また19、



第17図 1号窯窯内出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第18図 1号窯窯内出土遺物実測図(2) (S=1/3)



第19図 1号窯内出土遺物実測図(3) (S=1/3)

21、27の底部内面にはナデ調整を加える。胎土はいずれも近似し、石英・長石の細粒子を通有量含み砂っぽい印象を受ける。30は焼き歪み、焼き割れが著しい。自然釉の付着状況や床面に配された石との融着痕・焼成具合から、後述する無台坏cタイプと同様に窯詰め時に逆位に伏せて焼台に転用された可能性が高い。底部外面の調整は雑なナデ調整を施す。

中間段階群はaタイプの台部(22~26)が主体を占める一方、外展するbタイプの台部(28、29)が定量存在する。法量はaタイプが口径13.2~14.1cm、器高4.0~4.4cm、bタイプの29が口径14.6cm、器高4.1cmを測り、bタイプの口径が若干大きい数値を示す。前者のタイプの形態の特徴は最終段階群と一致する。底部外面の調整は、ナデ調整の後に外縁を棒状の工具により回転ナデ調整する22、23、25とナデ調整のみの24、26に分けられる。また23、26の底部内面全面にナデ調整を加える。外展するbタイプはともに台部畳付部分をくぼませ、体部下半の張りが弱い点で共通する。底部外面の調整は28が丁寧な回転ケズリ調整を施すのに対して、29は未調整である。また胎土は最終段階群とほぼ同質で、またa、bタイプ間で明瞭な違いを見いだせない。

前段階群はいずれも焼台に再利用し、焼き歪みが大きいため全形を伺える資料が少ない。aタイプの台部(31)は量的に少なく、大部分がbタイプの台部(32~39)となる。31の底部外面には爪状圧痕が残る。正位置で焼台に再利用したため口縁部は外側にひろがる。bタイプは全形の分かる35、37、38でやや扁平な器形を呈し、体部はほとんど腰が張らず直線的に外傾する。台部は畳付部分をくぼませることは共通するが、内端接地する台部を直立してつける32、35、36、細

身の同様な台部を外展気味につける33、34、外端接地する台部を外展気味につける37～39に細分できる。そのうち37～39の台部はaタイプにつながる形態と考えられる。底部外面の調整は粗いナデ調整もしくは未調整であり、回転ケズリ調整を施す個体はない。また35、36の台部はかなり内側につく。31～34は焼き歪みが大きい。胎土は石英・長石の細粒子を多量に含み砂っぽい34、38、細粒子を通有量含み砂っぽい31、33、37、細粒子を多量に含み粘質な39、細粒子を通有量含み粘質な32、35、36と、先の2群と比べ多様な様相を示す。

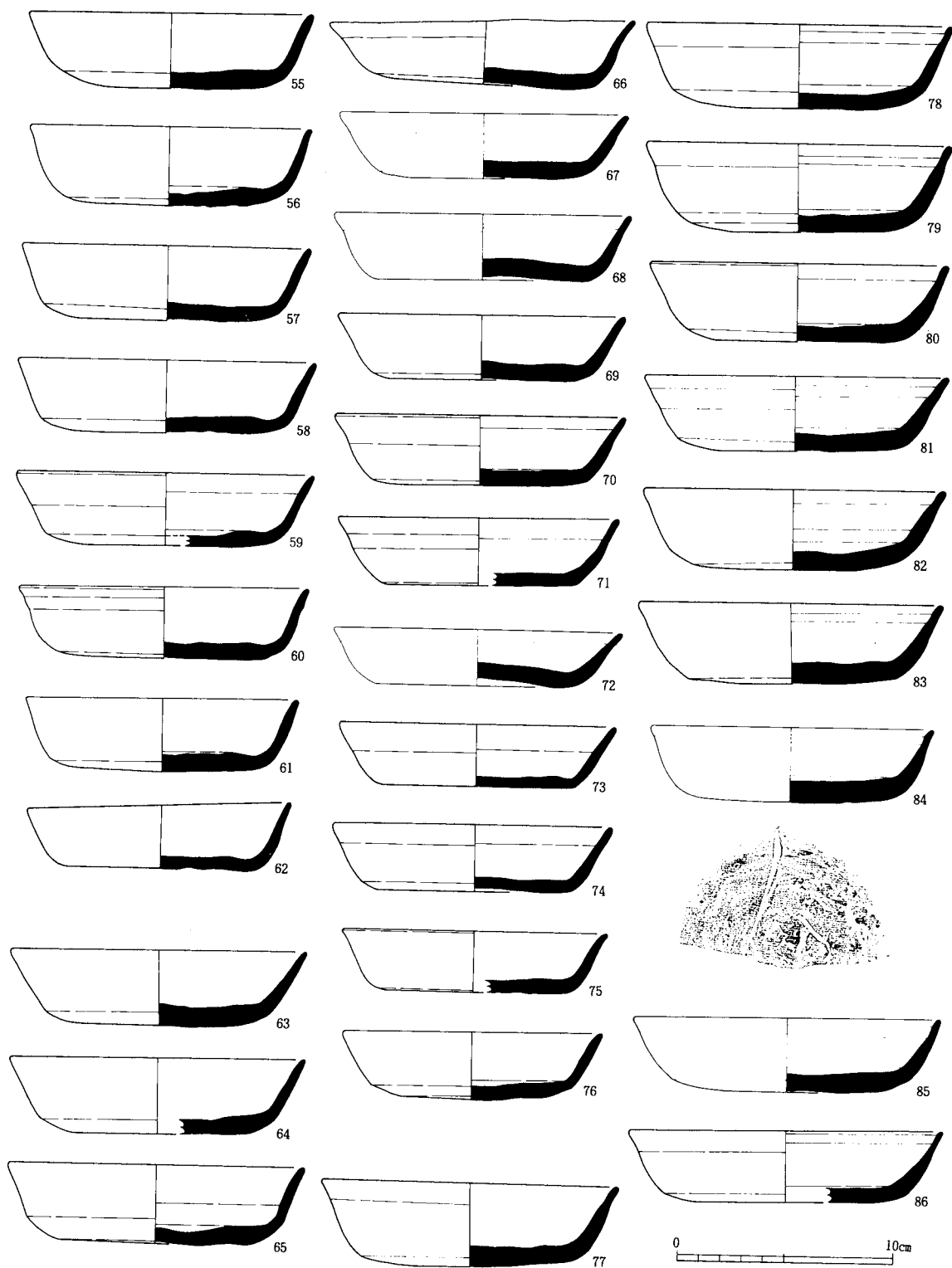
有台坏Ⅱ類（40～54）

無蓋と考えられる有台坏Ⅱ類は全て最終段階群に属し、有台坏Ⅰ類と同様に1～4区床面または窯体崩壊土から大部分が出土する。法量は40～51が口径11.5～12.7cm、器高3.6～4.1cmに、52～54が口径10.9～11.2cm、器高3.5～3.6cmを測り、基本的に1法量と考えられる。有台坏Ⅰ類aタイプに準じた形態を呈し、外端で接地する特徴的な台部は底部外縁につき、体部下半で丸味をもちながら口縁端部を外反気味に仕上げる。台部は42、48、52などの細身で足高な印象を受ける個体、41、43、46などの幅が広く低い印象を受ける個体、両者の中間的な形態を呈する個体と、有台坏Ⅱ類と同様に細部での形態差が確認できる。底部外面の調整は42、44、50、51は回転ケズリ調整、45、47、48、53、54は未調整、他はナデ調整と、やはり一様でない。また42、47、52の底部内面全面にはナデ調整を加える。これらの台部の微細な形態差と底部の調整との間に相関関係を見いだせない。胎土は石英・長石の細粒子を含み砂っぽい点で共通し、その重ね焼き痕から有台坏Ⅱ類のみを積み重ねた焼成が復元できる。

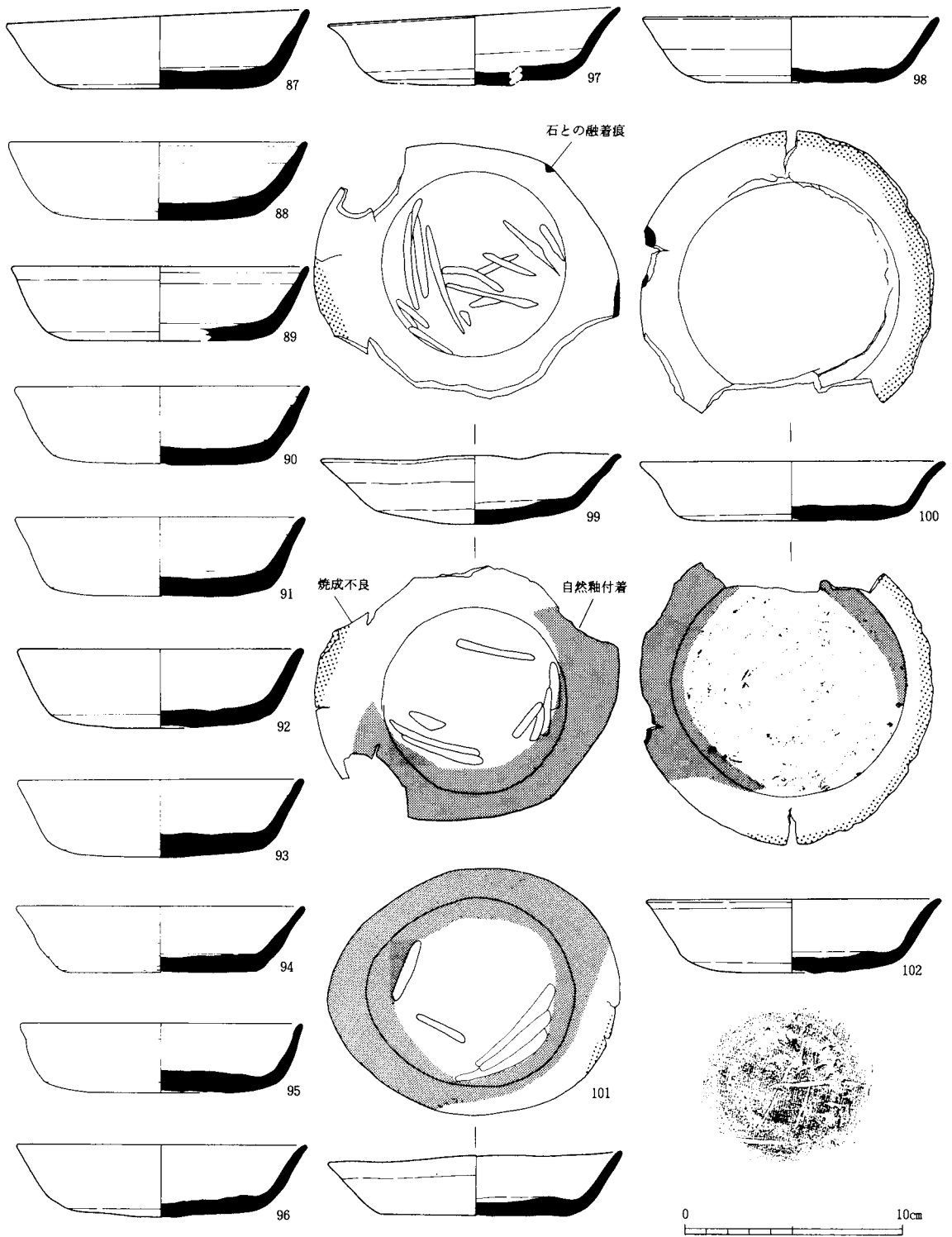
無台坏（55～116）

個体数ではもっとも多い。59、61～63、67、71、74、77～79、81～83、89、94、95、107などは階段状の床面より出土し、窯詰め時の原位置を保つと考えられる。焼成具合から55～62、77～105が最終段階群に、63～76が中間段階群に、106～116が前段階群に属する。偏平な丸底風を呈し、体部が直線的に立ち上がるaタイプと、底部厚手で丸底を呈し、特徴的な口縁部をもつbタイプ、形態的にはaタイプに準じ、窯詰め時に伏せ置かれ焼台に転用されるcタイプが確認できる。重ね焼き痕から同器種のみを重ね焼きを基本にすると考えられる。

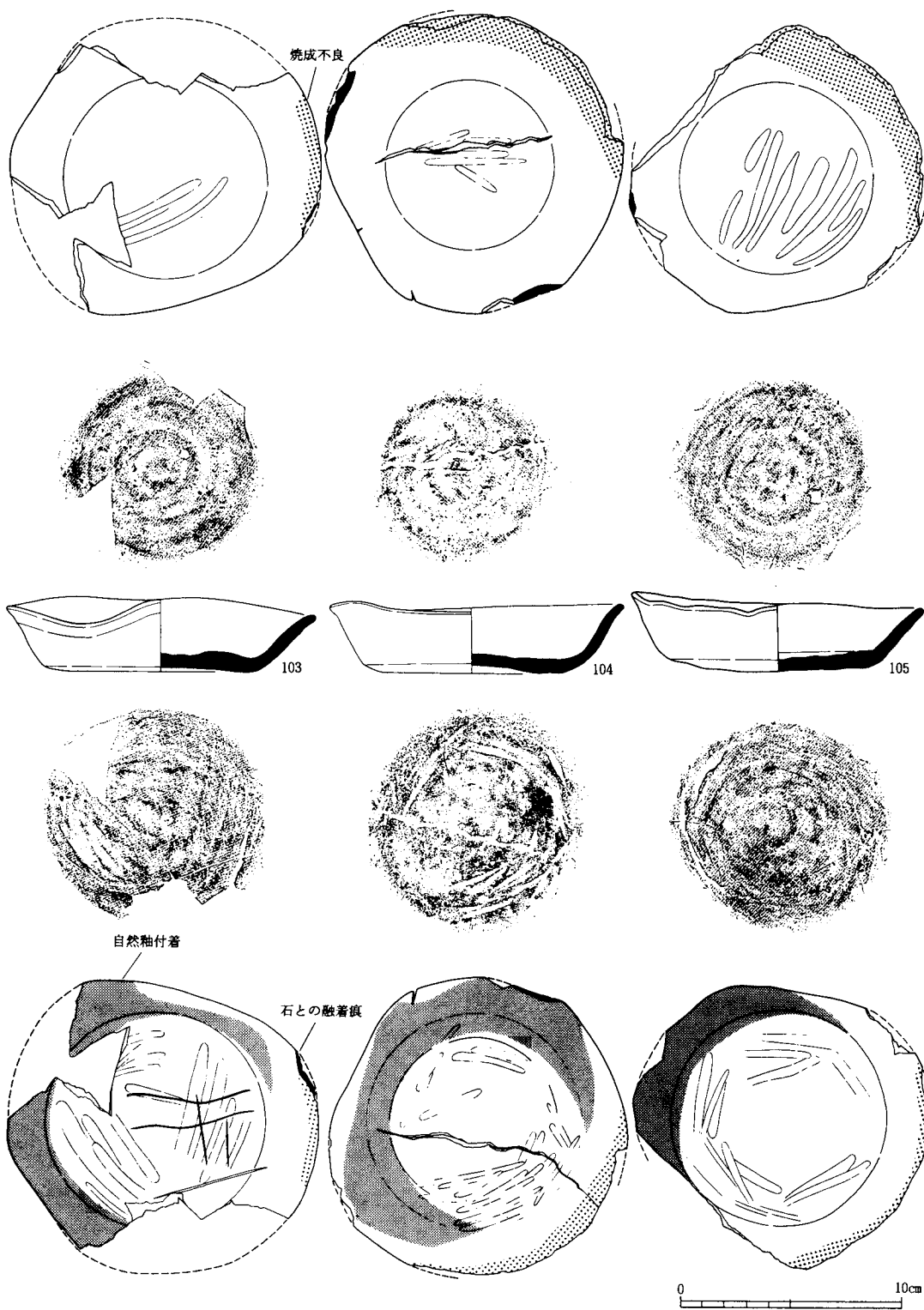
最終段階群は55、56、58、59、61、62、95がaタイプ、77～94がbタイプ、57、60、96～105がcタイプとなる。aタイプは量的に最も多く、法量から口径13.2～14.0cm、器高3.5～3.8cmを測る個体（55、56、58、59）と、口径12.5～12.8cm、器高3.0～3.5cmを測る個体（61、62）に細分することが可能である。底部と体部の境は内面を強く押さえて明瞭に屈曲させる個体が多い。底部外面の調整は基本的に若干のナデもしくは未調整である。61、62は法量が小さく、箱型に近い印象を受ける。石英・長石の細粒子を含み粘質な印象を受ける胎土のみが確認できる。bタイプは焼成があまり良くなく、完形に近い形で出土する個体が大部分を占める。形態の特徴と白色・黒色の微砂粒を多量に含む胎土の特徴から明瞭にaタイプと弁別できる。法量は口径13.2～14.6cm、器高3.2～4.2cmとまとまりをもって分布し、aタイプより若干深身となる。口縁下部を一度ヨコナデ調整により薄くした後に端部を肥厚させる共通点を有し、底部外面のナデ調整はaタイプより丁寧である。84は同窯出土資料で唯一のヘラ記号「/」が底部外面に見える。また縞状に



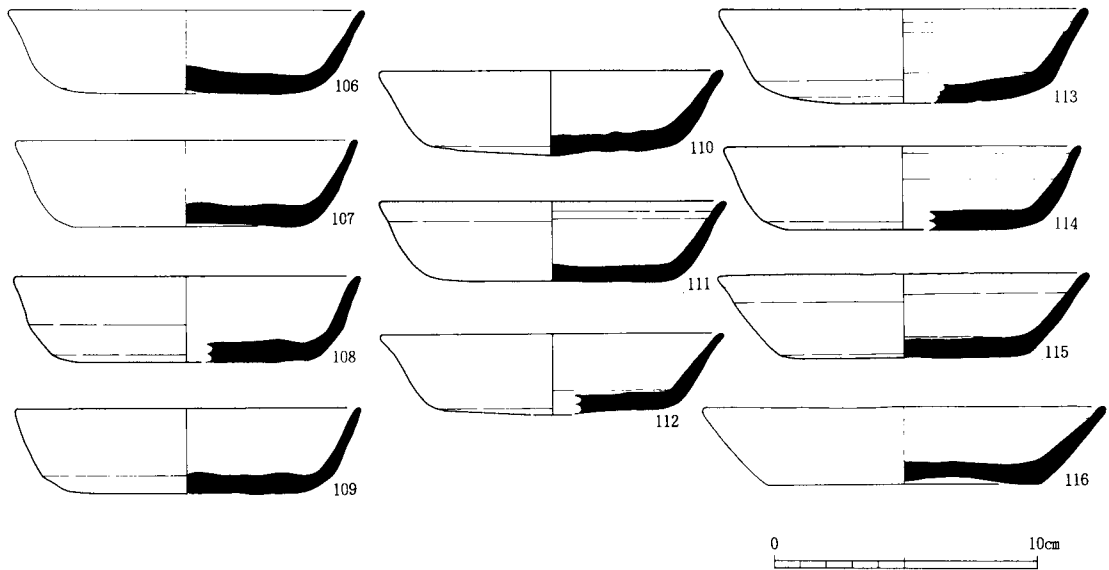
第20図 1号窯窯内出土遺物実測図(4) (S=1/3)



第21図 1号窯窯内出土遺物実測図(5) (S=1/3)



第22図 1号窯内出土遺物実測図(6) (S=1/3)



第23図 1号窯窯内出土遺物実測図(7) (S=1/3)

2種類の土が混ざることから成形方法が明瞭に確認できる。89は窯詰め時に割れたのか、接合した個体は別個の焼成具合を示す。89～94は平底に近い形態を呈する。cタイプは形態、胎土ともaタイプと共通するが調整・焼成方法で大きく異なる。まず焼成方法だが第21、22図で示すとおり体部～口縁部が全周にわたりひび割れ、かつ外傾度合いが著しい。体部外面に半周程度の自然釉の著しい付着が視認でき、その反対側の口縁部は生焼けに近い状態である。また104でみるように口縁端部2箇所程度に石との融着痕が残り、底部外面に直径9.5～10.5cmの自然釉・降灰の付着しない部分がある。これらのことから、乾燥過程を経た個体を窯詰め時に製品でなく、焼台に転用し、床面に配された石の上に逆位に伏せ置いたものと考えられる。また底部の調整はaタイプとは異なり、何らかのミガキ調整を加える個体が多い。そのミガキ調整は内面は粗く一定方向におこなう傾向をもつのに対して、外面は周縁部を中心に比較的に複数の方向からおこなう傾向をもつ。ただし調整は99、103～105は両面ナデ調整の後にミガキ調整を、60、96、101は外面のみにミガキ調整を、96は内面のみにミガキ調整を施すとおり一様でない。また57、98、100は外面のみに軽いナデ調整を、97は両面にナデ調整を施し、焼成痕がなければaタイプと区別つかない個体も存在する。このことからcタイプはaタイプと深い関連性を有し、ミガキ調整を加えた個体群を中心に任意に焼成の前の段階に焼台に転用された一群と位置付けられる。

中間段階群はaタイプのみが確認できる。法量は最終段階群と同じ分布状況を示し、口径13.2～14.5cm、器高2.7～3.8cmを測る個体(63～74)と、口径12.3～12.6cm、器高2.9～3.3cmを測る個体(75、76)に細分可能である。最終段階群のaタイプと比較して、平底風を呈するものが目立ち、また体部の外傾度合いが大きい。底部外面の調整は簡単なナデ調整のみを施す。胎土は粘質な印象を受ける64、65を除き、石英・長石の細粒子を非常に多く含み砂っぽい印象を受ける個体となり、最終段階群とは異なる。

前段階群は a、b タイプが確認でき、前者のタイプが大部分を占める。a タイプの法量は口径 13.2~13.9cm、器高 3.2~3.5cm を測り、最終段階群・中間段階群と同様な分布状況を示す。丸底または丸底風を呈し、体部外面の調整は未調整または若干のナデ調整となる。胎土はいずれも粘質な印象を受ける。108、109の内面は体部と底部の境をヨコナデ調整で強く押さえることで明瞭に屈曲させ、最終段階群に近い形態を呈する。110、111の口縁部は肥厚する。b タイプは形態、調整、胎土とも最終段階群とほぼ同じだが、比較的薄手のものが多い。焼台に再利用したため 116のように体部の外傾度合いが大きい個体もある。

鉄鉢 (117~124)

量的にかなり多く、器種構成の特徴のひとつとなる。出土状況から階段状床面上半部でも焼成がおこなわれた可能性をもつ。焼成具合から 119、121が最終段階群、117、118が中間段階群、120、122~124が前段階群に属し、また先述のとおり口縁部の形態などから a~c のタイプに小分類できる。a タイプが量的に大部分を占める。いずれも口径 16~19cm を測り、同質の胎土を使う。最終段階群の 119は a タイプで器肉は厚く、内湾する口縁部は端部先細りとなる。121は b タイプに属する薄手の精品で、a タイプが底部外面をナデ調整で雑に仕上げるのに対して、胴部下半を含めて丁寧な回転ケズリ調整を加える。また口縁部下外面に沈線状の調整がかすかに残る。中間段階群 117、118は薄手の c タイプで内屈度合いが大きい。118は小片のため復元径に不安が残る。前段階群 120、122~124は a タイプで底径は大きく、底部と胴部の境は丸味をもつ。また内屈度合いは弱い。口縁端部を丸く仕上げる個体の他に、小さくつまみ上げる個体(122)も存在する。なお a タイプは重ね焼き痕から同器種を積み上げた焼成が復元できる。

鉢 (127)

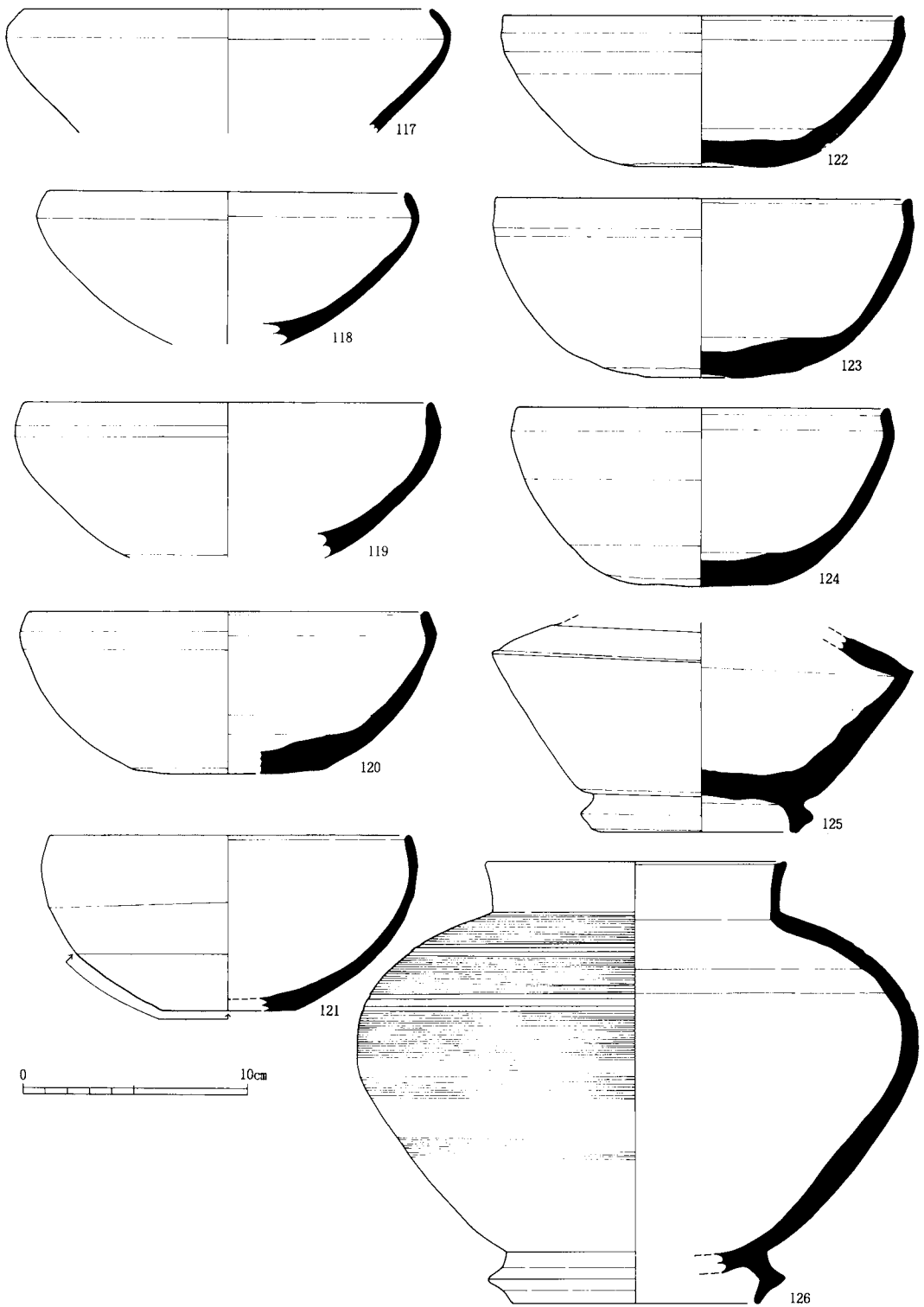
すり鉢状を呈する b タイプの鉢 127は前段階群に属し、口径 19.7cm を測る。肥厚する口縁端部は内傾して面をとり、内湾気味の胴部にカキメ調整を施す。

壺・瓶類 (125、126、129)

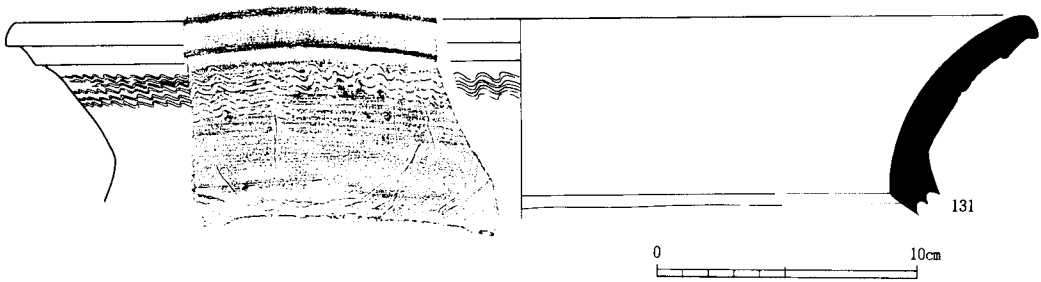
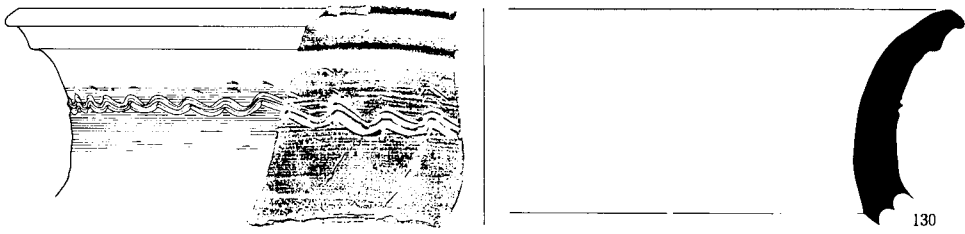
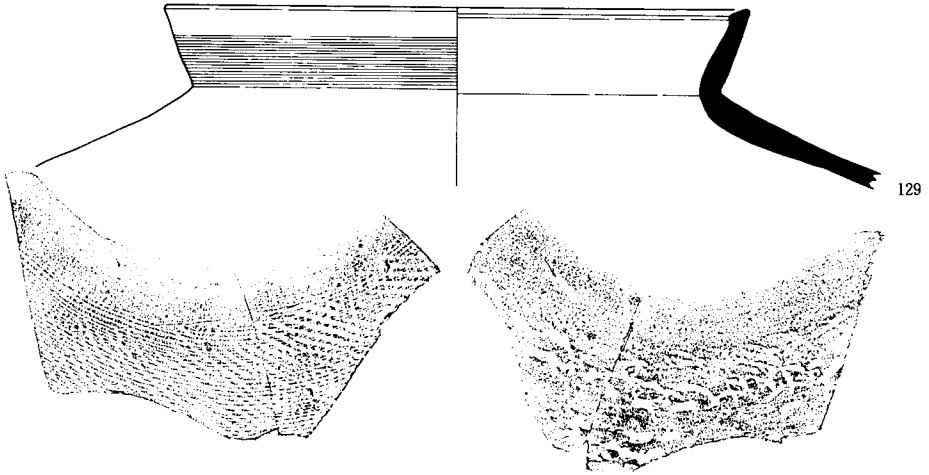
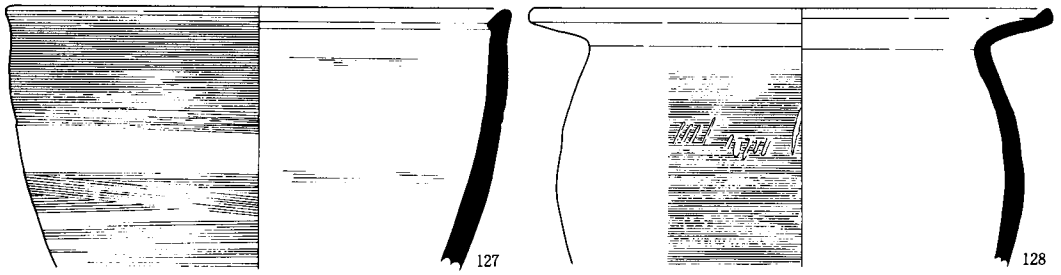
胴部小片を中心に少量出土した。長頸瓶 125、壺 129は中間段階群に、短頸壺 a タイプ 126は前段階群に属し、最終段階群に属する個体は胴部小片 1点のみである。125は肩部を鋭くつくり、端部が嘴状にのびる高台をつける。蓋をせず正位で焼成したと考えられる。126は口径 13.4cm、器高 20.3cm を測る。口縁部は直立し、内傾する端部はやや肥厚する。胴部は上半で最大径をとり、外面はカキメ調整を施した後に 2条 1単位の沈線を 2段加える。高台端部は長頸瓶と同じく嘴状にのびる。また写真図版 18でみるように焼台に再利用した際の石が融着する。129は甕に近い形態を呈すると考えられる。第 1節に述べたとおり、口縁部直立し、横方向にのびる胴部外面にカキメ調整を加えた特徴をもつ一群(口径 20cm 前後)を壺類に分類した。129は肥厚する口頸部外面にカキメ調整を施す。

土師器長甕 (128)

前段階群を主体に前庭部から少量出土した。全て須恵質に焼成される。128はいわゆる「北陸型長甕」で須恵器技法によりつくられた a タイプである。口径 20.2cm を測り、口縁端部を上方に小さくつまみあげる。胴部外面に平行叩きの後カキメ調整、内面にヨコナデ調整を施し、胎土は石



第24図 1号窯窯内出土遺物実測図(8) (S=1/3)



第25図 1号窯窯内出土遺物実測図(9) (S=1/3)

英・長石粒子を多く含み、一見して須恵器器種のそれとは異なる。

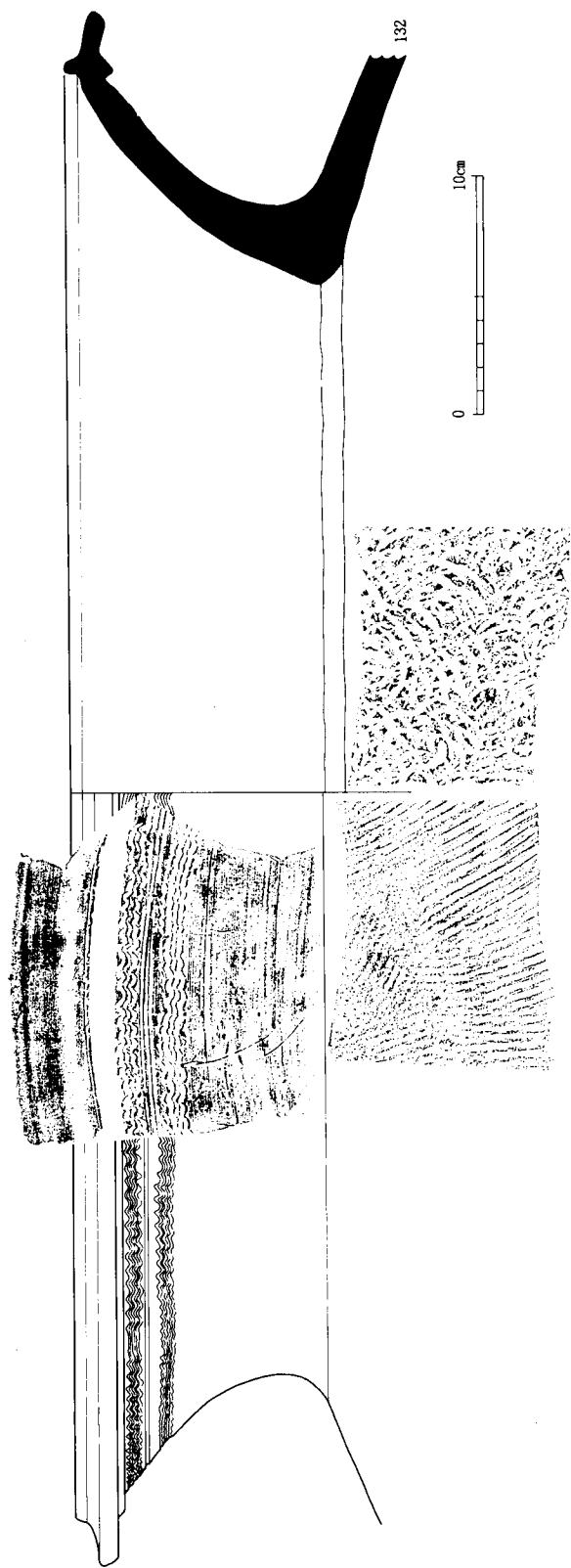
甕 (130～133、135～138、140～143)

甕は焼台に再利用された個体が大部分を占め、明瞭に最終段階群に属する個体は確認できない⁽³⁾。132、133の大型の甕に接合すると考えられる胴部片が多く、最終操業時より前の操業で甕の不良品が多く発生したのかも知れない。焼台の在り方から注目される事例である。また第1表のとおり焼台に再利用したため、文様の分かる個体は半数程度である。外面は内堀信雄氏による文様分類⁽⁴⁾H a類が28%と最も多く、以下H c類17.6%、H b類2.8%で、H d類は確認できない。また内面はD a類が39.2%、D c類10.4%となり、D a類が圧倒的に多く、D b類は確認できない。文様の組み合わせではH a類+D a類が16%、H c類+D a類9.8%、H a類+D c類6.6%となり、H a類+D a類の組み合わせが主体を占める。また原体復元はおこなわなかったが肉眼観察時には、各類とも少なからぬ数の原体を使用しているとの印象を受けた。

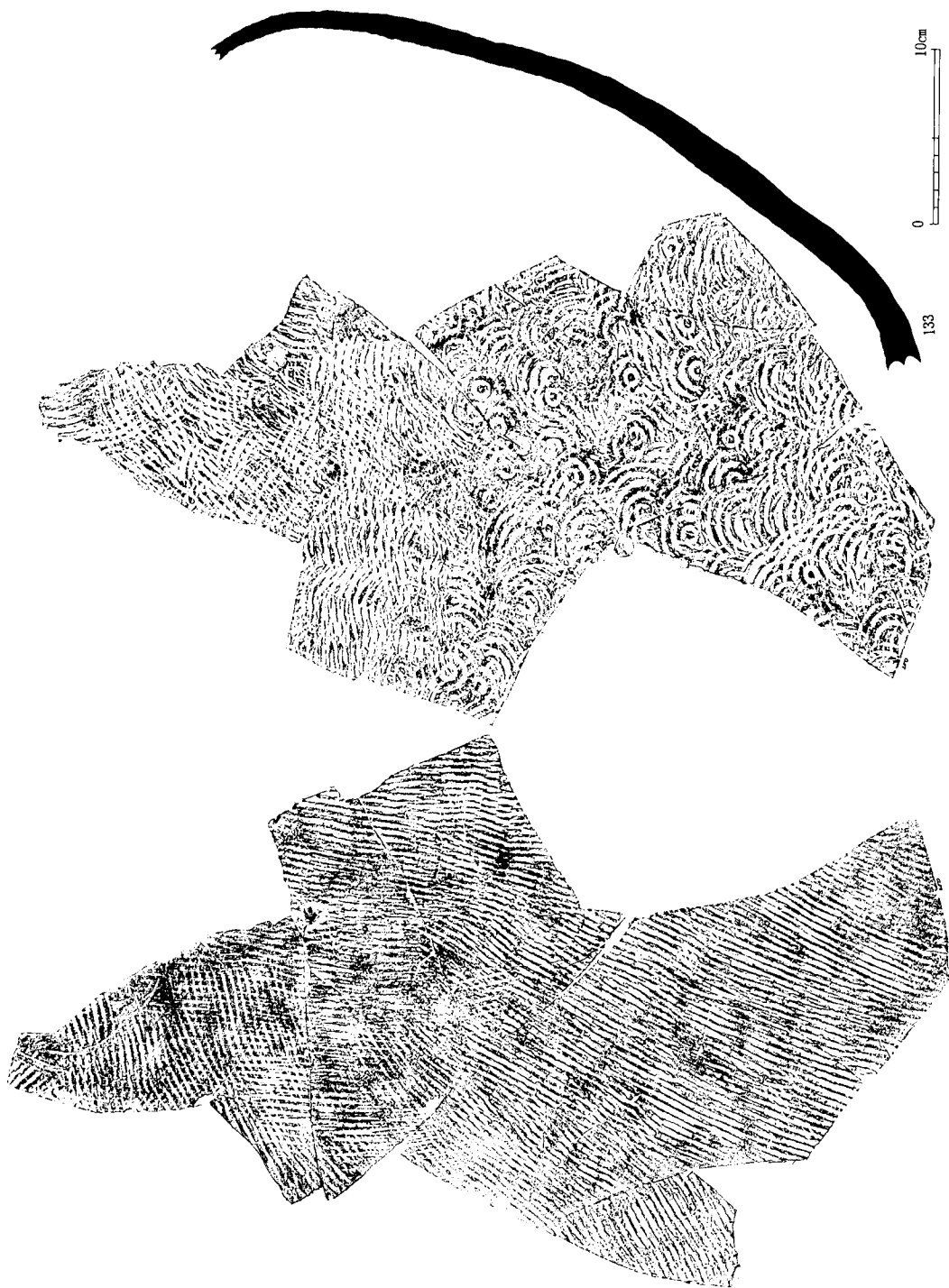
130、131は中間段階群に属する中型品で、131で口径約40cmを測る。いずれも口縁外端部を斜め下方に小さく嘴状にのぼす。口頸部外面はカキメ調整の後に小さな突帯と6条1単位の波状文で加飾する。130は小片のため傾きに不安が残る。132は前段階群に属する大型品で口径約62cmを測る。横方向にながくのびる口縁部内外面ともに突帯を貼り付ける。口頸部外面を3条1単位の波状文と2条1単位の沈線で加飾する。胴部外面にH c類、内面にD c類の文様が確認できる。133は前段階群に属する大型の甕胴部である。外面は木目痕が疎なH a類、内面はD a類となるが、いずれも上半と下半では原体および叩き方が異なる。外面は下半を右上がりの叩きであるのに対して、上半を格子状に密に重ねて叩く。また内面は下半は文様が明瞭に確認されるのに対して、上半は異なる原体を使用して密に叩くため、青海波状の文様となる。135～138、140～143は甕胴部の拓本で、中間段階群の140を除き前段階群に属する。135は彫りの深いH a類+D a類、136は彫りの深いH a類+D c類、137はH a類+木目痕の密なD a類で外面にカキメ調整を加える。138は彫りが浅く木目痕が疎なH a類+径の大きいD a類、140は木目痕が疎なH b類+D a類で外面にカキメ調整を加える。141は木目痕が密なH b類+D a類、142は木目痕が疎なH b類+D a類で外面にカキメ調整を加える。143の外面は木目痕が疎なH a類とH c類が、また内面には径の大きいD a類がそれぞれ認められる。なお134、139は灰原から出土した。

床面に配された石 (第2、3表)

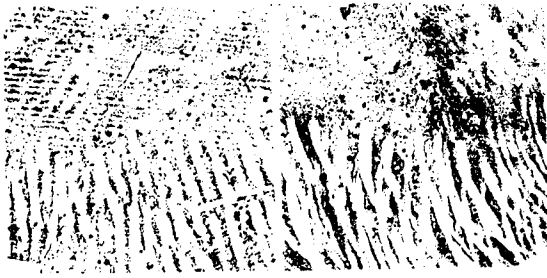
第2章で述べたとおり、焼成部には製品の滑落を防ぐ目的で、床面を階段状に構築するとともに石を埋め込んでいる。特に遺物として実測を実施しなかったが、窯内と灰原から出土した床面に配された石(以下、石と略する)の法量、重量などについて述べる。石の材質は全て長石を多く含んだ花崗岩で、やや大きめの石英の結晶も見受けられる。そして床面に埋められた約1/4程度の部分を除き、降灰で濁白黄色を呈する。被熱により長石が溶解し、内部まで脆くなった個体が多い。また石は河川などの作用で丸くなった個体は少なく、どちらかといえば原石に近い印象を受ける。本窯跡が花崗岩などの火成岩で構成される宝達山系の裾野に位置することや、調査区の地山中に含まないことから、やや離れた花崗岩の露頭地点から採取、使用した可能性が高い。



第26图 1号窯窯内出土遺物実測図(10) (S=1/3)



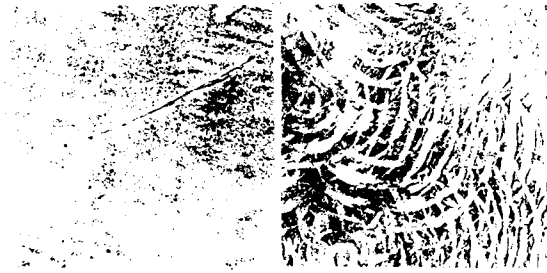
第27图 1号窯窯内出土遺物実測図(1) (S=1/4)



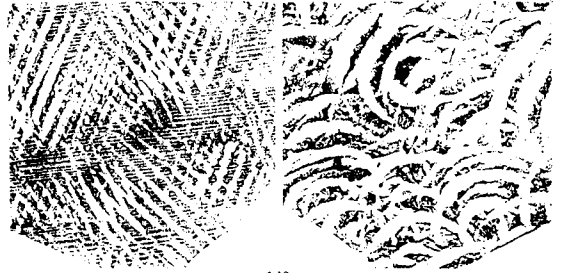
134



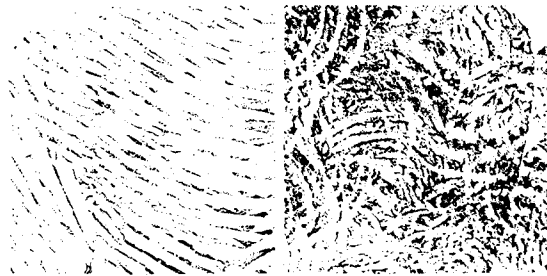
139



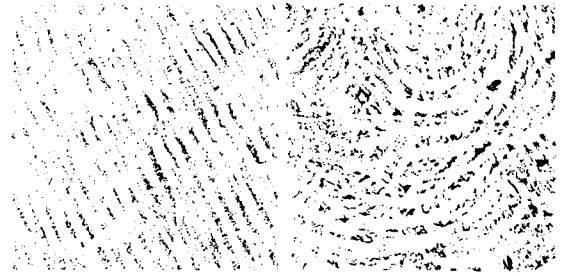
135



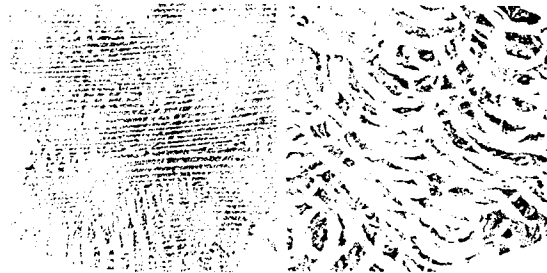
140



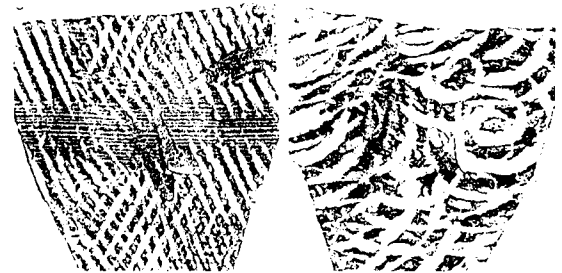
136



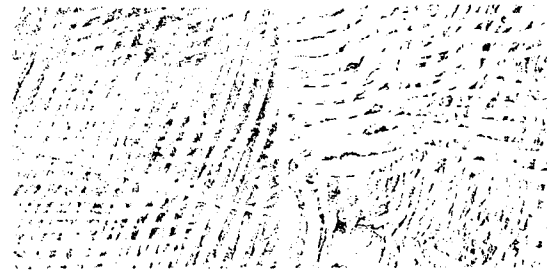
141



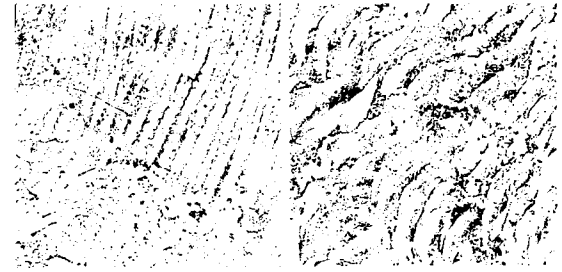
137



142



138



143

第28図 1号窯窯内出土遺物実測図(12) (S=1/2)

第1表 窯内甕文様計測一覧

外面

	H-a 類	H-b 類	H-c 類	H類 不明	計
最終段階群	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
中間段階群	14 (2.4)	2 (0.3)	17 (3.0)	44 (7.7)	77 (13.4)
前段階群	147 (25.6)	14 (2.5)	84 (14.6)	252 (43.9)	497 (86.6)
計	161 (28.0)	16 (2.8)	101 (17.6)	296 (51.6)	574 (100)

文様の組み合わせ

	H-a 類	H-b 類	H-c 類	H類 不明	計
D-a類	92 (16.0)	9 (1.6)	56 (9.8)	68 (11.8)	225 (39.2)
D-b類	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
D-c類	38 (6.6)	0 (0)	13 (2.3)	9 (1.6)	60 (10.5)
D類不明	31 (5.4)	7 (1.2)	32 (5.6)	219 (38.1)	289 (50.3)
計	161 (28.0)	16 (2.8)	101 (17.6)	296 (51.6)	574 (100)

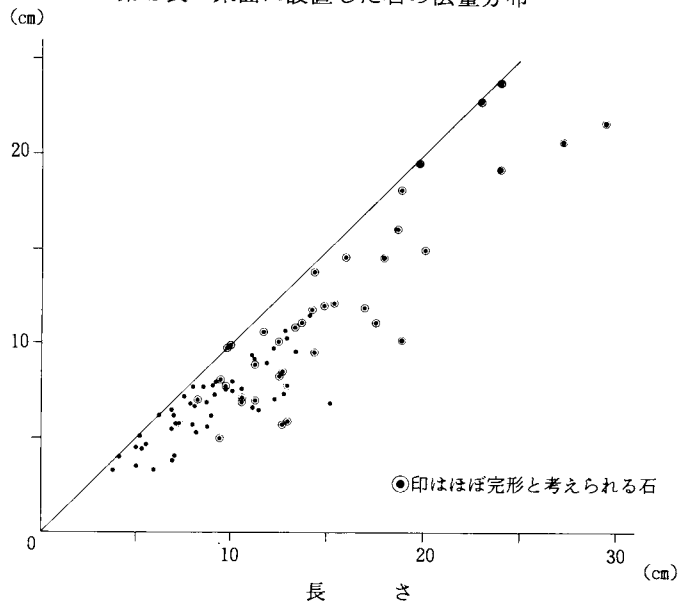
表中、上段は破片数、下段はパーセントを示す。

内面

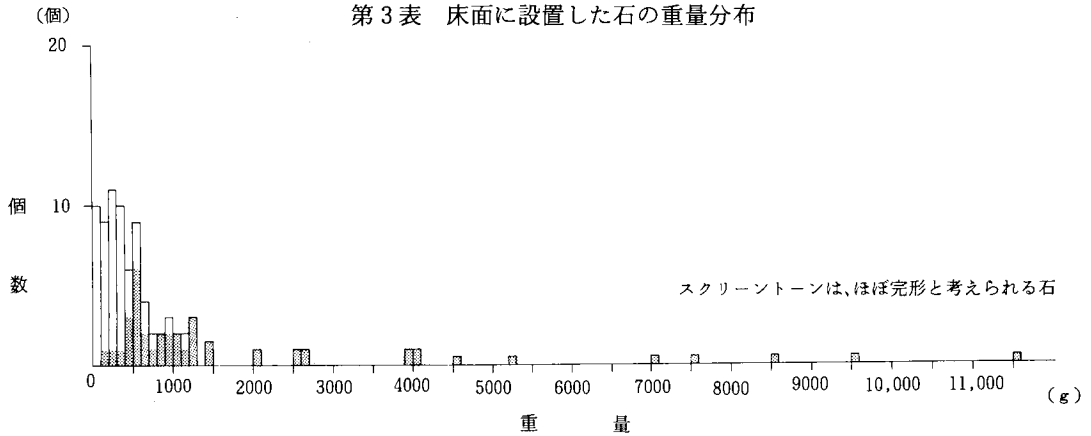
	D-a 類	D-b 類	D-c 類	D類 不明	計
最終段階群	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
中間段階群	26 (4.5)	0 (0)	7 (1.2)	44 (7.7)	77 (13.4)
前段階群	199 (34.7)	0 (0)	53 (9.2)	245 (42.7)	497 (86.6)
計	225 (39.2)	0 (0)	60 (10.4)	289 (50.4)	574 (100)

第2表は石の法量分布を示したもので、●はほぼ完形と考えられる個体である。表では示せなかったが、やや縦長の厚みのある石を利用する。長さは8~30cm前後に分布、10cm弱~15cm前後および20cm弱の個体が多いが、特に強い規格性を見いだすことはできない。また第3表は石の重量分布を示したもので、スクリーン部分にはほぼ完形と考えられる個体である。ほぼ完形と考えられる石の重量は500g前後、1000g前後~1500g、2000~2500g、4000g前後、5000g前後、7000g強、9500g、11500gとかなりの幅をもって分布し、500~1500gまでの個体が多い傾向を示す。法量分布よりもバラツキが大きく、やはり特に規格性を見いだすことはできない。焼成部の階段状床面を中心に設置したと考えられることが加味すれば、重量より法量を重視して比較的手頃な大きさの石を適宜採取し、階段状につくった床面に上が平坦になるように規

第2表 床面に設置した石の法量分布



第3表 床面に設置した石の重量分布



則性をもって配されたと考えられる。また階段状床面でも窯尻に近づくにつれ、小さい石を利用する傾向が強い印象を受けた。なお製品は直接石の上に設置するのではなく、図版19、20でみるように間に須恵器を挟むことで石との融着を防ぎながら製品の安定を図っている。

2. 灰原出土遺物

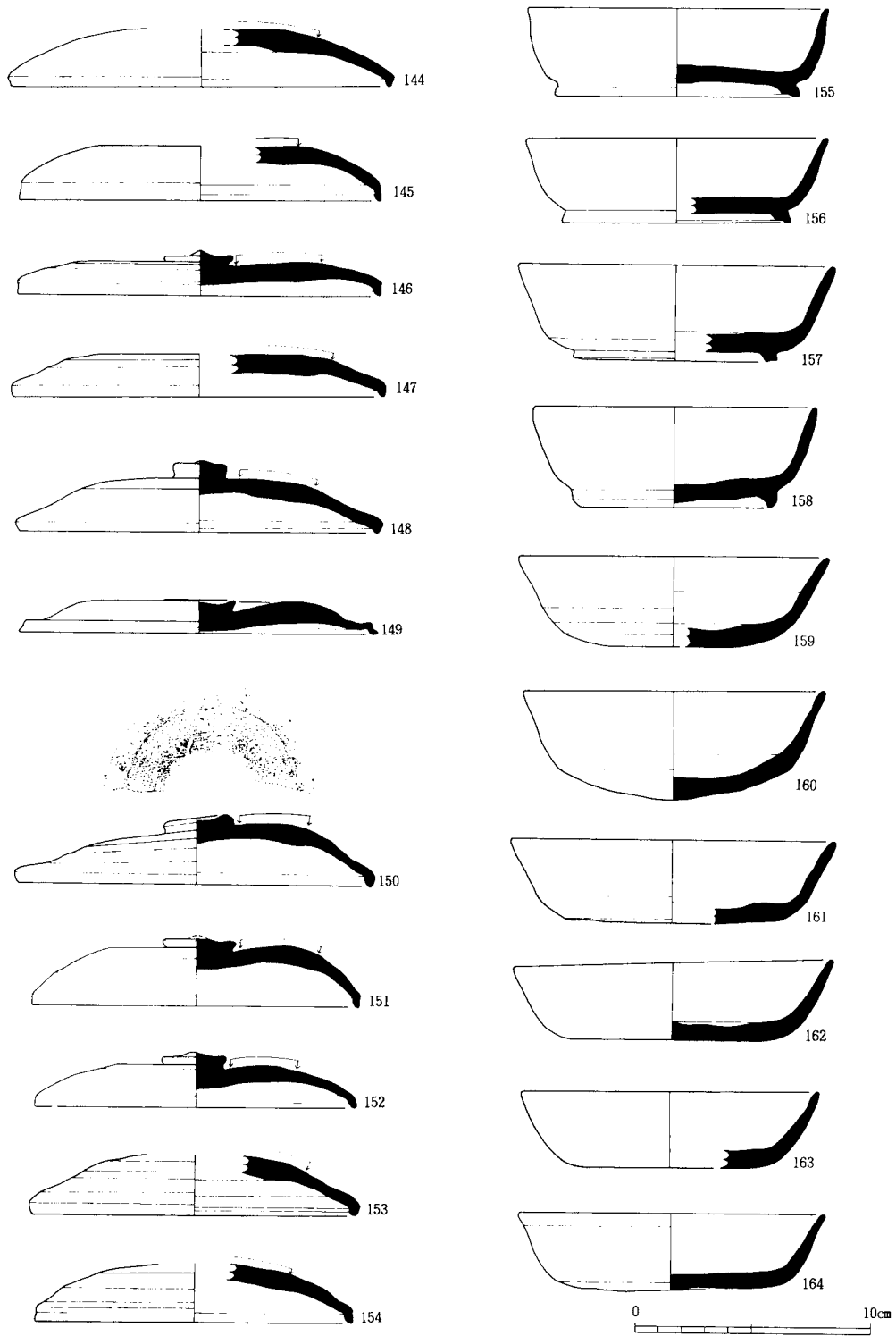
灰原出土遺物は、第1節で述べた理由により層位ごとに分類せず、一括のものとして扱う。各個体の出土地点、層位は第7～14表を参照されたい。

坏蓋 (144～154)

定量の出土をみるが、焼き歪みが著しいため実測可能な個体は少ない。a、b両タイプが存在し、aタイプが大部分を占める。aタイプ(144、145、148～154)は口径で13.8～14.4cmおよび15～16cmと二つの中心をもつが、基本的に1法量と考えられる。全般に偏平な鈕をつけ、天井部から口縁部になだらかに移行する。また下方に短く折り曲げるだけの口縁端部が主体となり、細長くのびる端部(145、149)は少ない。窯内資料と比較して、天井部の回転ケズリ調整は幅が広く、かつ丁寧に施す個体が多い。149のみナデ調整で済ませる。重ね焼きは144、145がⅠ類、150～152、154がⅡa類となり、Ⅰ類が定量確認できる。胎土は石英・長石の細粒子を通有量含むが粘質なものと砂っぽいものに分かれる。なお150の天井部外面には鈕を中心として放射状のヘラ痕が認められ、鈕の接着を良くする効果をねらったものと考えられる。bタイプ(146、147)は全形のわかる146で口径16.0cm、器高2.0cmを測る。調整などはaタイプに準ずる。146は面取りのしっかりとした偏平な鈕をつけ、胎土は石英・長石をほとんど含まず粘質な印象を受ける。ともに重ね焼きの分類は不明である。

有台坏Ⅰ類 (155～157)

有蓋の有台坏Ⅰ類は坏蓋と同程度出土したが、実測可能な個体はかなり少ない。aタイプの台部は未実測の小片1点のみで、bタイプの台部が完全に主体を占める。155～157で口径13.0～13.6cm、器高3.8～4.3cm、158で口径12.2cm、器高4.5cmを測る。全般に体部と底部の境は明瞭に屈曲し、体部は腰が張らず直立気味に立ち上がる。155、156がaタイプに近い外端接地の台部を



第29图 灰原出土遺物実測図(1) (S = 1/3)

外展してつけるのに対して、157は内端で接地する断面方形の台部を外展気味につける。底部外面は若干のナデ調整もしくは未調整を基本とし、157のみ回転ケズリ調整を施す。また155、156は底部内面にナデ調整を加える。

有台坏Ⅱ類 (158)

無蓋となる明瞭な個体は確認できない。158は口径12.2cm、器高4.5cmと窯内のⅡ類に比して深身で、重ね焼き痕から有蓋と考えられる。1点のみ出土した。

無台坏 (159～168)

各層から多く出土したが、実測可能な個体はそれ程多くない。a、dタイプが存在し、aタイプが大部分を占める。aタイプ(161～168)は口径12.8～14.1cm、器高3.0～3.6cmを測る。体部と底部の境が不明瞭な丸底風を呈し、163、166、168は口縁端部を肥厚させる。底部外面は未調整である165を除き、ナデ調整を施す。胎土は石英・長石の細粒子をほとんど含まず粘質な印象を受ける165以外は細粒子を通有量含んだ同質なものである。dタイプの159、160は深身で碗形態に近い。159で口径13.4cm、器高4.0cmを測り、底部外面に丁寧なナデ調整を加える。胎土はaタイプと同質である。bタイプにつながる器形と考えられる。

鉄鉢 (170、171)

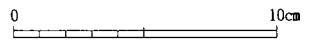
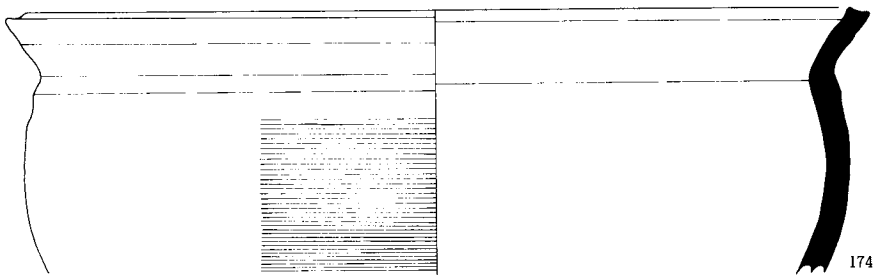
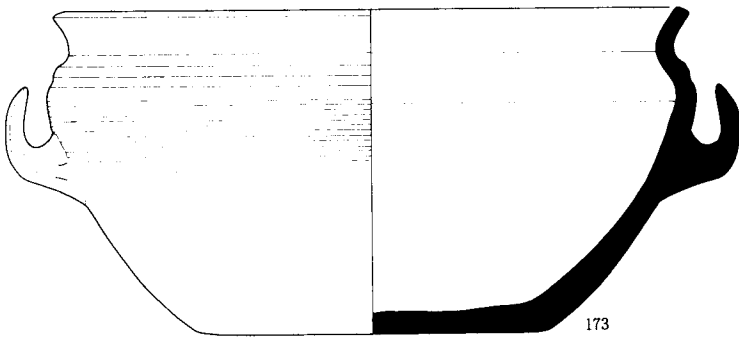
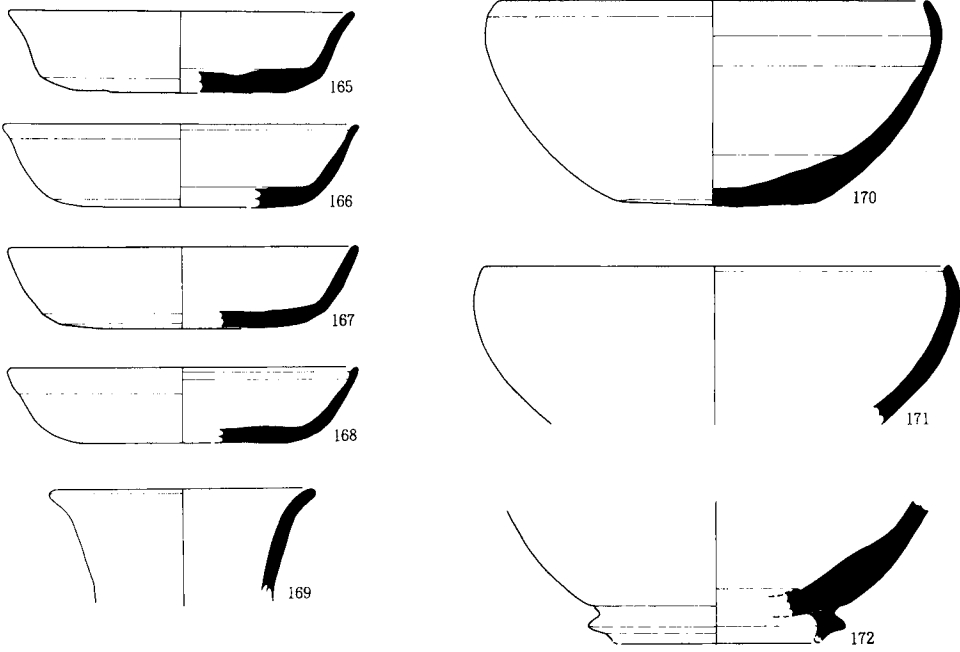
窯内資料と同様に定量の出土をみる。大部分はaタイプが占め、cタイプは客体的存在となる。170、171はaタイプで、170で口径16.7cm、器高8.2cmを測る。胴部と底部の外面の境は明瞭に屈曲し、底部外面に粗いナデ調整を施す。171の口縁部は円滑に湾曲する。

鉢 (173、174)

bタイプが少量出土した。173はほぼ完形で口径24.0cm、器高12.8cmを測る。胴部外面上半にカキメ調整を施した後、2箇所舌状に先細る把手をつける。胴部外面下半はケズリ調整か。174は口径約33cmを測り、173と似た形態を呈すると考えられる。口縁端部をくぼませ、胴部外面にカキメ調整を施す。把手の有無不明。

壺・瓶類 (169、172、175～186、192)

いずれも小片だが、長頸瓶、短頸壺、広口瓶、横瓶などが存在し、長頸瓶と横瓶が多いようだ。長頸瓶の口縁部169は口径10.2cmを測る。172は長頸瓶の底部か。高台端部は嘴状にのびる。短頸壺は2タイプ確認できる。175、180、181は126と同形態を呈したaタイプとなる。175は径がかなり大きい。180は口縁部は直立し、胴部外面上半に装飾的なカキメ調整を加える。181の口頸部外面はハケ調整の後ヨコナデ調整を加える。176は口縁部が短く外反するbタイプと考えられる。胴部内外面とも雑なヨコナデ調整を施す。胎土は粗い石英・長石細粒子を多く含み、aタイプより粗いものとなる。183～186は横瓶で、183の外面には焼台が付着する。184は外傾する口縁端部をくぼませる。胴部内面はD a類、また外面はD類の叩きを施した後にカキメ調整を施す。185は口径15.7cmを測り、口縁部の外傾度合いは著しい。186の口縁部は外反し、端部を横方向にひきのばす。口径11.7cmを測り、胴部に184と同じ調整を施す。広口瓶177は口径17.5cmを測り、口縁端部を上方に小さくつまみ上げる。全面に自然釉が付着し、正位での焼成が復元できる。壺182は口径14.6cmを測り、口縁部は長くのびる。胴部は叩きの後に外面にカキメ調整を加える。降灰の状況から無蓋と考えら



第30図 灰原出土遺物実測図(2) (S=1/3)

れる。192は壺類に分類した。口径20.2cmを測り、焼き歪んでいるものの胴部は横方向にのびる。178は瓶類底部と考えられ、体部と底部の境は不明瞭である。179は体部と底部の境が明瞭で無台坏とは異なるため、この類に分類した。底径約9cmを測り、胴部外面のロクロひだが目立つ。

土師器長甕 (134、187~190)

a、bタイプとも定量出土し、量的にaタイプが多い。aタイプは大半が須恵質に焼成され、自然釉が付着する。189で口径24.0cm、190で口径20.0cmを測る。189の胴部が丸味をもつものに対して、190はそれ程張らない。胎土は石英・長石の粗い粒子を多量に含み、須恵器器種の胎土とは明らかに異なる。134は胴部の拓本である。須恵質に焼成を受け、外面H a類、内面D a類の文様が残る。bタイプ(187、188)は厚手で、口径33~34cmを測る。胴部は張らず、外反する口縁部は端部を小さくつまみ上げる。188は内面にハケ調整の後に一部カキメ調整を、外面に平行叩き(?)の後にカキメ調整を施す。またbタイプは1点の小破片を除くと全て酸化焰焼成であり、aタイプと好対照をなす。胎土中の石英・長石の粗い粒子はaタイプより少ない印象を受ける。

土師器小甕 (191)

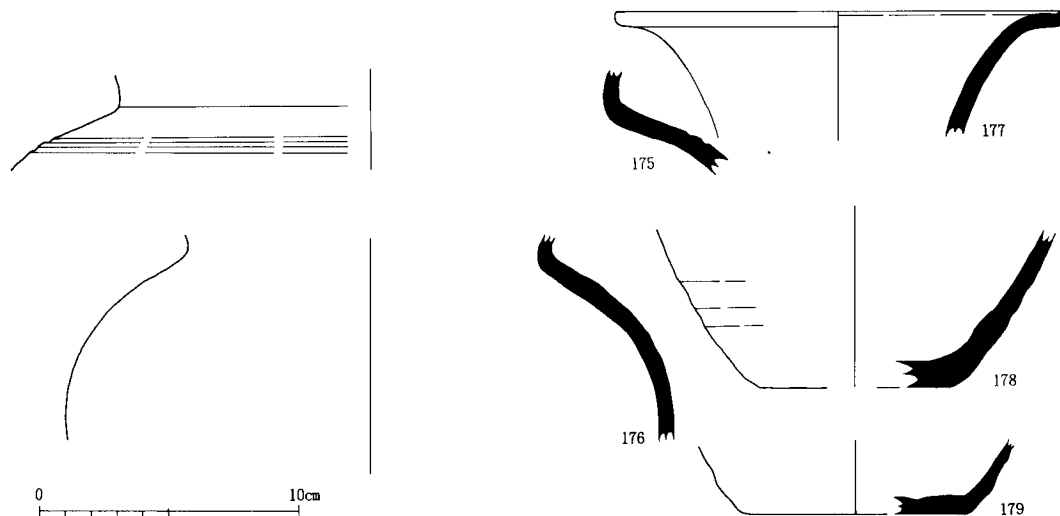
191は非ロクロの小甕底部と考えられる。底部外面を指で成形した後に周縁部にケズリ調整を加える。須恵質に焼成され、胎土は土師器長甕aタイプと同質で、石英・長石の粗い粒子を多量に含む。

土師器鍋

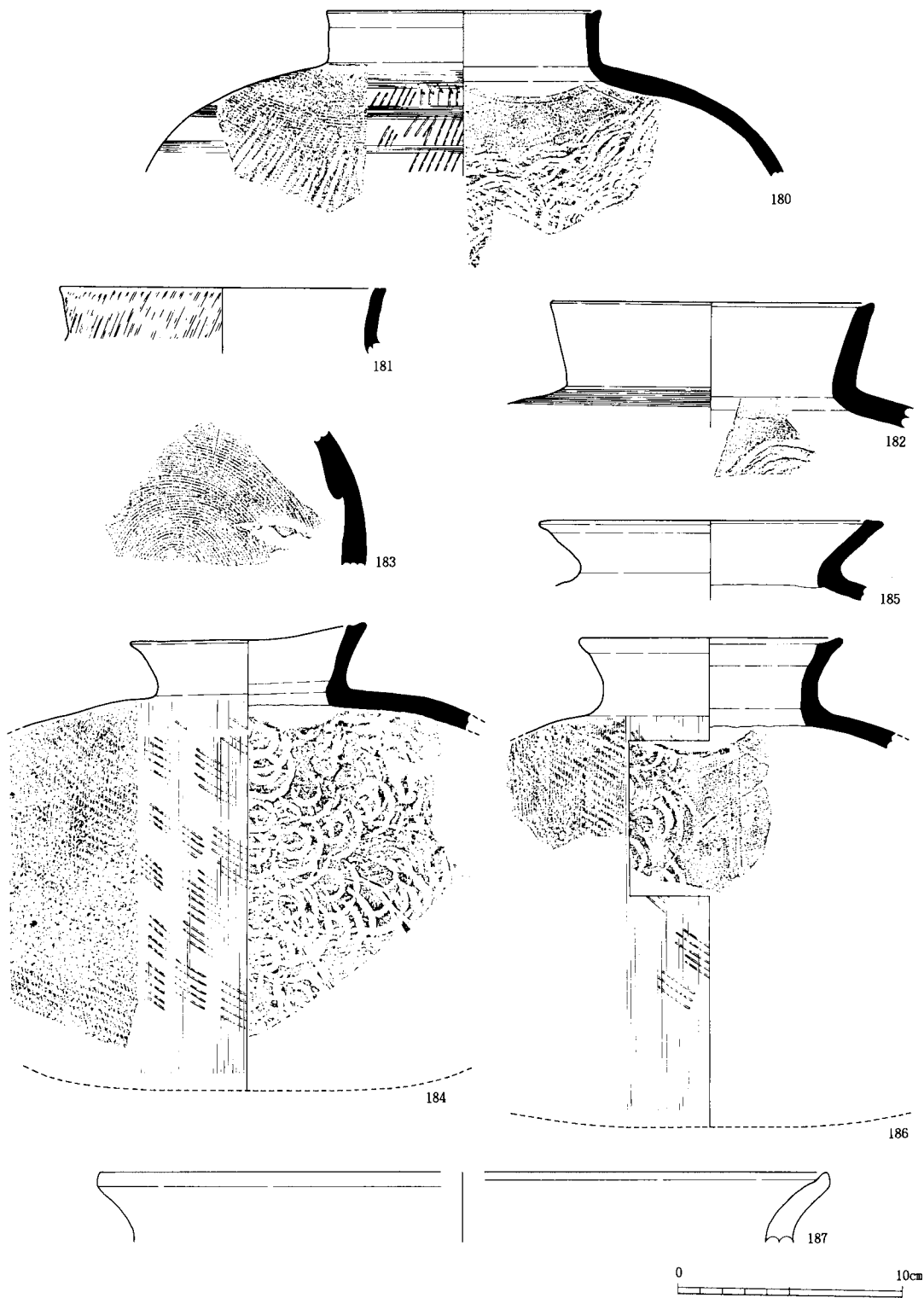
土師質で厚手の胴部片を分類したが、明瞭な個体は確認できない。土師器長甕bタイプの可能性をもつ。

甕 (139、193~210)

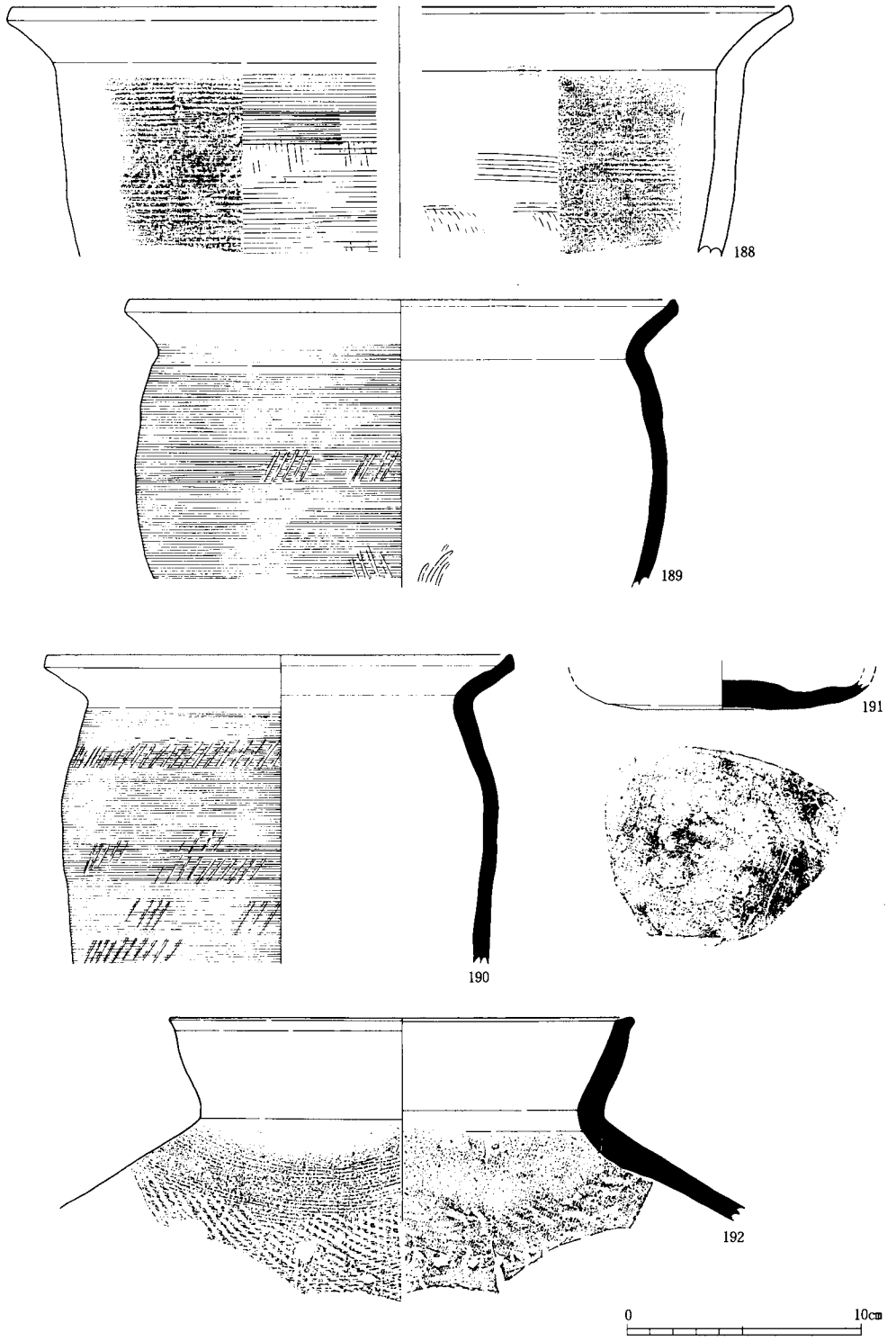
胴部片の出土量が多い。小型、中型品が存在し、中型品は口頸部外面を加飾する。第4表にみるとおり、内外面とも文様の分かる個体は半数程度である。外面はH a類が25.7%、以下H c類19.1%、H b類1%未満の比率となる。H b類の比率が少ない点も含め、窯内資料の比率とほとんど変わらない傾向を示す。一方、内面はD a類が54.9%と圧倒的に多く、D c類4.1%、D b-



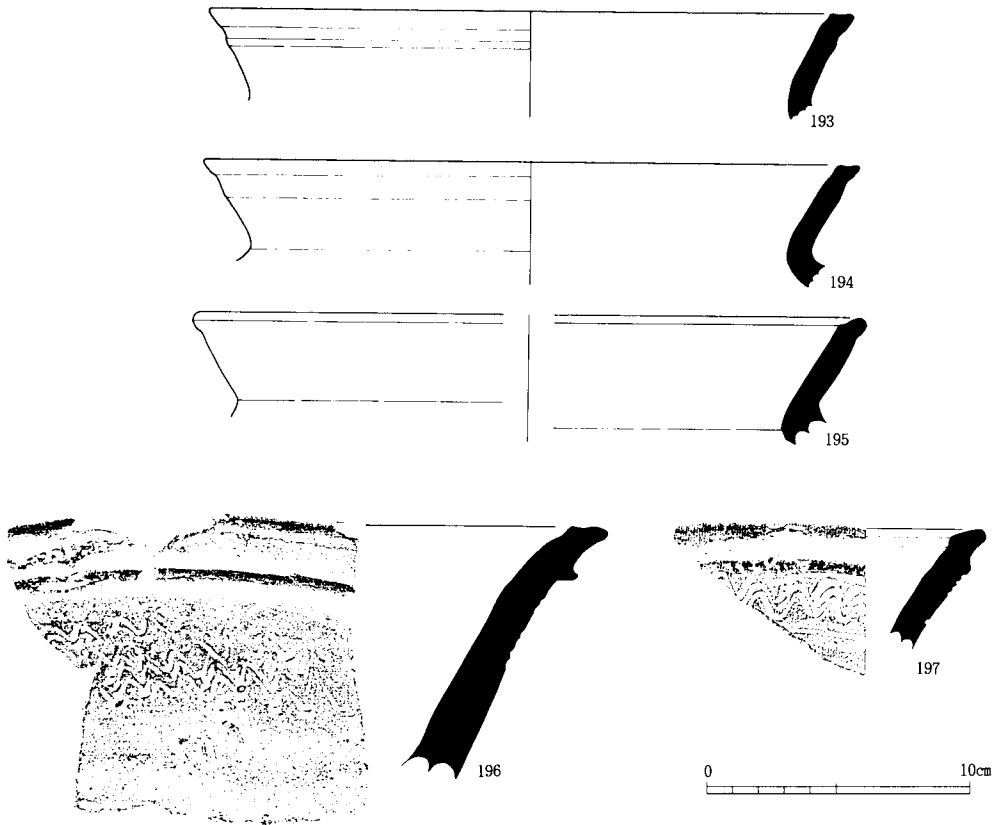
第31図 灰原出土遺物実測図(3) (S=1/3)



第32図 灰原出土遺物実測図(4) (S=1/3)

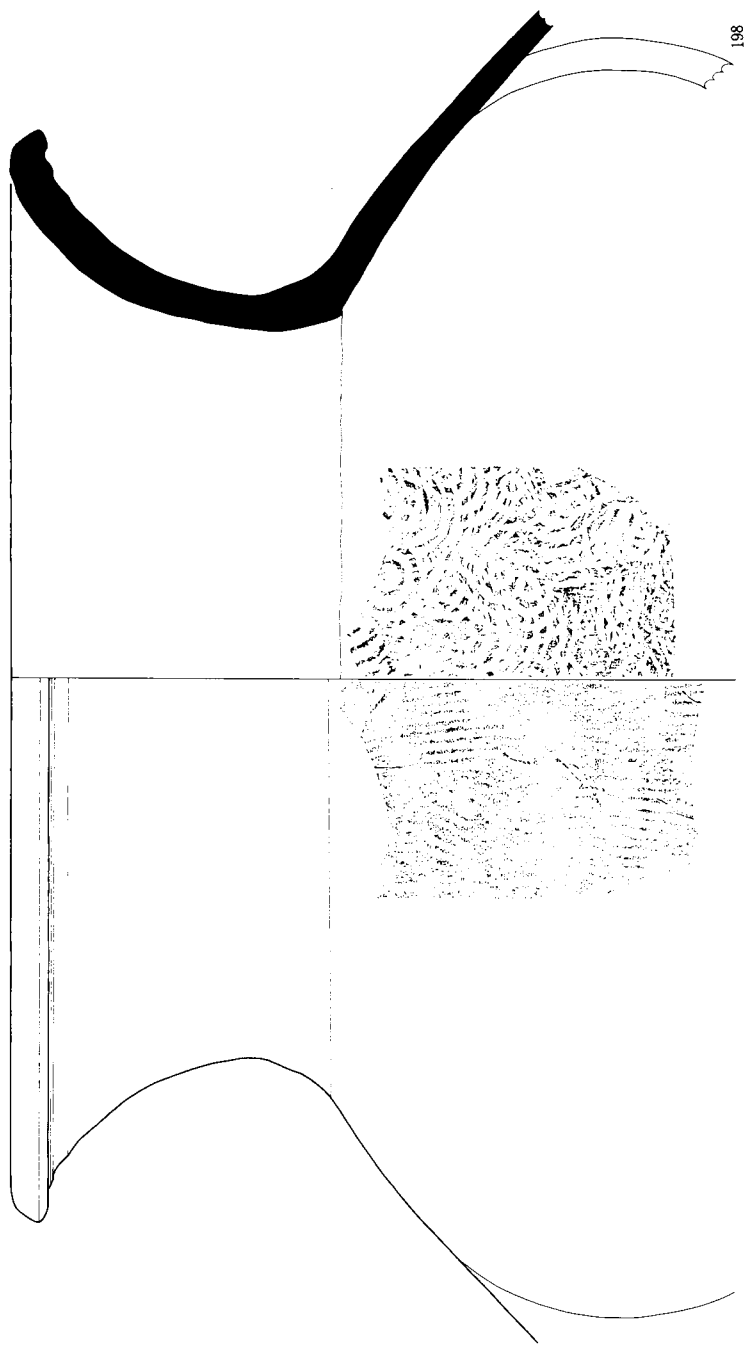


第33图 灰原出土遺物実測図(5) (S=1/3)

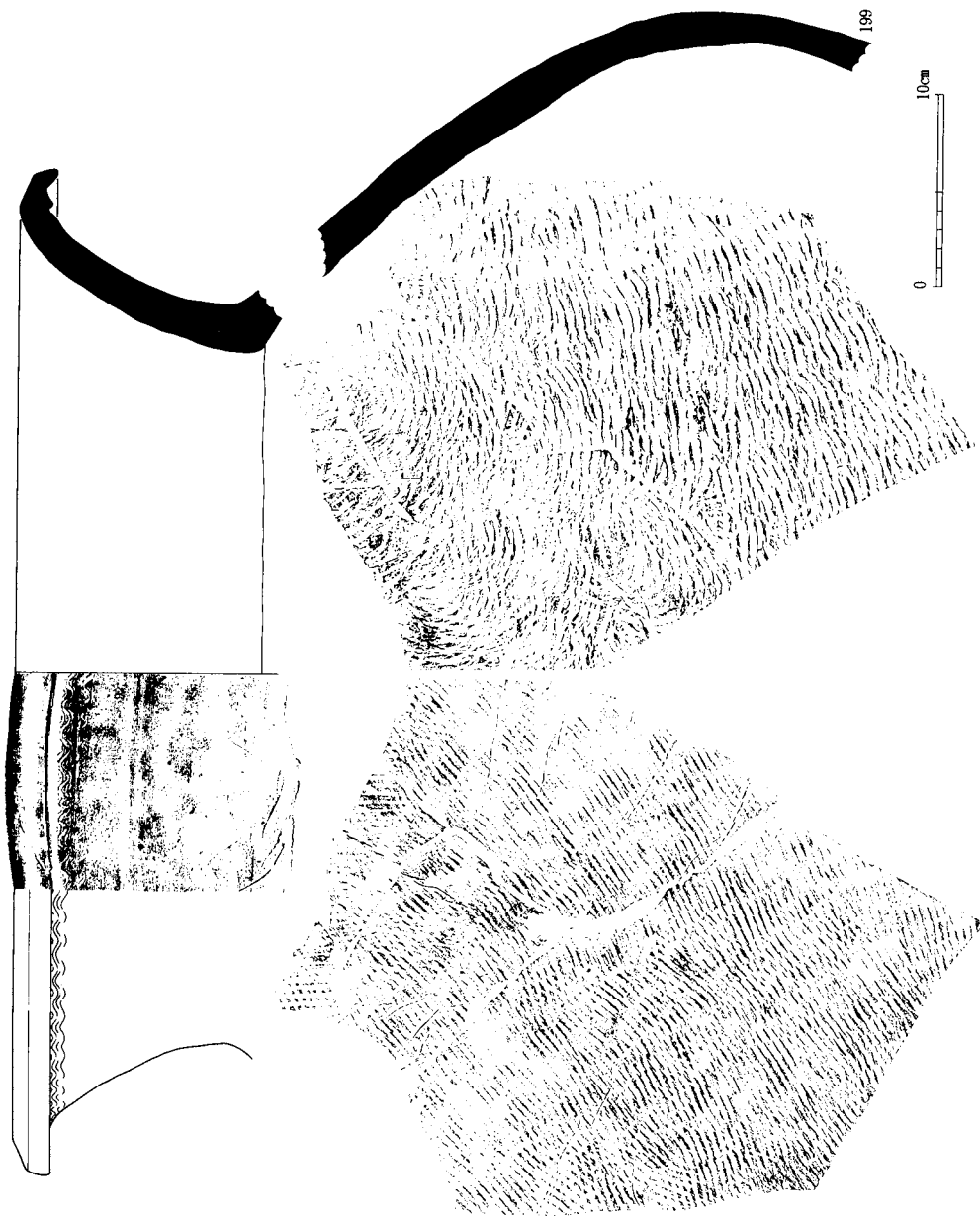


第34図 灰原出土遺物実測図(6) (S=1/3)

1類僅少の比率を示す。窯内資料と比して、D c類は比率を減じ、D b-1類が存在する点で異なる傾向を示す。文様の組み合わせはH a類+D a類が15.9%、H c類+D a類15.9%、H a類+D c類3.5%の比率となり、H c類+D a類がH a類+D a類と同程度存在し、窯内の組み合わせと若干様相が異なる。193~195は小型の甕の口縁部で口径26cm前後を測る。外傾する口縁端部を外側にひきのばす。195の外面にはカキメ状の調整痕がかすかに残る。196は平坦な口縁端部を外側に引きのばし、口頸部外面に鋭い突帯と波状文で加飾する。198は中型の甕で口径約40cmを測る。口縁部は外反しながら長くのび、下方を強くなでることにより突帯をつくる。また突帯の下にカキメ状の調整痕がかすかに残る。胴部外面H類(降灰著しく不明)、内面D a類の文様となる。199は口径約50cmを測る。口縁端部を下方に長く引きのばした後、直下を突帯と波状文で加飾する。胴部外面は木目痕が疎にみえるH a類、内面は径の大きなD c類を密にするため青海波状を呈する。139、200~209は胴部の拓本である。200は木目痕が密なH a類+木目痕が疎なD c類、201は木目痕が密なH b類+D a類、202は木目痕が疎なH c類+D a類となり、外面にカキメ調整を加える。203は木目痕が密なH a類+木目痕が密なD a類である。204は木目痕が密なH a類+木目痕が密なD c類で、写真図版22のとおり粘土紐の接着をよくするためのD類叩きを施した痕が残る。205は木目痕が密なH b類+D a類、206は木目痕が疎なH c類+木目痕が密なD a類、207は木目痕が密なH c類+木目痕が疎なD a類、208は木目痕が疎なH c類+D c類である。



第35图 灰原出土遺物実測図(7) (S = 1/3)



第36図 灰原出土遺物実測図(8) (S=1/4)

第4表 灰原甕文様計測一覧

外 面

	H-a類	H-b類	H-c類	H類不明	計
破片数	163	4	121	346	634
比率	(25.7)	(0.6)	(19.1)	(54.6)	(100)

文様の組み合わせ

	H-a類	H-b類	H-c類	H類不明	計
D-a類	101 (15.9)	2 (0.3)	101 (15.9)	144 (22.8)	348 (54.9)
D-b-1類	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (0.1)	1 (0.1)
D-b-2類	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
D-c類	22 (3.5)	0 (0)	1 (0.1)	3 (0.5)	26 (4.1)
D類不明	40 (6.3)	2 (0.3)	19 (3.0)	198 (31.3)	259 (40.9)
計	163 (25.7)	4 (0.6)	121 (19.0)	346 (54.7)	634 (100)

表中、上段は破片数、下段はパーセントを示す。

内 面

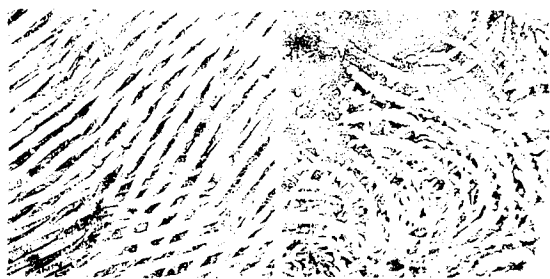
	D-a類	D-b-1類	D-b-2類	D-c類	D類不明	計
破片数	348	1	0	26	259	634
比率	(54.9)	(0.1)	(0)	(4.1)	(40.9)	(100)

3. その他の出土遺物

調査区からは少量の他の時代の遺物が出土したが、それぞれ該当する時期の遺構は未検出である。212は花崗岩質砂岩の石皿で両面とも使用する。213は小型の台付き鉢と考えられ、外面に縄文を施す。弥生土器の天王山式か。214は鉄釉陶器の小型甕で底部外面に静止糸切り痕が確認できる。全面に鉄釉のハケ塗りをおこなう。17～18世紀に位置付けられる。素地の特徴から越中瀬戸焼の可能性をもつ⁵⁾。215は鉄釉陶器碗で素地には黒色粒子が混じる。近世以降と思われる。他に小片だが縄文土器胴部が2点、古代後半の須恵器皿が1点、珠洲焼甕、鉢が各1点出土した。

第3節 小結

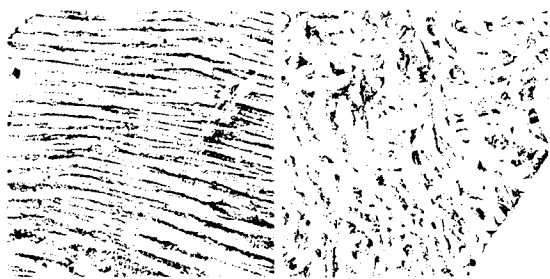
1号窯に伴う遺物は、第5表のとおり破片数で須恵器4506点、土師器145点、合計4651点を数える。第1節では窯内出土遺物を3段階群に分け、また灰原遺物を一括のものとして扱った。その中で、窯内前段階群の遺物は二次焼成を受け、最終操業よりも前の焼成時の遺物であることは明らかである。また出土状況から灰原遺物の大部分も同様な扱いが可能である。そこで窯内の前段階群遺物と灰原遺物を、最終操業よりも前の焼成の様相をかなり示す一群（以下、A群とする）とし、最終操業時の取り残しである窯内最終段階群に、近似した様相を示す中間段階群を加えた一群（以下、B群とする）と、器種構成や法量等を比較をおこなうことで小結としたい。この操作は操業段階を明瞭に把握できない故のものであり、床面ごとで整理した他窯跡の資料とは同質に扱えないことはいうまでもない。あくまでA群からB群への相対的な変化を抽出できるか否かに重点をおいている。なお破片数でA群は3577点、B群は1074点となる。以下、器種構成次いで主要な器種の順に述べる。



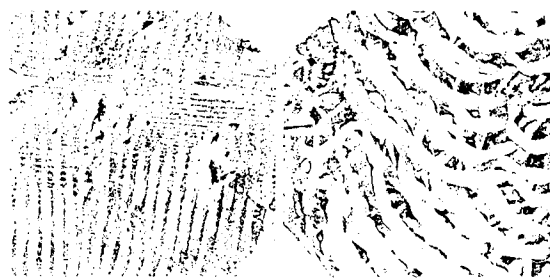
200



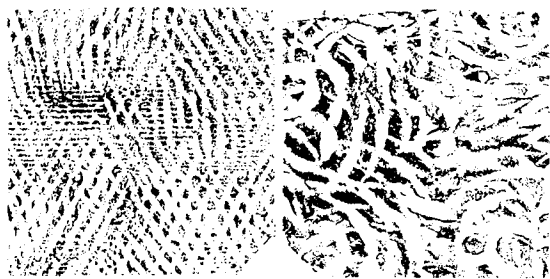
205



201



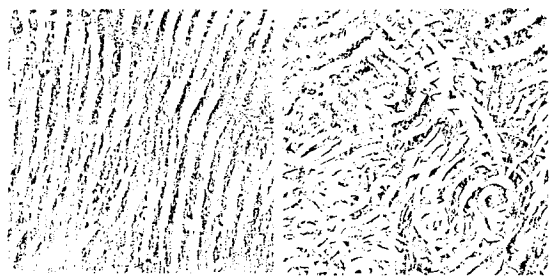
206



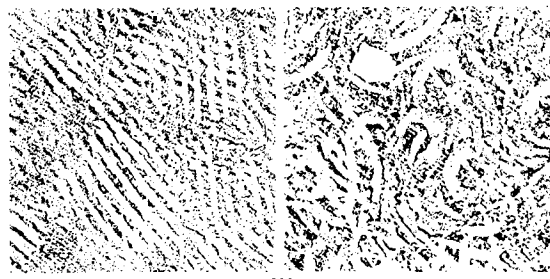
202



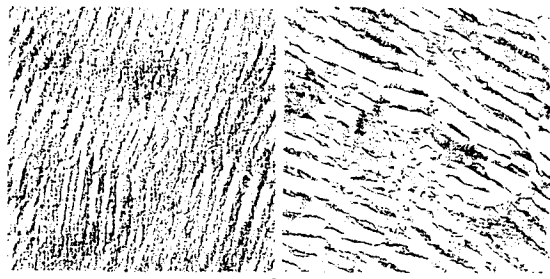
207



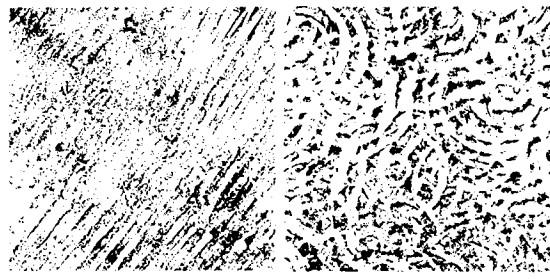
203



208

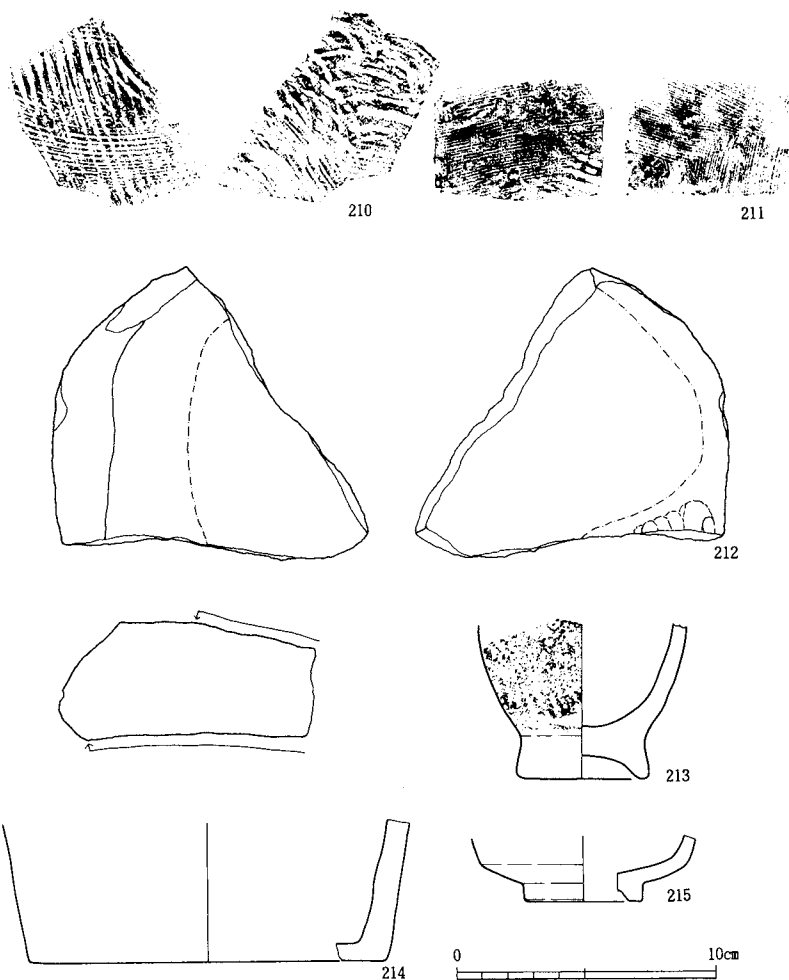


204



209

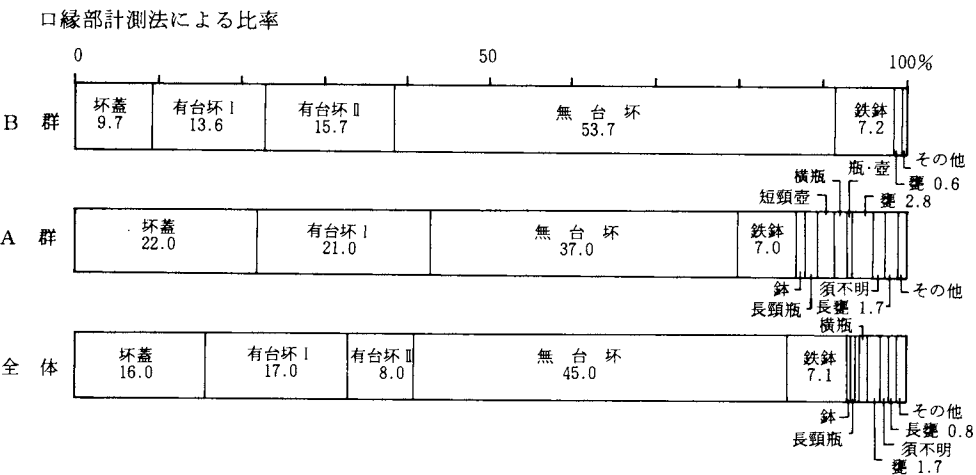
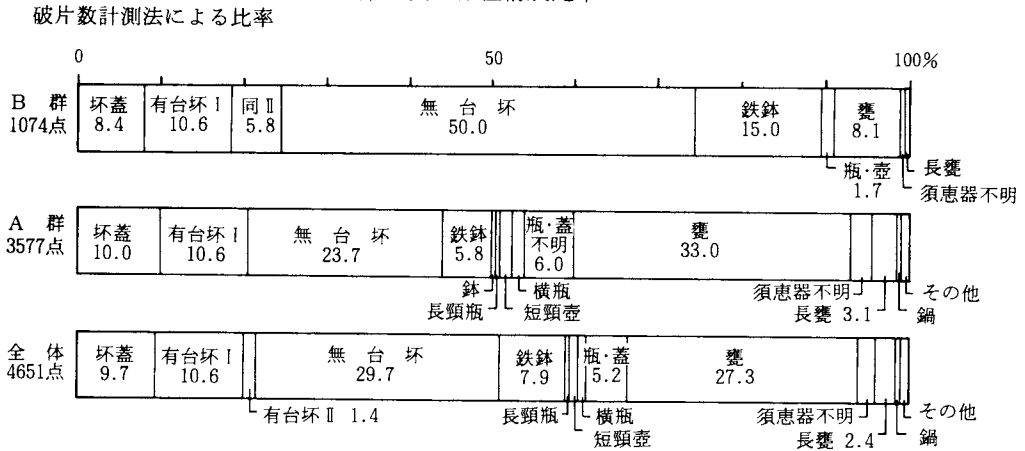
第37図 灰原出土遺物実測図(9) (S = 1/2)



第38図 調査区出土遺物実測図 (S=1/3)

器種構成 供膳具では有台坏 2 法量、無台坏 1 法量が存在し、高坏、盤、有台盤はない。供膳具は口縁部計測法で A 群 80%、B 群 92% と、全体に対して高い比率を占め、同時期の他の窯跡と同様な供膳具比率の傾向を示す。また破片数計測法で A 群 44%、B 群 75% と A 群の比率が低い、これは A 群に焼台に再利用した甕類を多く含むことを考慮すれば当然の結果といえよう。口縁部計測法で得た数値がより実態に近い様相を示すと考えられる。次に有台坏 I 類（または坏蓋）と無台坏の量比は、口縁部計測法で A 群約 3 : 5（坏蓋も同じ）、B 群約 1 : 4（坏蓋約 1 : 5）となり、いずれも無台坏が主体となり、B 群でその傾向が強まることが指摘できる。無蓋の有台坏 II 類は A 群ではほとんど確認できず、B 群で定量存在することは既に述べた。仏器では A、B 群とも形態・調整が簡略化した a タイプの鉄鉢が大部分を占める。口縁部計測法で約 7% と定量生産され、1 号窯の器種構成の一つの特徴となる。金属器模倣の稜碗は蓋 c タイプ (15) の存在からごく少量生産した可能性をもつ。一方、壺・瓶類は A 群では鉄鉢と同程度の比率を占めるのに対して、B 群では比率をかなり減じる。器種では長頸瓶、横瓶、短頸壺、広口瓶が存在するが、比較的器種・量とも少ない印象を受ける。甕も壺・瓶類と同様な傾向を示す。土師器長甕は須恵

第5表 器種構成比率



質に焼成された a タイプが主体となり、A、B群とも少量ずつ生産される。以上のことからA、B群に共通する事項として、無台坏を主体として供膳具が高い比率を示すことと、鉄鉢の定量生産が、また相違点としてA群では無台坏の比率が高くなることや、有台坏Ⅱ類の定量生産、壺・瓶類、甕の減少傾向が指摘可能である。

坏蓋類 有台坏Ⅰ類とセットをなす。破片数計測法でA群10.0%、B群8.4%、口縁部計測法でA群22%、B群9.7%の比率を占め、製品数の1割程度を占めるようだ。第6表のとおりA群は口径14cm前後と15~16cmに分布し、やや幅をもつが基本的に1法量と考えられる。口径15~16cmの個体は器高からa、bタイプに分けられる。B群は口径15~16cm、17.6cmと2法量とも考えられるが、後者は数点のみで、かつセットとなる有台坏は確認できない。天井部の調整はB群で回転ケズリ調整の幅が狭くなる傾向を示す。重ね焼きはA群でⅠ類とⅡa類の量比が2対5程度となり、Ⅰ類が定量存在するのに対して、B群ではⅡa類が完全に主体を占める。なお、ヘラ記号を加える個体はない。

有台坏Ⅰ類 破片数計測法で両群とも10.6%、口縁部計測法でA群21%、B群13.6%の比率を占

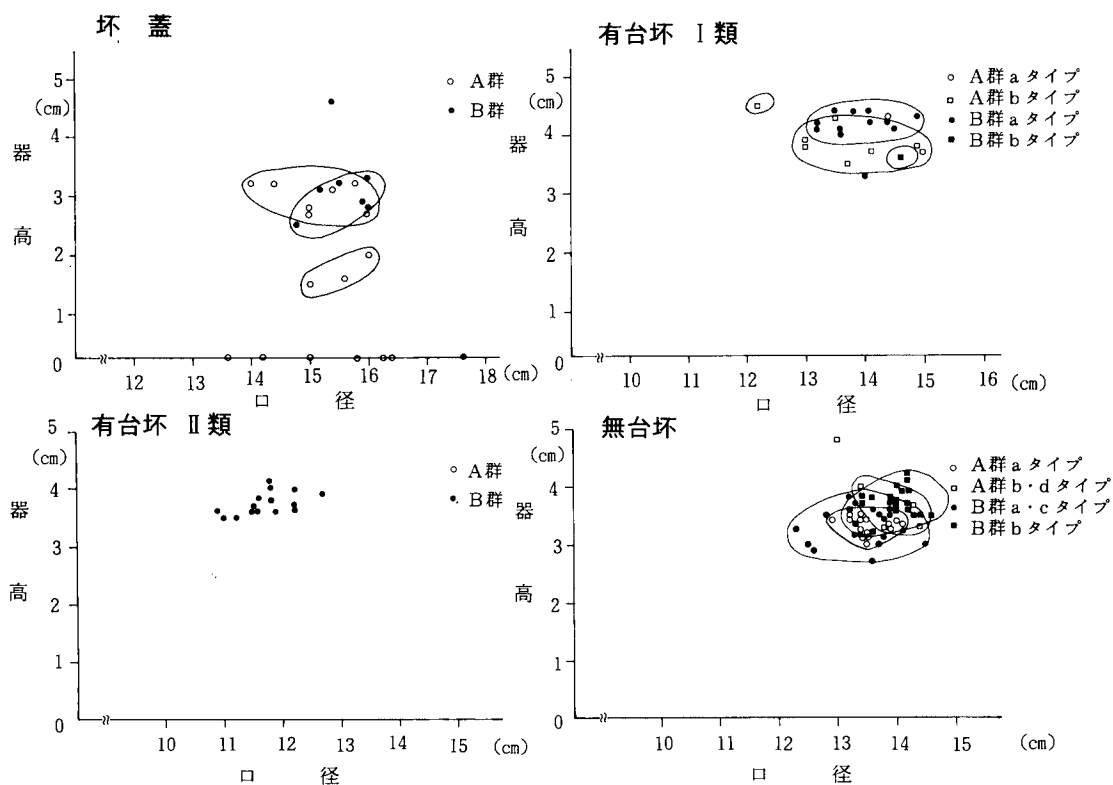
め、坏蓋と同様に1割強の割合を占めるようだ。またA群は口径13~15cm強、器高3.5~4cm強に、B群は口径13~15cm、器高4.0~4.5cmを測り、B群で径高指数が高くなる個体が増える。両群とも口径は幅をもつものに対して、器高は安定した数値を示す。上部は、A群が細部差をもつbタイプを主体とするものに対して、B群では外端接地するaタイプに発展し、完全に主体となる。また体部は腰が張らず直線的にのびるものから、腰に丸味をもち外傾度合いの弱いものへと変化する。ヘラ記号を施した個体や奈良時代中頃以降に出現する深身の有台坏は確認できない。

有台坏Ⅱ類 大部分がB群に存在し、両群の間でもっとも相違点を指摘できる器種である。口縁部計測法で13.6%と、有台坏Ⅰ類と近似した比率を示し、定量的に生産される器種である。口径11~12.7cm、器高3.5~4.1cmと法量的にまとまりをもち、同一器種で重ね焼きをおこなう。A群では深身・有蓋の個体が1点確認できるのみである。

無台坏 量的にもっとも多く、口縁部計測法でA群37%、B群53%強の比率を占める。A群が口径13~14.5cm、器高3~4cm、B群が口径12.5~14.5cm、器高2.7~4.2cmを測り、B群では口径・器高とも縮小した個体が定量存在する。A、B群ともaタイプが大部分を占め、深身のb、dタイプは客体的存在である。aタイプは有台坏Ⅰ類と同様に、丸底で体部が外傾するものから体部と底部の境を明瞭に屈曲させ、体部を直立気味に仕上げるものに変化する傾向を示す。また底部調整はb、dタイプが比較的丁寧なナデ調整を施すものに対して、aタイプはかなり粗いナデ調整に済ませるものが多い。なお一度の重ね焼き枚数は復元できない。

鉄鉢 両群とも口縁部計測法で約7%、また破片数計測法で約6%、15%の比率を占め、他の鉢、

第6表 供膳具の法量



壺・瓶類を合計した比率よりも高い場合が多い。器肉が厚く、底部外面をナデ調整で仕上げた粗製品ともいえる a タイプが大部分を占め、客体的存在である薄手の精製品（b、c タイプ）とは明瞭に作り分けられる。このような簡略化された鉄鉢を同一器種で重ねて量産する動きは、精製品の鉄鉢との間で需給関係に質的な差を見いだすことも可能である。a タイプに比較的軟質な個体が多いことも、供給先の差を暗示するのかも知れない。

鉢、壺・瓶類 鉢は A 群で 1% 弱の比率を、壺・瓶類もかなり少ない量比を占め、いずれも貧弱な印象が強い。

土師器 A、B 群とも 1～2% と低い値を示すが、確実に生産される。「北陸型長甕」と呼称される a タイプは、大部分が須恵質に焼成され、1 号窯で生産したと考えられる。b タイプは土師質の個体が大部分を占めるが、調査区で小型平窯を検出していないことから同様な生産を想定せざるを得ない。また明瞭な鍋類は存在せず、小型甕は非クロロ成形の個体が極く少量出土したにとどまる。

甕 B 群は出土量が少なく、A 群との対比できない。A 群では外面 H a 類、内面 D a 類を主体とし、外面 H b 類と内面 D b 類はほとんど存在しない特徴をもつ。また文様の組み合わせでは H c + D a 類が相対的に減少する傾向を示すものの、大きな変化は想定しにくい。また口頸部の加飾に関しても同様である。

出土状況 具体的な数値を示さなかったが、窯内での B 群の製品配置に関して若干触れたい。出土地点から無台坏 a、c タイプ、鉄鉢 a タイプの一部は原位置を保つと考えられ、小型品は階段状床面を中心に配置したと考えられる。特に焼きの甘い無台坏 b タイプは完形に復元できる個体が多く、一括に近い出土状況を示す。焼き割れ等がほとんどなく、色調等の焼成具合の不備が主たる理由となり、大部分が原位置に取り残されたと推定できる⁶⁾。最終段階群の無台坏 a タイプの大部分も同様な理由で取り残されたと考えられる。一方、有台坏は I、II 類とも 1～4 区を中心に出土している。焼成具合を考慮すれば階段状床面を中心に焼成し、窯出し時に焚口付近に降りた後に失敗品と認定、廃棄したと考えられる。一部生焼けとなっていることが主な廃棄理由となろう。また出土量が少ないことも手伝って壺・瓶類、甕は最終操業段階でほとんど確認できないが、窯体構造・焼成具合や他窯跡の一般的な製品配置から考えて、燃焼部に近い位置で焼成したと考えられる。なお、製品どうしでの融着（焼台との融着を除く）はほとんど確認できず、選択した胎土の特質により焼成温度を上げられなかったためとも考えられる。

以上、供膳具を中心に A 群と B 群の様相差をみてきた。結果からいえば、A 群から B 群への流れは法量の縮小化傾向、供膳具の量産傾向を示すと考えられるが、両群の間に大きな両期を見いだせない。第 5 章第 2 節に述べるとおり、本窯跡が操業したと考えられる奈良時代中頃は全国的に生産体制・土器様式の大きな転換点が設定される。A 群から B 群への流れは、次のより大きな転換点へ向かう一つの小期の中での小変化と理解すべきであろう。

生産体制に関しては、有台坏 I 類 a タイプと有台坏 II 類が焼成具合、形態とも極めて近似する。また無台坏 a タイプは大部分が均質な形態・胎土をもつ。これらから、各器種ごとの同一工人単位の手による製品と考えられるが、有台坏は底部調整に多様性を有することから、一人の手によるものとの即断は控えるべきであろう。一方、A 群の有台坏は台部、法量とも多様性を示し、少

なからぬ人数による製作を想定すべきかも知れない。形態・調整の違いのもつ意義、製作に係わる分業の有無など検討すべき課題は多い。またヘラ記号は無台坏底部外面に1点確認できるのみで、極めて低い数値を示す。一般にヘラ記号の存在理由は工人単位の数量把握または焼成時の工人単位間の識別とされ、1号窯での出土比率は製作に係わる工人単位や焼成を含めた生産体制の在り方を示唆するものと考えられる。さらに推測を加えるならば、無台坏ではa、bタイプ間の胎土の相違から少なくとも2つの工人単位（ミガキ調整の無台坏cタイプをaタイプと区別すれば3工人単位）程度に復元することも可能である。また焼台に関しては、全器種とも再利用され、中でも甕類と失敗品の供膳具（特に無台坏）が大部分を占めることは当期の一般的な在り方となる一方、加えてミガキ調整を多用する無台坏cタイプを未焼成の段階で転用する。ミガキ調整が同時期の土師器供膳具に多用されることや須恵質の長甕が1号窯から定量出土することを加味すれば、cタイプの存在や利用方法は、土師器生産と須恵器生産が一体化した結果生じたものであり、ミガキ調整が須恵器器種としてはあくまで受け入れられない調整技法であったことを示すと考えられる。なお窯内の焼台に再利用された甕破片は、大型品2個体程度に復元できる個体を中心としており、意図的に破碎したとも、前操業段階の失敗品とも考えられる。類例の増加をまっ

註

- (1) 京都大学文学部考古学研究室『丹波周山窯』1982年
宇野隆夫「食器計量の意義と方法」『国立歴史民族博物館研究報告』第40集 国立歴史民族博物館 1992年
- (2) 北野博司「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター 1988年
- (3) 甕などの大型品は火前で焼成し、堅緻に焼き上がるのが一般的である。そのため、焼成時に落盤等の理由で操業が放棄されない限り、本報告の焼成具合による分類では最終段階群に属する個体は確認できない可能性をもつ。
- (4) 内堀信雄「須恵器甕にみられる叩き文について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988年
- (5) 滝川重徳氏よりご教示を得た。
- (6) 南加賀窯跡群では、廃棄後の窯内の祭祀行為として壺を意図的に残した例がある。直接結び付けることは慎むべきであるが、興味深い事例である。

第7表 遺物観察表1

須恵器・土師器色調一覧

須 恵 器	ア	淡灰色
	イ	淡灰色（一部赤橙色～茶色）
	ウ	淡灰色～灰色
	エ	淡灰黄色
	オ	灰色
	カ	灰色（一部赤橙色～茶色）
	キ	灰橙色
	ク	暗灰色
	ケ	黒灰色
	コ	青灰色
土 師 器	サ	暗黒灰色
	シ	淡橙褐色
	ス	青灰色
	セ	黄灰白色

須恵器・土師器胎土一覧

須 恵 器	A	白色石英・長石粒子（1～5mm）を多く含み、素地は砂っぽい。
	B	白色石英・長石粒子（1～5mm）を通有量含み、素地は砂っぽい。
	C	白色石英・長石粒子（1～5mm）を多く含み、素地は粘質。
	D	白色石英・長石粒子（1～5mm）を通有量含み、素地は粘質。
	E	白色石英・長石粒子をほとんど含まず、素地は粘質。
	F	Eに準ずるが、粘質な素地が縞状に見える。
	G	白色・黒色の微砂粒を非常に多く含む。
土 師 器	H	白色石英・長石粒子を非常に多く含み、素地は砂っぽい。
	I	白色石英・長石粒子を非常に多く含み、素地は粘質。
	J	白色石英・長石粒子をほとんど含まず、素地は粘質（Eに類似）。

須恵器・土師器焼成一覧

i	あまり良くない。
ii	良好だが一部生焼けに近い。
iii	良好。
iv	良好（二次焼成を受ける）。
v	土師器だが須恵質に焼成。
vi	土師器だが須恵質に焼成（二次焼成を受ける）。

1号窯案内

図版 番号	実測 番号	器種	出土地点及び注記	法量 (cm)	残存率 (/36)	成形・調整等	色調 胎土	焼成	備考
1	108	坏蓋	1区土層38、39	口径17.6	3	天井部回転ケズリ。他はヨコナデ。	コ B	iii	重ね焼きⅡa類
2	103	"	4区土層37、第1・2区間ベルト土層38、39、3区土層38、39	口径15.4 器高 4.6	26	天井部丁寧な回転ケズリ。他はヨコナデ。	イ B	ii	"
3	106	"	3区窯体崩壊土、3区土層39、3区東壁土層31下層	口径15.5 器高 3.2	32	"	イ B	ii	"
4	120	"	7区床面㊸	口径15.2 器高 3.1	19	"	イ B	i	"
5	105	"	1・3区間窯体崩壊土、1区土層38、39、6区窯体崩壊土	口径16.0 器高 3.3	11	天井部回転ケズリ。他はヨコナデ。	イ B	ii	"
6	122	"	1区土層38、39、4区窯体崩壊土、3区土層37	口径15.9 器高 2.9	21	天井部雑な回転ケズリ。他はヨコナデ。	キ B	iii	重ね焼きⅡb類？
7	100	"	5・6区間ベルト土層36、3～6区間ベルト黄褐色土	口径16.0 器高 2.8	8	"	7 B	iii	重ね焼き不明
8	97	"	4区床面㊸、㊹の下	口径14.8 器高 2.5	5	"	キ D	iii	"
9	104	"	3区土層39、3区土層37	口径15.0	10	"	イ B	iv	"
10	101	"	3区土層38、1・2区間土層39、4区土層37	口径15.0 器高 2.8	18	天井部回転ケズリ。他はヨコナデ。	外ケ内コ D	iv	焼き台転用 重ね焼きⅠ類
11	109	"	1・3区間土層39、5区床面	口径15.0 器高 2.7	12	"	コ E	iv	焼きゆがみあり
12	99	"	4区窯体崩壊土、3区土層37、6区窯体崩壊土	口径15.0 器高 1.5	17	"	キ D	iv	重ね焼き不明
13	102	"	4・6区間ベルト	口径16.0 器高 1.8	2	天井部回転ケズリ？ 他はヨコナデ。	キ D	iv	"

第8表 遺物観察表2

図版 番号	実測 番号	器種	出土地点及び注記	法量 (cm)	残存率 (\angle 36)	成形・調整等	色調 胎土	焼成	備考
14	119	坏蓋	4区床面①の下	口径15.0 器高2.7	31	天井部回転ケズリ? 他はヨコナデ。	? B	iv	全面に焼土付着
15	110	"	窯内土層37、下部灰原周辺	口径13.6	5	肩部まで回転ケズリの後、3条の沈線。	コ B	iv	重ね焼きⅡa類?
16	83	有台坏Ⅰ	3区土層39、2区窯体崩壊土	口径15.6	12	ヨコナデ。	イ B	ii	
17	76	"	4区黄褐色土	口径14.9 器高4.3	19	底部外面へラ切り後、若干のナデ。他はヨコナデ。	コ B	iii	
18	75	"	4区床面④の下、4区床面	口径14.4 器高4.2	16	底部外面へラ切り後、未調整。	コ B	iii	体外外面黒化
19	80	"	3区土層38、39、1・3区間ベルト土層39、3区窯体崩壊土土器群②	口径14.1 器高4.4	31	底部外面ナデの後、周縁部回転ナデ。他はヨコナデ。	イ B	ii	
20	79	"	3区土層39、3区土層38、39、4区床面④	口径14.5 器高4.1	4	"	イ B	ii	
21	71	"	1・3区土層39、3・4区窯体崩壊土、4区床面、4区土層37	口径13.8 器高4.4	24	底部外面へラ切り後、回転ケズリ。内面ナデ。他はヨコナデ。	外オ内キ B	iii	
22	111	"	3区窯体崩壊土土器群⑦	口径14.1 器高4.2	35	底部外面ナデの後、周縁部回転ナデ。他はヨコナデ。	ウ B	iii	
23	73	"	3区窯体崩壊土土器群⑧	口径13.5 器高4.4	28	"	カ D	iii	
24	114	"	3・4区窯体崩壊土土器群⑨、⑩、3区土層37、3区土層31	口径13.2 器高4.1	30	"	カ B	iii	
25	77	"	1・3区間窯体崩壊土、3区土層31、3区土層37	口径13.6 器高4.0	23	底部外面粗いナデ。他はヨコナデ。	カ B	iii	
26	72	"	3区窯体崩壊土、3区土層37	口径13.2 器高4.2	25	底部外面へラ切り後粗いナデ。内面一面に不整方向ナデ。	コ B	iii	
27	78	"	3区窯体崩壊土土器群①、1区土層38、39、1区土層37	口径13.6 器高4.1	17	底部内面ナデ。他はヨコナデ。	イ B	ii	
28	1	"	4区窯体崩壊土床面近く	—	0	底部外面回転ケズリ。他はヨコナデ。	コ D	iii	
29	66	"	3区窯体崩壊土	口径14.6 器高4.1	13	底部外面未調整。他はヨコナデ。	エ B	iii	
30	70	"	3区床面⑥、3・4区窯体崩壊土土器群④⑤、④⑥	口径14.0 器高3.3	25	底部外面へラ切り後、ナデ。	ク一部ア D	ii	外面に自然釉焼き台に利用
31	74	"	3・4区窯体崩壊土土器群⑤⑥、②区土層38、39	口径14.4 器高4.3	8	底部外面ナデ?	コ B	iv	正位置で焼き台に転用。
32	4	"	2区土層39、3・4区舟底ピット	口径13.2 器高4.4	4	底部外面へラ切り後ナデ。	コ D	iv	外面に降灰付着
33	5	"	5区窯体崩壊土床面近く、1・2区間窯体崩壊土、4区床面⑤	口径14.0 器高4.1	8	底部外面未調整。他はヨコナデ。	ケ・エ B	iv	焼土付着 焼きゆがみあり
34	3	"	3区窯体崩壊土床面近く	口径14.9 器高3.8	2	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	コ A	iv	内面に焼土付着
35	8	"	3区東壁土層31	口径15.0 器高3.7	4	"	ケ D	iv	全面に焼土付着 焼きゆがみ大きい
36	6	"	4区土層37、4区床面①の下、4区床面②	—	0	底部外面雑なナデ。底部内面ナデ。他はヨコナデ。	ウ D	iv	全面に焼土付着
37	9	"	1・2区窯体崩壊土、3区窯体崩壊土、5区窯体崩壊土	口径13.7 器高3.5	10	ヨコナデ。底部外面不明。	ケ B	iv	"
38	2	"	3・4区窯体崩壊土、4区土層37	口径14.1 器高3.7	1	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	コ A	iv	
39	13	"	3区土層37、3・4区ベルト、3区土層37	—	0	底部外面ナデか。他はヨコナデ。	コ C	iv	焼土付着
40	54	有台坏Ⅱ	1区土層38、39、5区窯体崩壊土床面近く	口径12.7 器高3.9	19	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	イ B	ii	無蓋
41	91	"	3区土層38、39、1・3区間ベルト土層39	口径12.2 器高4.0	24	底部外面未調整。他はヨコナデ。	イ B	ii	"
42	89	"	3・4区ベルト床面、4区土層37	口径11.9 器高3.6	20	底部内面不整方向ナデ。外面周縁部回転ケズリ?	イ B	ii	"

第9表 遺物観察表3

図版 番号	実測 番号	器 種	出土地点及び注記	法 量 (cm)	残存率 ($\sqrt{36}$)	成 形 ・ 調 整 等	色 調 胎 土	焼成	備 考
43	118	有台坏Ⅱ	3・4区窯体崩壊土器群㉞	口径12.2 器高 3.7	33	底部外面不整方向ケズリ。他はヨコナデ。	イ B	ii	無蓋
44	60	"	1区土層39、3区窯体崩壊土器群㉞	口径11.6 器高 3.8	35	底部外面回転ケズリ。他はヨコナデ。	ウ B	ii	"
45	64	"	3区土層39、3区窯体崩壊土器群㉞、㉟	口径11.8 器高 4.0	26	底部外面未調整。他はヨコナデ。	イ B	ii	"
46	96	"	3区窯体崩壊土器群㉞	口径11.5 器高 3.7	33	底部外面粗いナデ。他はヨコナデ。	イ B	ii	"
47	95	"	1・2区間ベルト土層39、3区土層39	口径11.8 器高 3.8	31	底部外面未調整。他はヨコナデ。	イ B	ii	"
48	92	"	3区土層38、39	口径11.8 器高 4.1	14	"	イ B	ii	"
49	107	"	3区窯体崩壊土器群㉞、㉟、㊱、3・4区窯体崩壊土器群㉞	口径12.2 器高 3.7	34	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	カ B	ii	"
50	93	"	3区土層39、3区窯体崩壊土器群㉞	口径11.5 器高 3.6	27	底部外面周縁部回転ケズリ? 他はヨコナデ。	ウ B	iii	"
51	94	"	4区窯体崩壊土器群床面近く	口径11.5 器高 3.6	35	"	イ B	ii	"
52	88	"	3・4区窯体崩壊土器群㉞	口径11.0 器高 3.5	26	底部内面不整方向ナデ。外面ヘラ切り後ナデ。	キ D	iii	"
53	87	"	1・3区間ベルト土層39	口径11.2 器高 3.5	14	底部外面未調整に近い。他はヨコナデ。	カ B	iii	"
54	90	"	3・4区窯体崩壊土器群㉞、1・3区土層39	口径10.9 器高 3.6	29	"	カ B	iii	"
55	86	無台坏	3・4区窯体崩壊土	口径13.3 器高 3.7	29	底部外面ナデ。他はヨコナデに近い。	ウ D	ii	
56	69	"	1区土層38、39、3区土層39	口径13.2 器高 3.8	10	"	エ D	ii	
57	85	"	3区窯体崩壊土器群㉞、3・4区窯体崩壊土器群㉞	口径13.6 器高 3.6	23	"	イ D	ii	
58	67	"	2区土層31、3区窯体崩壊土器群㉞	口径13.9 器高 3.6	34	底部外面雑なナデ。他はヨコナデ。	エ D	ii	
59	82	"	4区黄褐色土、8区床面㉞	口径14.0 器高 3.5	20	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	イ D	ii	
60	68	"	1・2区間ベルト土層38、39、3・4区間窯体崩壊土器群㉞	口径13.7 器高 3.5	25	底部外面ナデ。一部周縁部ミガキ。他はヨコナデ。	ア D	ii	
61	65	"	3区土層38、39、3区土層39、7・8区窯体崩壊土器群床面近く	口径12.8 器高 3.5	30	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	ア D	ii	
62	81	"	3区土層39、7・8区窯体崩壊土	口径12.5 器高 3.0	29	底部外面未調整。他はヨコナデ。	ア D	ii	
63	47	"	7区床面㉞	口径13.9 器高 3.6	11	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	キ A	iii	
64	49	"	1区土層38、39、4区土層37	口径13.9 器高 3.7	9	"	コ D	iii	
65	53	"	3区土層37、3・4区間ベルト土層37	口径14.0 器高 3.8	6	底部外面雑なナデ。他はヨコナデ。	キ D	iii	
66	39	"	5区窯体崩壊土層、3・4～5・6区間ベルト黄褐色土、7区床面㉞	口径14.5 器高 3.0	10	"	キ A	iii	焼きゆがみあり
67	46	"	8区窯体崩壊土床面近く	口径13.8 器高 3.1	4	"	キ A	iii	"
68	38	"	1区土層38、39	口径14.1 器高 3.2	15	"	キ A	iii	"
69	40	"	土層37下層	口径13.8 器高 3.1	6	"	コ A	iii	
70	32	"	床面㉞	口径13.8 器高 3.4	8	"	コ A	iii	
71	42	"	3区土層37、7・8区窯体崩壊土床面近く	口径13.4 器高 3.2	5	"	コ A	iii	

第10表 遺物観察表 4

図版 番号	実測 番号	器 種	出土地点及び注記	法 量 (cm)	残存率 (/36)	成 形 ・ 調 整 等	色 調 胎 土	焼成	備 考
72	34	無台坏	1・3区間ベルト、土層38	口径13.6 器高 2.7	2	底部外面雑なナデ。他はヨコナデ。	コ A	iii	
73	41	"	8区床面⑩	口径13.2 器高 3.0	8	"	コ A	iii	焼きゆがみあり
74	35	"	床面⑩	口径13.3 器高 3.2	14	"	キ A	iii	"
75	52	"	1・3区間ベルト窯体崩壊土	口径12.6 器高 2.9	13	"	コ A	iii	
76	48	"	3・4区間ベルト土層37、4区土層37	口径12.3 器高 3.3	14	"	コ A	iii	
77	31	"	3区床面、3区土層39、7・8区間ベルト窯体崩壊土床面近く	口径14.0 器高 4.0	21	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	ア G	i	
78	16	"	3区土層38、39床面近く、7・8区間ベルト窯体崩壊土床面近く	口径14.2 器高 4.1	12	"	エ G	i	
79	30	"	8区床面⑩	口径14.2 器高 4.2	16	"	エ G	i	
80	19	"	3区土層38、39床面近く	口径14.0 器高 3.7	11	"	エ G	i	
81	27	"	3・4区窯体崩壊土土器群②、7区床面⑩	口径14.2 器高 3.6	21	"	エ G	i	焼きゆがみあり
82	24	"	床面⑩	口径14.2 器高 3.9	9	"	エ G	i	
83	28	"	床面⑩	口径14.1 器高 3.9	29	"	エ G	i	
84	194	"	3・4・5区土層37、3・4区窯体崩壊土土器群②	口径13.2 器高 3.6	11	底部外面粗いナデ。他はヨコナデ。	ウ G	iii	ヘラ記号
85	29	"	3・4区窯体崩壊土、4区土層37	口径14.3 器高 3.5	15	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	ウ G	i	焼きゆがみあり
86	17	"	3・4区窯体崩壊土土器群②、4区土層37	口径14.6 器高 3.5	7	"	ウ G	i	
87	15	"	3区土層37	口径14.4 器高 3.5	6	"	イ G	i	
88	20	"	床面⑩	口径14.0 器高 3.7	27	"	エ G	i	
89	21	"	4区床面、5区窯体崩壊土床面近く、6区床面、7区床面⑩	口径14.0 器高 3.6	21	"	エ G	iv	
90	22	"	3区窯体崩壊土土器群②、3・4区窯体崩壊土	口径13.9 器高 3.8	30	"	エ G	i	
91	25	"	3区窯体崩壊土土器群③、3区土層37	口径13.6 器高 3.8	5	"	G		
92	176	"	3・4区窯体崩壊土	口径13.4 器高 3.8	7	"	エ G	i	
93	23	"	3区土層39、3・4区窯体崩壊土土器群②	口径13.4 器高 3.7	11	"	エ G	i	
94	18	"	3区土層37、7・8区窯体崩壊土床面近く	口径13.6 器高 3.2	8	"	ア G	ii	
95	51	"	7区床面⑩	口径13.3 器高 3.3	12	底部外面ヘラ切り後ナデ。他はヨコナデ。	キ A	iv	焼きゆがみあり
96	62	"	3区窯体崩壊土土器群⑩、3・4区窯体崩壊土土器群⑨	口径13.6 器高 3.5	25	底部外面ミガキ。内面一部ミガキ。他はヨコナデ。	イ D	ii	逆位で焼き台に転用 焼きゆがみあり
97	58	"	3区窯体崩壊土土器群⑤	口径13.9 器高 3.4	21	底部内外面ナデの後丁寧なナデ。他はヨコナデ。	コ一部 D	ii	"
98	59	"	3区土層37、3区窯体崩壊土、3区窯体崩壊土土器群⑨	口径13.8 器高 3.2	14	底部外面未調整。他はヨコナデ。	イ D	ii	"
99	57	"	3区窯体崩壊土土器群⑬	口径14.0 器高 3.3	17	底部内・外面ミガキ。他はヨコナデ。	イ D	ii	"
100	61	"	3区土層39	口径14.3 器高 2.9	14	底部外面未調整。他はヨコナデ。	イ D	ii	"

第11表 遺物観察表 5

図版 番号	実測 番号	器 種	出 土 地 点 及 び 注 記	法 量 (cm)	残 存 率 (/36)	成 形 ・ 調 整 等	色 調 胎 土	焼 成	備 考
101	33	無台杯	3区床面	口径14.0 器高 3.2	36	底部外面ミガキ、ナデ。他はヨコナデ。	イ D	ii	逆位で焼き台に転用 焼きゆがみあり
102	63	"	3・4区窯体崩壊土土器群㉔	口径13.8 器高 3.6	9	底面内面粗いミガキ。底部外面未調整。他はヨコナデ。	イ D	ii	"
103	58	"	4・6区間ベルト土層37	口径14.2 器高 3.5	23	底面内外面粗いミガキ。他はヨコナデ。	イ D	ii	"
104	27	"	3・4区窯体崩壊土土器群㉔	口径13.4 器高 3.2	26	"	イ D	ii	"
105	57	"	3区窯体崩壊土土器群㉔	口径13.3 器高 3.1	20	"	イ D	ii	"
106	12	"	3区床面㉓、3区土層37	口径13.9 器高 3.3	11	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	ケ C	iv	焼き台に転用 自然釉付着
107	36	"	7区床面㉔	口径13.2 器高 3.5	2	"	オ D	iv	"
108	50	"	3区窯体崩壊土土器群㉔	口径13.4 器高 3.4	16	"	コ C	iv	"
109	11	"	1・3区間ベルト窯体崩壊土	口径13.4 器高 3.5	12	底部外面若干ナデ? 他はヨコナデ。	ク C	iv	"
110	7	"	1・3区間ベルト土層39	口径13.4 器高 3.4	7	底部外面不明。他はヨコナデ。	オ D	iv	"
111	37	"	3・4区間ベルト窯体崩壊土、 4区床面㉔、6区床面	口径13.4 器高 3.2	2	底部外面未調整。他はヨコナデ。	ク D	iv	"
112	10	"	1・2区間ベルト土層39	口径13.5 器高 3.2	3	底部外面若干ナデ。他はヨコナデ。	ケ D	iv	"
113	26	"	4区床面㉔の下、5区床面	口径14.2 器高 3.7	11	"	ア G	iv	"
114	45	"	3区床面㉔、3区土層31	口径13.8 器高 3.3	18	底部外面ナデ。他はヨコナデ。	エ G	iv	"
115	43	"	3区床面㉔の下	口径14.4 器高 3.3	12	"	ウ G	iv	"
116	44	"	4区窯体崩壊土	口径15.6 器高 3.1	8	"	ウ G	iv	"
117	121	鉄鉢	1区土層39、1・2区間ベ ルト土層39	口径18.5	6	ヨコナデ。	キ D	iii	
118	124	"	4区床面㉔、6区床面	口径16.3	4	"	キ D	iii	径に不安あり
119	127	"	3区舟底ピット	口径18.5	7	"	ア B	i	
120	112	"	3・4区床面、3・5区間ベ ルト床面、3区床面㉔、5区床面	口径18.0 器高 7.4	8	体部下半外面に回転ケズリ。 他はヨコナデ。	キ B	iv	焼き割れあり
121	128	"	3~6区黄褐色土、5区床面、5区 窯体崩壊土、7区床面㉔、㉕、㉖	口径16.3 器高 8.0	32	"	ア B	i	
122	117	"	4区床面㉔、6区窯体崩壊土 床面近く	口径17.9 器高 6.9	4	底部外面へラ切り後、粗いナ デ。他はヨコナデ。	ク D	iv	焼き台に転用
123	115	"	2区土層39、3区土層37、1 ・3区間ベルト窯体崩壊土	口径18.6 器高 9.0	3	底部外面へラ切り後、粗いナ デ。他はヨコナデ。	カ D	iv	
124	113	"	3区床面、3区土層38、39、 9区床面	口径16.8 器高 8.2	4	"	オ D	iv	口縁部焼きゆがみあり 内面に降灰付着
125	129	長頸瓶	埴口床面	—	0	ヨコナデ。	コ D	iii	外面自然釉付着
126	131	短頸壺	2区土層38、39、7区床面㉔、 灰原V-e区第3層、VI-f 区第2層	口径13.4 器高20.3	7	胴部上半2条の沈線。2ヶ所 カキメ。	ケ D	iv	内面に自然釉付着 破片、焼き台に転用
127	116	鉢	1区窯群㉔、3・4区窯体崩壊土、 3区床面㉔、㉕、4区床面㉔	口径19.7	12	外面カキメ。内面ヨコナデ。	オ D	iv	破片、焼き台に転用
128	132	土師器長甕	1区土層39	口径20.2	4	胴部外面平行タタキの後カキ メ。	ス I	vi	
129	151	甕	10区黄褐色土	口径約23	9	外面平行叩きの後、カキメ。 内面同心円叩き。	オ D	iii	

第12表 遺物観察表 6

図版 番号	実測 番号	器種	出土地点及び注記	法量 (cm)	残存率 (/36)	成形・調整等	色調 胎土	焼成	備考
130	137	甕	3区土層38	口径約40	2	カキメの後に外面6本一単位の波状文。	外ケ内コ D	iii	131と同一個体か
131	135	"	前庭部下の灰原、1・2区間 ベルト土層38	口径約40	17	"	外ケ内コ D	iii	
132	136	"	1～3区窯体崩落土、3区土 層38、4区床面④	口径62.4	9	外面3条1単位の波状文。間 に2条1単位の沈線。	外サ内コ A	iv	頸部の剝離著しい
133	200	"	2区土層38、39、3区間層、3・4区 舟底ビット、5区窯体崩壊土	—	0	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	外ケ内ケ D	iv	上下で原体異なる
134	321	土師器長甕	灰原V-d区第1・2層、M -d区第1層	—	—	外面平行叩き、カキメ。内面 同心円叩き。	ス H	vi	
135	314	甕	7区床面④⑦	—	—	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	ク C	iv	
136	313	"	7・8区窯体崩壊土床面近く	—	—	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	ア B	iv	
137	316	"	3区土層38、39	—	—	外面平行叩き、カキメ。内面 同心円叩き。	ケ C	iv	
138	200	"	2区土層38、39、4区床面、 4区土層37、3・4区舟底 ビット、5区窯体崩壊土	—	—	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	ク C	iv	
139	303	"	灰原V-i区第2層	—	—	外面平行叩き、カキメ。内面 同心円叩き。	外ク内コ A	iv	
140	315	"	1区線群一括	—	—	外面平行叩き、カキメ。内面 同心円叩き。	キ C	iii	
141	311	"	3区土層37、4区土層37	—	—	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	コ A	iv	
142	312	"	3区土層37	—	—	外面平行叩き、カキメ。内面 同心円叩き。	ク C	iii	
143	310	"	5区床面、3・4区土層37	—	—	外面平行叩き、カキメ。内面 同心円叩き。	ケ D	iv	焼きぶくれ著しい

灰原

144	125	坏蓋	M-g区、M-f区第1層	口径16.5	3	天井部回転ケズリ。他はヨコ ナデ。	ク D	iii	I類重ね焼きか
145	140	"	M-e区第1層	口径15.8	5	"	ク D	iv	重ね焼き不明(I類) 焼き台に転用
146	139	"	V-d区第2層、V-d区第1層、 M-V-e区間ベルト第1層	口径16.0 器高2.0	2	"	ケ E	iv	焼き台に転用 焼きゆがみあり
147	126	"	M-V-g区間ベルト	口径16.4	6	"	ア A	iii	重ね焼き不明
148	84	"	M-f区第1層、M-e区第1層、 V-e区第2層、V-e区第3層、 Ⅲ-N区間ベルト第1層	口径15.8 器高3.8	3	"	エ B	i	重ね焼きIIa類
149	181	"	表採	口径15.6 器高1.6	5	天井部回転ナデ? 他はヨコ ナデ。	ク D	iv	重ね焼き不明。焼きゆ がみ・焼きぶくれあり
150	123	"	V-e区第2層	口径15.4 器高3.1	11	天井部回転ケズリ。他はヨコ ナデ。	ケ D	iv	重ね焼きIIa類 焼き台に転用
151	133	"	V-d区第1層、Ⅱ-f区ベ ルト	口径14.4 器高3.2	4	"	コ D	iii	重ね焼きIIa類
152	160	"	第1灰層	口径14.0 器高2.4	5	"	コ B	iii	" 焼きゆがみあり
153	180	"	V-e区第2層、M-e区第 1層	口径14.2	13	"	コ D	iii	重ね焼き不明
154	170	"	V-d区第1層	口径13.8	10	"	ク B	iii	重ね焼きIIa類。焼き ゆがみあり。
155	177	有台坏	V-d区ビット、V-d区第 2層	口径13.0 器高3.9	3	底部外面へラ切り未調整。底 部内面ナデ。他はヨコナデ。	キ C	iii	有蓋
156	192	"	V-e区第2層	口径13.0 器高3.8	10	底部外面へラ切り後、若干の ナデ。底部内面ナデ。他はヨ コナデ。	コ E	iii	"
157	191	"	V-e区第2層	口径13.6 器高4.3	4	底部外面、回転ケズリ。他は ヨコナデ。	ケ A	iv	"

第13表 遺物観察表7

図版 番号	実測 番号	器種	出土地点及び注記	法量 (cm)	残存率 (/36)	成形・調整等	色調 胎土	焼成	備考
158	162	"	V-e区第2層	口径12.2 器高 4.5	6	底部外面、ナデを加える。他はヨコナデ。	ウ B	iii	有蓋
159	189	無台坏	V-d区第2層	口径13.4 器高 4.0	14	"	ホ D	iii	焼きゆがみあり
160	182	"	第1層	口径13.0 器高 4.8	2	底部外面へラ切り後、若干のナデ。他はヨコナデ。	カ B	iii	"
161	175	"	N-e区第2層	口径14.1 器高 3.7	3	"	ア B	iii	
162	190	"	V-e区第3層	口径14.0 器高 3.4	4	"	キ D	iii	
163	186	"	M-d区ベルト	口径12.8 器高 3.4	9	"	キ A	iii	
164	195	"	M-d区ベルト	口径13.2 器高 3.5	5	"	コ B	iii	焼きゆがみあり
165	138	"	N-e区第1ピット	口径13.4 器高 3.2	12	底部外面へラ切り後、未調整。他はヨコナデ。	オ E	iii	焼きぶくれあり
166	187	"	M-c区ベルト	口径13.8 器高 3.3	5	底部外面へラ切り後、若干のナデ。他はヨコナデ。	ウ B	iii	外面黒化
167	178	"	周辺表採	口径13.5 器高 3.2	4	底部外面へラ切り後、未調整。他はヨコナデ。	オ D	iii	
168	188	"	V-d区第1層	口径13.5 器高 3.0	6	底部外面へラ切り後、ナデ。他はヨコナデ。	キ B	iii	
169	308	長頸瓶	V-d区第2層	口径10.2	12	ヨコナデ。	ケ D	iii	内面自然釉付着著しい
170	157	鉄鉢	V-d区第2層、M-d区ベルト、V-d区第3層	口径16.7 器高 8.2	7	ヨコナデ。底部粗いナデ。	ウ D	iii	鉄鉢の重ね焼き
171	154	"	M-d区第1層	口径18.2	3	ヨコナデ。	エ D	i	
172	156	長頸瓶	V-d区第3層	—	0	"	ウ E	iv	外面に自然釉付着
173	130	把手付鉢	窯内4区床面①、3・4区窯体崩壊土、3区床面灰原第1層、M-d区ベルト、灰原⑨	口径24.0 器高12.8	14	外面胴部上半カキメ。下半回転ケズリ。	コ D	iv	破片焼き台に転用把手2ヶ所
174	155	鉢	M-f区第1層、上層流土一括	口径33.0	4	外面粗いカキメ。他はヨコナデ。	ア D	i	小片のため傾きに不安あり
175	404	短頸壺	排土	—	0	胴部外面に2条の沈線。	コ D	iii	外面に降灰
176	403	瓶	排土	—	0	ヨコナデ。	ア C	iii	頸部内面自然釉付着
177	401	広口瓶	M-d区第1層	口径17.5	8	"	ア D	iii	内外面自然釉付着
178	405	瓶	M-f区第1層	—	0	底部外角ナデ。他はヨコナデ。	オ D	iv	焼きゆがみあり
179	402	壺?	M-d区第1層	—	0	"	ク D	iii	外面降灰。逆位で焼成
180	141	短頸壺	V-d区第2層、M-N区間ベルト第2層	口径12.5	12	胴部外面平行叩きの後一部カキメ。内面同心円叩き。	外エ内ケ D	iii	外面降灰付着
181	193	"	M-d区第3層、窯体下部周辺表採	口径15.0	10	外面右上がり。ハケの後ヨコナデ。	コ D	iii	口縁部内面降灰付着
182	148	瓶	M-d区第1層	口径14.6	9	外面カキメ。内面同心円叩き。	ケ E	iii	胴部外面降灰著しい
183	183	横瓶	M-d区第3層	—	0	内面ヨコナデ。外面カキメ。	ア B	iii	外面に焼き台融着
184	142	"	灰原⑩、⑪、⑫、V-h区第2層	口径10.6	36	胴部外面叩きの後、カキメ。胴部内面同心円叩きa。	エ・カ D	iii	口縁部外面降灰、自然釉。焼きゆがむ
185	185	"	V-d区第1層	口径15.7	2	胴部内面同心円叩き。	オ D	iii	ほぼ全面に自然釉付着
186	143	"	M-d区ベルト、M-d区第1層、M-d区第2層、V-d区第1層、V-d区第2層	口径11.7	13	胴部内面左半分同心円叩き。胴部外面平行叩き後カキメ。	オ D	iv	外面自然釉付着

第14表 遺物観察表 8

図版 番号	実測 番号	器 種	出土 地点 及び 注 記	法 量 (cm)	残存率 (/36)	成 形 ・ 調 整 等	色 調 胎 土	焼成	備 考
187	145	土師器長甕	Ⅲ-d区第1層	口径約33	3	ヨコナデ。	シ J	iii	
188	144	"	N-e区第1層、Ⅲ-f区ベルト、 V-e区第2層、N-f区第1層	口径約34	3	外面タタキの後、粗いカキメ。 内面カキメ、一部ハケ。	シ J	iii	
189	150	"	V-d区第3層、N-d区第1層、 V-e区第1層、V-e区第2層	口径24	9	胴部外面平行叩きの後、カキ メ。他はヨコナデ。	ス I	v	内面降灰。外面自然軸 付着
190	159	"	V-e区第1層、V-e区第2層、 V-d区第1層、C-Ⅲ、N区 間ベルト、N-d区第2層	口径20.0	9	胴部外面平行叩きの後、カキ メ。他はヨコナデ。	ス H	v	外面に自然軸付着
191	309	"	V-d区第2層	—	—	底部外面不整方向ケズリ。内 面のヨコナデは雑。	ス I	v	外面に自然軸付着
192	146	瓶	Ⅲ・N-d区間ベルト第2層	口径20.2	8	胴部外面平行叩きのちカキメ。 内面同心円叩き。	外エ内ケ D	iii	外面降灰付着著しい
193	179	甕	N-e区ビット。	口径約25	4	ヨコナデ。	ホ D	iii	
194	184	"	N-V-e区間ベルト第1層	口径25.6	2	ヨコナデ。	コ D	iii	外面降灰付着
195	158	"	V-d区第2層、N-d区間 ベルト	口径約26	3	外面カキメ状のヨコナデ。	ク C	iii	外面自然軸付着
196	149	"	e-Ⅲ-N区間ベルト第1層、 N-e区第1層、c-Ⅲ-N 区間ベルト第2層	不明	2	外面突帯の下に波状文	外ケ内オ C	iv	内・外面とも二次焼成 による
197	147	"	Ⅲ-c区第1・2層	不明	2	突帯下部に3条1単位の波状 文と沈線。	ケ C	iii	内面降灰付着
198	134	"	竪内5・6区間④、3区床面⑦ ⑧、5区床面、灰原M-e、V -e区間④⑤第1層、V-d区第2層	口径40	7	口縁部ヨコナデ。胴部外面平 行叩き、内面D a。	ケ D	iv	外面降灰著しい
199	152	"	V-f区第1層、V-f区第2層、V -e区第1層、Ⅲ-f区第1層、V-e 区第2層、N-f区第1層④周辺 表採	口径49.3	3	外面突帯下部に波状文	外ケ内オ D	iii	
200	302	"	V-e区第2層	—	0	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	エ B	ii	
201	307	"	N-e区第1層	—	0	"	ク C	iv	
202	301	"	周辺表採	—	0	外面平行叩き、後カキメ。内 面同心円叩き。	コ B	iii	
203	198	"	"	—	0	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	エ B	iii	一部黒化
204	197	"	Ⅲ-e区第1層	—	0	"	外ケ内コ D	iii	
205	304	"	V-e区第1層	—	0	"	エ B	i	
206	305	"	Ⅲ-f区第1層	—	0	外面平行叩き。一部カキメ。 内面同心円叩き。	ケ C	iii	
207	306	"	V-e区第1層	—	0	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	ケ B	iv	
208	199	"	Ⅲ-N区間ベルト第2層	—	0	外面平行叩き。一部カキメ。 内面同心円叩き。	外コ内オ B	iii	
209	320	"	排土	—	0	外面平行叩き。内面同心円叩 き。	ケ B	iii	
210	406	甕(瓶)	Ⅲ-f区第1層	—	—	外面平行叩き。一部カキメ。 内面同心円叩き。一部ハケ。	オ A	iv	
211	407	瓶	V-e区第3層	—	—	外面カキメ、平行叩き。内面 ハケ。	外ケ内カ B	iii	外面黒化
212	408	石皿	排土	—	—	両面とも使用。	淡黄色		花崗岩質砂岩
213	163	弥生土器	V-i区第2層	—	—	外面にかすかに縄文が見える。	浅黄橙色 砂粒含む	良好	天王山系か
214	153	鉄釉椀	表採	—	—	高台削り出し。	明茶色、 黒色細粒 混	良好	近世以降か
215	161	鉄釉小甕	表採	—	—	底部外面静止糸切り。	茶褐色、 長石細粒 混	良好	越中瀬戸か。鉄釉はハ ケ塗り

第5章 考 察

第1節 正友ヤチャマ1号窯の焼成技術について

1. はじめに

正友ヤチャマ1号窯は第2章・3章で述べた通り、高松・押水窯跡群北群の一角を占める、8世紀中頃の須恵器窯である。構造的には地下式登窯であり、規模的には全長9m以上と比較的大型の部類にはいる。窯内には舟底ピット、階段状床面といった施設が存在しており、特に階段状床面については北陸では確認例が少ない状況にあるものと思われる。本節では以上のような1号窯の構造的な特徴を、要素別に各地域の窯跡と比較し、総合的に検討することによって、1号窯の構造、技術、そして地域的な位置付けを明らかにして行くことを目的とする。

2. 須恵器窯の階段状床面

瓦窯の階段状床面

窯内に設ける階段状床面については、一般には須恵器窯よりも瓦窯のものがよく知られるところである。古代瓦窯については大川清氏の詳細な形態分類と論考がある⁽¹⁾。同氏は窯構造・階段の形態等から瓦窯を登窯11種、平窯5種に細別し、それぞれに意義付けを行った。階段については、最下段で床面から急激に立ち上がる「階」部とそれに続いて窯尻へ向かって小起伏を重ねて行き製品が載せられる「段」部を分離し、それぞれの有無に大きな特徴を見いだした。登窯については「地下式有階有段登窯」から「半地下式分焰柱登窯」までの11種の分類があるが、階段そのものは6世紀代の瓦窯成立当初から9世紀代まで用いられるようである。同氏の分類は非常に窯・階段の特徴を組み合わせて捉えることができるので、本節で須恵器窯の階段を扱うに当たっても基本的に踏襲することにした。

正友ヤチャマ1号窯はこの分類になぞらえると地下式無階有段登窯となる。大川氏は分類のなかで地下式有階有段登窯を瓦窯専用の標式的形態と捉える一方で、瓦窯の半地下式・無階・無段といった要素は須恵器窯との関連を考えている。当然須恵器窯に見られる階段状床面についても瓦窯との関連を逆に考えることもできる。しかし瓦窯の階段が非常にテラス面を広く取り焼成部全面に展開する多段を指標とするのに対して、1号窯では対照的にテラス面が狭く焼成部上方に部分的に認められるに過ぎない。この傾向は後述する様々な地域・時期の須恵器窯の階段にも概ね一致し、普遍化できる特徴の一つと言える。すなわち瓦窯と須恵器窯の階段状床面は成立当初から基本的に大きな形態差を有し、それぞれ独自の展開を見せるものと考えておいたほうが無難であろう。ここでは瓦窯から須恵器窯への技術伝播といった、直接的な関連については一応否定しておきたい。

畿内須恵器窯の階段状床面

内部に階段状床面を設ける須恵器窯については、畿内、東海、丹後⁽²⁾、北陸、関東、東北で類似

が見られ、以下では各地域別にその概要を述べて行きたい。まず、畿内では国内最古級・最大級の須恵器窯跡群として著名な和泉陶邑窯跡群内に認められる。高蔵寺第2（TK2）号窯⁽³⁾は5世紀末に位置付けられ、窯尻に近接して2段の立ち上がりを数えることができる。梅第30-II（TG30-II）号窯⁽⁴⁾は6世紀前半の年代で、焼成部上半に起伏は小さいながら7段ほどが認められる。高蔵寺第41（TK41）号窯⁽⁵⁾は6世紀後半の年代で、階段状床面は非常に不整・不明瞭な掘り込みによって9段ほど数えられる。いずれも地下式無階有段登窯に分類されるこの種の須恵器窯



第47図 階段状床面を有する須恵器窯の分布

は和泉陶邑窯内および畿内全域の膨大な調査例のなかではこの3例のみと言え、ごく少数派の形態と言える。時期的には5世紀末から6世紀代まで存続するようであるが、少数ならぬ3窯それぞれ形態差が著しく、かつそれ以降の時期では認められない事もあって、系譜的に連続しているものなのかどうかは明確ではない。

東海須恵器窯の階段状床面

東海地方では美濃須衛窯跡群、遠江湖西窯跡群の2つの大窯跡群内に一定量以上の類例を見ることができる。美濃須衛窯跡群では岐阜県各務原市の稲田山11号窯⁽⁶⁾、同15号窯⁽⁶⁾、天狗谷2号窯⁽⁷⁾に類例がある。いずれも無階有段窯であり、地下式を基本構造とする。階段は非常に不整・不明瞭な点で共通する。各窯の時期はほぼ8世紀中葉の範疇におさまるものである。窯跡群全体の数から見ればこの種の窯はごく少ないが、時期的な集中が見られることは注目に値する。

湖西窯跡群は5世紀末に成立するが、7世紀前半から8世紀前半まで窯内に階段状床面を設ける須恵器窯が出現し一般化している。後藤健一氏は湖西窯跡群の須恵器窯の形態分類を行っており、それによれば階段状床面を持つ須恵器窯はC-I～V式の五種に分類される。出現当初のものは無階有段型（C-I式）であるがすぐに有階有段型（C-II式）に変化し盛行する。7世紀末頃には有階有段型（C-III a式・M a式）と有階無段型（C-III b式・M b式）が併存するようになり、階部は障壁状に高まり、段部は縮小する。そして8世紀後半以降は基本的には登り窯には段部は見られなくなるという変遷を遂げるものである⁽⁸⁾。これらの須恵器窯はほぼすべてが半地下式であり、階段の起伏が非常に明瞭であることも本窯跡群の大きな特徴であろう。以上のように美濃須衛窯跡群と湖西窯跡群の階段状床面は、構造・時期・群構成の点で対照的なあり方を示すと言える。

関東・東北須恵器窯の階段状床面

5世紀代から7世紀代にかけては須恵器窯の確認例・調査例とも非常に少ないが、8世紀中葉以降は確実に増窯・生産拡大の傾向が見られる地域である。関東では茨城県、栃木県、神奈川県、

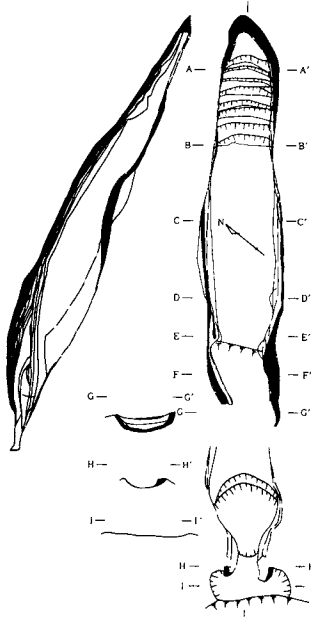
東京都に少数ずつながら類例があり、いずれも無階有段型である⁹⁾。このうち茨城県水戸市木葉下遺跡は8世紀中葉から9世紀初頭にかけて常陸有数の規模を誇る須恵器窯跡群である。その中の木葉下B地点1(B-1)号窯・同2(B-2)号窯にのみ階段状床面が認められた。ともに地下式、無階有段型で焼成室上半に1号窯は8段、2号窯は6段が認められる。両窯は隣り合うがほぼ同時期と見られ、8世紀中葉に位置付けられる。

東北では福島県会津若松市大戸窯跡群に階段状床面の類例が非常に多い。大戸窯跡群は8世紀中葉に成立し以降中世まで活動を継続する、東北の一大窯業生産地と言える。階段状床面はその成立当初から存在し、9世紀代まで普遍的に須恵器窯に認められる。窯構造は地下式有階有段型を基本とし、9世紀末から10世紀代に半地下式形態への移行にともなって段部が消失して行くようである。8世紀後半の南原第33(MH-33)号窯、8世紀末から9世紀初頭の上雨屋137号窯(KA-137)、同12(KA-12)号窯、9世紀初頭から中葉の南原19(MH-19)号窯、同25(MH-25)号窯などが代表例である¹⁰⁾。このうちMH-33号窯は中小型品専用窯と位置付けられている。MH-25号窯は半地下式有階有段型に分類され、灰釉陶器を模倣した製品を焼成している。階段状床面は多段傾向はあるが、有階の形態は湖西窯によく似ており、また製品全般にも東海地方の影響が強いことはすでに指摘されているところである。東北の他の窯跡群では福島県では9世紀初頭の伊達11号窯、宮城県では8世紀後半の硯沢B-3号窯で階段状床面が確認されている¹¹⁾。どちらも無階有段型に分類され、前者は半地下式、後者は地下式である。

北陸須恵器窯の階段状床面

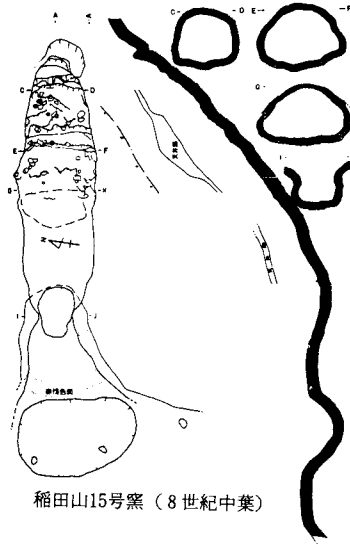
石川県、富山県に少数ながら類例がある。石川県は南加賀窯跡群、高松・押水窯跡群で見られる。南加賀窯跡群では小松市戸津44号窯、同49号窯、同56号窯で確認されており、無階有段窯に分類される¹²⁾。時期は細かい新古はあるが、10世紀の初頭から中葉におさまるものである。該期の須恵器窯は半地下式構造を基本とするが、燃焼部・焼成部に地表から深い位置を取るものがあり、部分的に地下式構造を持っているものと思われる。10世紀の中葉に位置付けられる戸津56号窯では5段の起伏を数え、床面に貼り付いて粘土塊の焼台、すなわち馬爪焼台が検出されている。高松・押水窯跡群には本書で報告した正友ヤチャマ1号窯がある。地下式無階有段型で焼成部の上半に13段以上の階段を設ける。時期は8世紀中葉である。富山県では中新川郡立山町上末2・5号窯で認められる¹³⁾。上末窯跡群は越中東部で8世紀末から10世紀中葉まで須恵器生産を行うが、その背景には東大寺領大荆荘の関与が想定される窯跡群である。2・5号窯は3基の窯体が同一地点で重層して築かれたうちの2基であり、最下部に位置する最古の6号窯の上部に5号窯が、さらにその上部に最新の2号窯が築かれている。すべて半地下式であるが、2・5号窯は6号窯上に重層する結果半地上式に近い構造になるものと思われる。非常に急傾斜になる焼成部の上半に階段を設けるが、5号窯1次床面では2段、同2次床面では4段、2号窯1次床面では4段、同2次床面では5段、同3・4次床面では6段と多段化の傾向が見られる。5号窯1次床の階段は窯尻に近接して強い立ち上がりを示すが、2次床や2号窯では比較的起伏は小さい。時期的には両窯あわせて10世紀前半から中葉に位置付けられ、本節で扱った須恵器窯の中では南加賀の戸津窯例と並んで最も新しいものと言える。

〈畿内・和泉陶器窯跡群〉

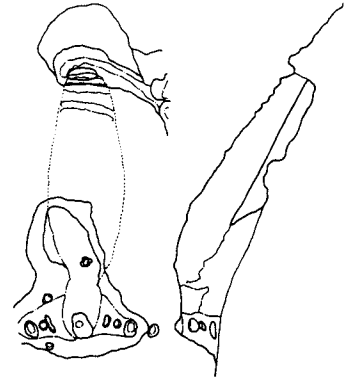


TG-30 II号窯 (6世紀前半)

〈東海・美濃須恵窯跡群〉



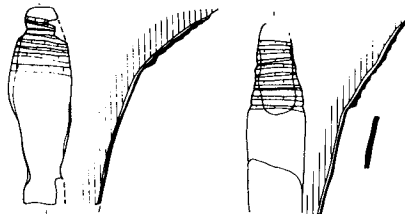
稲田山15号窯 (8世紀中葉)



天狗谷2号窯 (8世紀中葉)

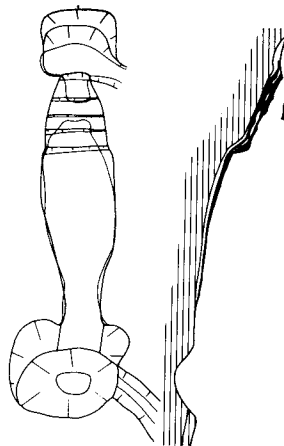
〈東海・湖西窯跡群〉

C-I式

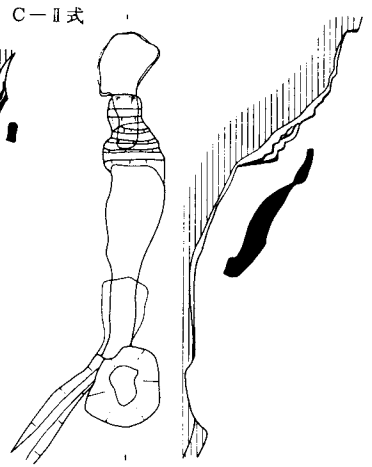


殿田第3号窯
(6世紀末~7世紀初頭)

新居町御墓古窯
(7世紀中葉)

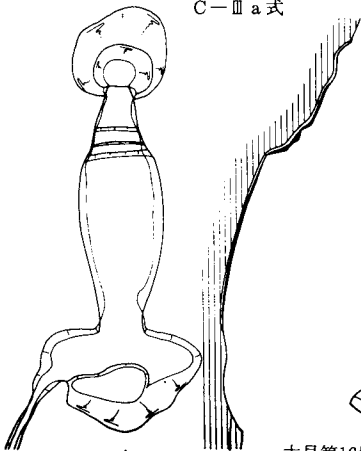


東笠子第37地点II号窯
(7世紀前半)



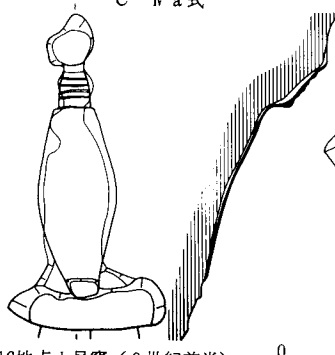
殿田第4地点I号窯 (7世紀前半~後半)

C-III a式



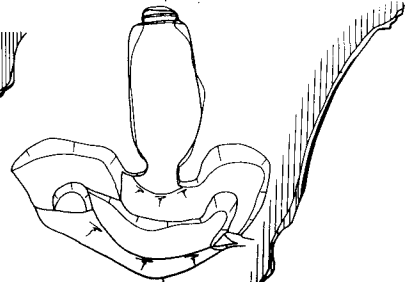
青平1号窯 (8世紀初頭)

C-III a式

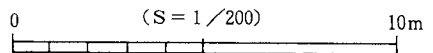


古見第16地点I号窯 (8世紀前半)

C-V式



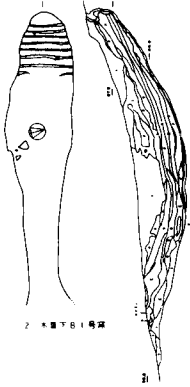
東笠子第44地点VII号窯 (8世紀中葉)



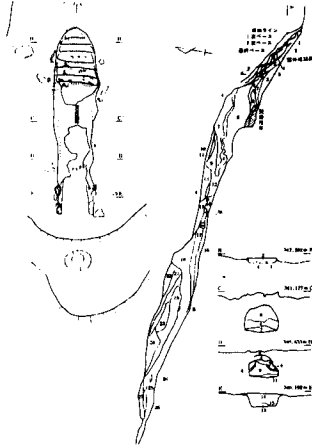
第48図 階段状床面を有する須恵器窯(1)

〈東北・福島県会津若松市大戸窯跡群〉

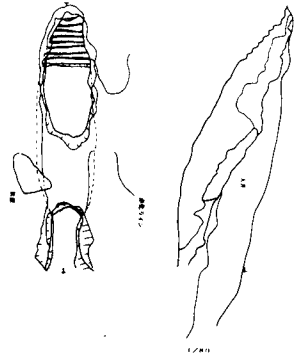
〈関東・茨城県水戸市木葉下窯跡〉



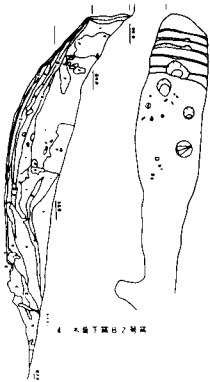
B 1号窯（8世紀中葉）



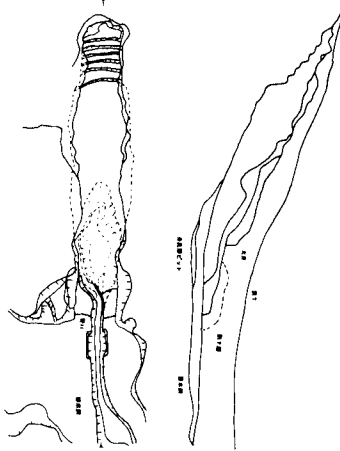
南原33号窯（8世紀後半）



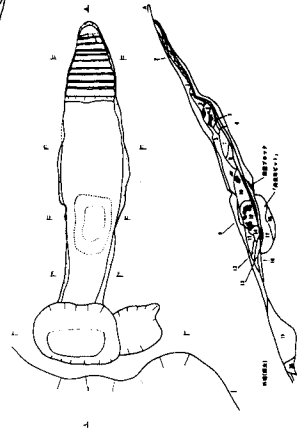
上雨屋137号窯（8世紀末～9世紀初頭）



B 2号窯（8世紀中葉）



南原25号窯（9世紀前半～中葉）



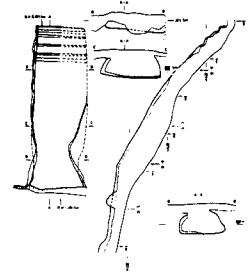
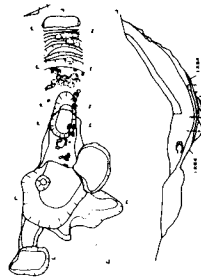
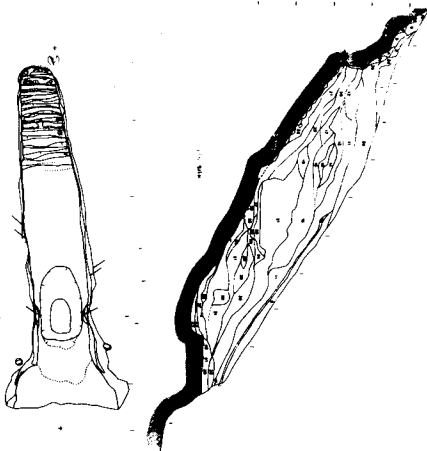
上雨屋12号窯（9世紀前葉）

石川県羽咋郡押水町正友ヤチャマ 1号窯（8世紀中葉）

〈北陸〉

石川県小松市戸津56号窯（10世紀中葉）

富山県中新川郡立山町上末 2号窯（10世紀中葉）



0 (S=1/200) 10m

第49図 階段状床面を有する須恵器窯(2)

階段状床面の比較・検討

以上、ここまでは各地の階段状床面についての所見を述べた。時期的に概観すると、5世紀から10世紀までの広い時間幅の中に存在することになる。最古の確認例は5世紀末から6世紀代の畿内和泉陶邑窯跡群の例である。時期的には後出するが、最も階段状床面が盛行するのが7世紀前半から8世紀前半までの東海湖西窯跡群と、8世紀後半から9世紀前半までの東北大戸窯跡群であろう。8世紀中葉から9世紀前半には系譜的連続性は不明確ながら各地に階段状床面が点在する状況になる。正友ヤチャマ1号窯もその一つである。8世紀中葉前後の時期のこの種の須恵器窯は全国的に見て、湖西窯では終末期、大戸窯では成立期が重なり、点在する各地の窯を含めると数量的には最も多くなる時期と思われ、一つのピークと認められる。最も新しい時期の確認例は10世紀中葉の北陸戸津窯跡群、上末窯跡群の例である。10世紀代に北陸に確認例が集中することは注目し、階段状床面が地域内でより一般化している可能性もあろう。ただ、9世紀後半の類例は全国的にも確実でなく、上末窯・戸津窯例と、時間的に先行する他窯例が系譜的にどのような関係にあるのかは論点を見だし難いように感じられる。

この種の須恵器窯が含まれる窯跡の群内の構成を見てみると、その窯跡群内で主体となるもの・ならないものが明確に別れる。階段状床面を持つ須恵器窯が主体となるものは湖西窯跡群、大戸窯跡群にほぼ限られ、その他の例はほぼすべてがその窯跡群内ではごく少数派で客体的な存在になる。主体・非主体の選択については、湖西・大戸が位置する静岡県・福島県でも非主体窯跡群が散見される⁹⁴ので、窯跡群単位もしくは小地域単位でなされたものと考えられる。

階段状床面を持つ須恵器窯は、構造的には一般的な窯同様に地下式と半地下式に、階段状床面の形状では有階有段と無階有段に大別された。窯構造の変化は一般的に地下式から半地下式への流れで考えられているが、その移行時期には地域差が見られるようである。湖西窯は7世紀代からすでに半地下式構造で、有階有段型の窯を基本とする。大戸窯は時期的に後出だが地下式を堅守し、有階有段型の窯が主体である。これ以外の例は概ね無階有段構造をとり、地下式か半地下式かはそれぞれの地域での変化に準じているようである。

階段状床面の機能については「焼台」とする見解と「煙道・階段」とする見解の2者がある。前者については、階段状床面からの遺物の溶着例・出土例が湖西窯・美濃須衛窯⁹⁵を除いては比較的普遍的に認められること、傾斜が急でそのままでは製品が置けない焼成部上半に認められることから、「焼台」として製品の滑落防止・安置を目的とした施設であるとの想定は容易である。後者は湖西窯の検討から想定された機能である。湖西窯跡群の階段状床面には、①C-II式以降は特に有階部によって窯内で明確に区画されること、②階部から上の傾斜が急激に立ち上がりすぎること、③天井崩落土の堆積が少ないこと、④遺物の床面溶着例・出土例がないことなどの注目すべき特徴がある。④については美濃須衛窯でも共通するという。後藤健一氏はC-II式の有階構造の成立は、燃焼効率を高める技術改良であるとして、C-III式・IV式の時期の無段・有段併在の状況下にも受け継がれる必須構造として高く評価している⁹⁶。同氏や嶋竹秋氏はさらに階段状床面についてその諸特徴から、焼成部に含まれるものではなくむしろその奥、煙道部として整煙機能を果たし、その有段のものは天井を取り外すか壊すかして窯内に入る際の足掛け階段と

しての機能も兼ねていたと解釈したのである⁹⁷。この見解については特定するには確証に乏しいのも事実であるが、一種特徴的な半地下式有階有段構造は他地域窯とは一線を画する存在であり、独自の機能を有していた可能性は高いものと思われる。階段状床面の機能については、この2種が想定され、現実にもその両方が存在するのであろう。そしてその分布から見ると湖西窯を除いては「焼台」を指向するものが大半であると言える。湖西窯もまた出現当初のC-I式窯には他地域窯と共通する機能・形態を有する可能性を残しており、C-II式以降に独特の形態へ変化を遂げて「煙道・階段」という独自の機能を確立し完成させていったものと推定したい。美濃須衛窯例は湖西窯とは距離的に最も近い類例であり、階段状床面は機能的にも近いものになる可能性がある。しかし美濃須衛窯例はより後出的であり、窯構造や形態を違えている。両窯跡群の関係を追求するためには資料不足の感が否めないであろう。大戸窯についてはその盛行時期・地下式という点では異なるものの、有階有段形態が須恵器窯の主流である点では湖西窯に類似する唯一例と言える。しかし大戸窯では階段状床面の遺物出土例・溶着例が比較的多く、「煙道」と「焼台」を兼ねる施設として捉えられている。大戸窯と東海地方、とりわけ湖西窯との関連については常々指摘されてきているが、ここまで述べてきた通り、その盛行時期、基本窯構造、階段状床面の機能等の差は明らかである。大戸窯の成立から操業には東海地方の技術者集団が強く介在したことは確実であるが、美濃須衛窯例からも勘案されるように、それは必ずしも湖西窯のみから工人が東進し技術が伝播したような直接的な系譜は考えにくいのではないかと感じられる。

小結

以上をまとめると、階段状床面を持つ須恵器窯は広い時期・地域にわたって分布するが、この種の窯は、湖西窯・大戸窯といった例外を除いては窯跡群の主体とならず、点的で断続的なあり方を示す現状であり、そして階段の機能は焼台と煙道・階段の両種ある、と表すことができる。階段状床面の出自については論議が分かれるであろうが、後藤健一氏は湖西窯の階段状床面の出現について「外的要因から求めることは難しい」⁹⁸とする一方で「自生的に出現した、とするには証明材料が皆無である」⁹⁹と、内外どちらの系譜についても確証に乏しいことを示している。しかし「階段は生活一般に普遍的に見られる構造」⁹⁹であり、窯構造への応用も可能であるとする憶測も付加している。ここから先の次元では本稿も憶測の域を出なくなるが、おそらくは階段状床面の出自は一つの地域・窯跡に求められるものではなく、「焼台」として須恵器生産もしくは登窯操業そのものに付随する焼成技術の一つとして、生産の開始当初から存在している可能性は十分にあると推定したい。後述するが、北陸においては礫石や失敗製品を焼台として連ねることによって階段状を呈する例が7世紀代から存在している。形態・手法にとらわれない焼台を目的とする潜在的な技術が、床面に施されたものが階段状床面の成り立ちではないだろうかと思像する。但し、湖西窯・大戸窯のように階段状床面が全く別の機能を持つ施設として完成する、もしくはほとんどの須恵器窯に採用される窯跡群・地域については非常に強い政治的な背景と外来的な技術の存在を、特に大戸窯については湖西以外の窯跡群も含めた東海系技術者集団の介在を肯定するものである。また、古代全般を通して少数である階段状床面が多出する時期、例えば8世紀中頃や10世紀前半は、各時期に求められた須恵器生産体制によって、潜在的であるはずの技術が顕

在化する画期と考えている。

3. 須恵器窯の焼台

須恵器窯内において焼台としての機能を果たしているものとしては、階段状床面のほか、一般に礫石、粘土塊、砂、製品転用、専用製品などがあげられる。このうち横長で馬蹄形の粘土塊を床面に貼り付けて用いるいわゆる馬爪焼台と、焼台専用の坏型製品についてはより後出的で、9世紀代以降普及するようである。この項では正友ヤチャマ1号窯に認められた礫石焼台、製品転用焼台についてふれたい。

礫石焼台

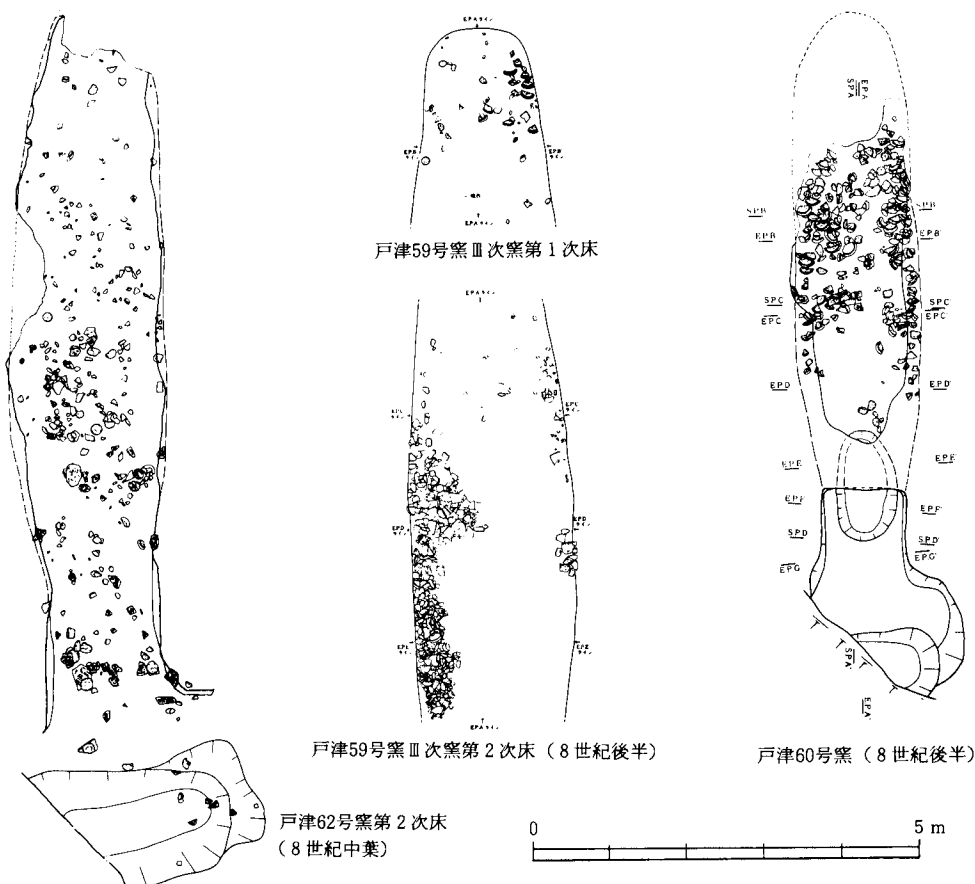
正友ヤチャマ1号窯では、階段状床面と重なって礫石が埋め込まれているのも確認されている。窯内出土遺物の中には定量の礫石があり、床面に礫石と同じくらいの大きさの窪みもいくつか認められている。よって埋め込まれた礫石は原位置を保って遺存しているものは少ないものの、作業時にはかなり多く存在していたものと推定できる。また大きめの礫石については焼成部上位には据えられた痕跡が認められず、下位で用いられたとも推定できる。同様の礫石については、調査例の多い南加賀窯跡群でその様相が明確にされている。望月精司氏によれば、6世紀末から7世紀前半の急傾斜地下式窯が盛行する時期に、焼成部の上半の傾斜が急な位置に認められるという¹⁹。礫石に須恵器が溶着した例もあり、その機能は焼台で、製品の安置・滑落防止を目的としたものと考えられている。正友ヤチャマ1号窯でも礫石・窪みが確認される位置は同じであり、須恵器坏・鉢等と溶着したものも出土していることから同巧のものと考えてよからう。南加賀窯跡群ではその後須恵器窯の緩傾斜化に伴って礫石焼台の使用がとだえ、再び急傾斜化する8世紀代には失敗製品を転用した焼台が用いられる。正友ヤチャマ窯跡が属する高松・押水窯跡群では高松町八野ガメ山2号窯²⁰で確認されている。その他では能美、末、羽咋、鳥屋など県内各地の窯跡群では完全な調査例が少なく、時期的にも偏りがあって礫石焼台の有無は明らかでない。しかし実際に、傾斜の強い焼成部の上位に製品を置くことは不可能に近く、何らかの対策は当然必要なはずである。ちなみに同じ機能で別の素材を用いる手法は前述したように複数あるが、礫石という形態を採用するかどうかはともかく、焼台は傾斜床面を持つ登り窯に不可欠な施設の一つである。各窯跡群でどの手法を選択するかは、素材の確保に当たっての利便さも大きく関わるものであろう。礫石の焼台機能については、従来南加賀窯跡群以外ではあまり注目されることがなかったためもあって、より普遍的に各地に存在する可能性もあるものと感じている。

製品転用焼台

正友ヤチャマ窯跡出土須恵器のなかで、器面が二次焼成を受けていたり、他製品とは異質な降灰を受けていたりすることから、転用焼台と判断されたものは数多い。器種的には坯蓋、有台坏、無台坏、鉢、壺、甕等多彩であるがその中心は坏類、特に無台坏である。基本的に失敗製品の転用と思われるが、坏類では半欠品、完形に近いが口縁部の一方が欠けた品、歪曲した品が大半を占める。坏以外の器種では胴部破片を用いる。無台坏の転用焼台については第3章で、焼成品を転用するものの他に、焼成前に転用されるcタイプが抽出されている。無台坏の転用焼台の使い

方については、逆位で欠けていない口縁を下方へ向けて床面に据え、外底面に焼成する製品が載せられたと考えるのが自然であろう。載せられた製品は荷重的な制約から中～小型製品ではほとんどは坏類と推定できる。このような機能は階段状床面、礫石焼台と共通であり、急傾斜窯には不可欠な機能の一形態と言えるが、据え付けの自由度、据えつけ後の可変性については製品転用焼台が最も大きいものと思われる。

類例は豊富であるが、北陸で最も分析が進んでいるのは南加賀窯跡群である。特に注目されるのは、その配置が明らかになった例であり、戸津59号窯・同60号窯・同62号窯（いずれも8世紀代²⁰）をここで取り上げたい。戸津62号窯第2次床では焼成状態が良好で、完形に近い無台坏10個体ほどが逆位に伏せた状態で、床面に密着して検出された。溶着例や降灰状況から坏類が多く載せられていたことが判明している。戸津59号Ⅲ次窯第2次床では焼成部の窯壁に沿って半欠品の有台皿・無台皿の転用焼台の集積が認められ、最終操業時の際の片付け行為を想定できる。戸津60号窯では半欠け品の有台皿の転用焼台が燃焼部付近や焼成部主軸上を避けた配置がなされていることが確認され、その隙間には大型製品が据えられたと想定された。製品の窯詰めへの復元が可能になった好例でありかつ、大型製品の設置は整焙効果を高める事が予想される。南加賀窯跡群の以上の例は、正友ヤチャマ1号窯の製品焼台の機能・手法と基本的に同じであると思われる、さらにその設置が製品の安置・滑落防止に益するばかりでなく、効率的な窯詰め・焼成にも深く連動すると見なすことを可能にするものとする。

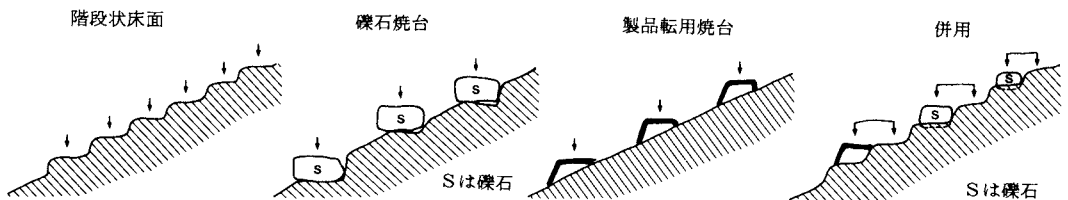


第50図 南加賀窯跡群の製品転用焼台 (S = 1/100)

4. 正友ヤチャマ1号窯の焼成技術

ここまでは須恵器窯の焼台各種について、北陸内外の状況を交えて説明してきた。ここからは焼台各種間の関係を考え、正友ヤチャマ1号窯の焼成技術の一部を考察したい。その前に焼台以外の1号窯の諸特徴については、ここで簡略にまとめ、位置付けておきたい。まず窯跡の立地・構成。これは1斜面に1窯といった構成であり、比較的小規模な生産とその組織の存在が考えられる。8世紀中葉以降南加賀、能美、高松・押水といった各地の窯跡は移動・増加傾向を見せ、戸津窯跡群などでは1斜面に多数の須恵器窯が連続して築かれるが、それ以前のあり方としてはそう奇異なものではない。次に窯体規模。現存長9.2mという規模はやや先行する八野ガメ山2号窯の7.7mよりは若干長大化するもののそう極端な隔たりはなく、同時期の南加賀と比べても大差ない。そして窯構造。地下式はこの時期の高松・押水、南加賀では一般的な構造である。床面の傾斜角度についても地下式窯としては妥当な数字を得ており、同窯跡群の八野ガメ山2号窯にも非常に近い。舟底ピットの存在、その両側壁を狭め窯体幅を絞ること、燃焼部・前庭部の位置・形状、焼成部床面を重ねないこと等もこの時期の北陸の須恵器窯に通有のあり方と言える。すなわち総合的に見ると、正友ヤチャマ1号窯は、階段状床面を設ける点を除けば、8世紀中頃の北陸の須恵器窯としてはきわめて一般的な形態を有している。逆に一般的な形態の窯に階段状床面を設けたとも言い換えられよう。

階段状床面については一部地域の例外を除いてはその多くは焼台として機能しており、焼台は急傾斜床面を持つ窯には製品安置・滑落防止のために必要不可欠でありかつ普遍的な施設と見なしうることは前述した。礫石焼台と製品転用焼台は異なる手法を用いてはいるが、焼台としての機能は同じである。礫石焼台と製品転用焼台については、床面に比較的多数が配置されるが、傾斜に沿って見てみると床面に連続した起伏をもたらしており、階段状を呈する。すなわち地山を成形して作る階段状床面と機能はもちろんのこと、視覚的にも共通することになる。ただし、その性格は若干異なると思われるべきであろう。階段状床面は基本的に築窯時か整備時に造り付けられ、焼成部上位の床面ほぼ全面を成形するので非常に労力を費やし規則性が高い。が、一方で製品の量に応じて配置を変えたりすることが難しくなる。礫石焼台は石の範囲だけ床面に手を加えて据えるので、形成時の自由な配列やその後の変更の余地を多く残している。製品転用焼台は基本的に後付けであり、築窯から窯詰めまでのあらゆる局面で配列の可変・移動がきわめて容易であり、失敗製品を転用するので無駄がない等、最も合理的な側面を持っている手法と言える。



第51図 焼台模式図

さて、正友ヤチャマ1号窯には、焼台として階段状床面、礫石焼台、製品転用焼台の三手法が存在していることになる。1号窯は複数次の操業が想定されているが、床面は重ねずに清掃・整備することで基本的に同じ面を保ち続けている。階段部分については整地されたような痕跡はなく、少なくとも最終操業時はその形と機能をとどめていたようである。礫石やその痕跡らしき窪みは床面を掘り込んで据えられており、階段成形後に設けられたものとわかる。そして固定されたまま検出されたのでやはり最終操業時には用いられていたものとする。製品転用焼台は1号窯の失敗品を転用したと考え、最初の焼成時には存在しないことになる。もしくは、付近の近い時期でより古い須恵器窯から搬入して使用したか、両方の可能性がある。いずれにしても最終操業時には多く使用され機能していたものと言える。よって三種類の焼台が少なくとも1号窯の最終操業において併用されていた可能性はきわめて高いわけである。

1号窯の階段状床面については、同じ機能と視覚的効果を出す階段状の礫石焼台がより古くから北陸に存在していることから、「階段状の焼台」という技術・手法が1号窯以前から潜在することが確実に言える。よって非常に在来的・内在的な技術に近い位置付けがなされ、そしてこの時期に外来の焼成技術の直接的な影響は薄いものと見なすことが可能と考えている。礫石焼台、製品転用焼台についても他地域には直接の出自を求めることは難しいものとする。他2種の自由度の高い手法が存在するにもかかわらず可変性の低い階段状床面を構築することについては、築窯時からの強い目的意識が感じられる。三種の焼台を併用することによって、階段状床面は礫石焼台および製品転用焼台の安置にも益して、かつ製品を置く平坦面を多く確保することができ、複合的・一体的な焼台施設が形成されたであろう²²（第51図）。そしてより理想的な小型品の窯詰め・焼成を可能にしたものと考えたい。正友ヤチャマ窯跡の1号窯内・灰原出土須恵器の器種組成を見ると焼台を一部含むが坏類等供膳具が90%前後と高率を占め、その他の器種は少量でバラエティーにも乏しいという様相が顕著である。同一地域ではほぼ同時期の八野ガメ山2号窯は、階段状床面を持たず、礫石焼台・製品転用焼台を使用した操業であるが、その出土須恵器の器種組成は大きく異なるものとなっている²³。窯の構造・形態としては八野ガメ山2号窯の方がより在地的かつ口能登では一般的であることから、正友ヤチャマ1号窯は築窯当初から中・小型製品、特に坏類等の焼成に重点が置かれていた須恵器窯とも推量されよう。供膳具比率の増大は該期に通有の傾向であり、かつ両窯の器種組成がそのまま窯詰め状況と直結するとは言いえないことから、過大な評価はできないが、無台坏の圧倒的多さ、鉄鉢の顕在化、その他器種の貧弱さなど、かなり組成には偏りがあり、生産器種の選択が行われていたことは確実に言えるものとする。

8世紀中葉を前後する時期は、律令体制下での法制・税制の貫徹、地域拡大といった国家的政治色の濃い社会を背景として、須恵器生産にも画期が訪れる。その一つに各地の窯跡の移動・増加、関東・東北地方での大規模継続生産化等があり、器種的には供膳具比率の増加等がある。こうした状況下で正友ヤチャマ1号窯は、非常に在地色が強い技術・手法を複合させて、器種選択的な須恵器生産を行っている。その成立と操業については、不明瞭ながら前段階の須恵器窯とは需要の形態を異なるものとした供給先が存在し大きく関与しているものとする意義付けたい。

註

- (1) 大川1972。以下の記述も同文献による。
- (2) 森正「阿婆田窯跡群の発掘調査」(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1990 所収)。京都府中郡大宮町阿婆田窯跡群C2号窯に類例がある。半地下式、時期は8世紀後葉である。
- (3) 大阪府教育委員会1978
- (4) 大阪府教育委員会1977
- (5) 大阪府教育委員会1980
- (6) 各務原市教育委員会1983。および各務原市教育委員会渡辺博人氏から教示を得た。
- (7) 渡辺博人「岐阜県美濃須衛古窯跡群の概要」(大戸古窯跡群検討委員会1992 所収)。
- (8) 後藤健一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」(静岡県教育委員会1989 所収)。
- (9) 大戸古窯跡群検討委員会1992、茨城県教育財団1983、佐久間豊「房総を巡る奈良・平安時代土器生産体制の展開に関する諸問題」(財団法人千葉県文化財センター1986 所収)、および八王子市郷土資料館服部敬史氏より教示を得た。他、図示しないが神奈川県横浜市熊ヶ谷窯に類例がある。また、東京都では平成5年度に調査された南多摩窯跡群の須恵器窯に数例が認められ、地下式・半地下式の両方があり、時期は10世紀代であるという。
- (10) 石田明夫「会津・大戸古窯跡群(大戸窯)」(大戸古窯跡群検討委員会1992 所収)
- (11) 村田晃一「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」(大戸古窯跡群検討委員会1992 所収)。
- (12) 小松市教育委員会1985。
- (13) 富山大学人文学部考古学研究室1989。
- (14) 大戸古窯跡群検討委員会1992。福島県伊達11号窯、静岡県水ヶ谷窯の例。
- (15) 各務原市教育委員会渡辺博人氏から教示を得た。
- (16) 8に同じ。
- (17) 後藤健一「湖西古窯跡群の須恵器と窯構造」(静岡県教育委員会1989 所収)、後藤健一「付載 湖西古窯跡群の窯構造」(湖西市教育委員会1985 所収)。
- (18) 8に同じ、「」内引用。
- (19) 小松市教育委員会望月精司氏から教示を得た。
- (20) 高松町教育委員会1985。
- (21) 小松市教育委員会1991。
- (22) こうした他の焼台を補完する機能については、時期的には10世紀代と新しいが小松市戸津61号窯で確認された、製品焼台を固定する機能を持った馬爪焼台(小松市教育委員会1991)に一脈通じるものがあると感じる。
- (23) 八野ガメ山2号窯の器種組成については、平成6年1月23日に高松町社会福祉センターで開催された北陸古代土器研究会見学会資料を参考にした。

参考文献

- 石川県小松市教育委員会 『戸津 第4・5次発掘調査概要報告書』1985年
石川県小松市教育委員会 『戸津古窯跡群Ⅰ』 1991年
石川県小松市教育委員会 『戸津古窯跡群Ⅱ』 1992年
石川県高松町教育委員会 『八野古窯跡群』1985年
大川清 『日本の古代瓦窯』雄山閣考古学選書3 雄山閣 1972年
大阪府教育委員会 『陶邑Ⅱ』 1977年
大阪府教育委員会 『陶邑Ⅲ』 1978年
大阪府教育委員会 『陶邑Ⅴ』 1980年
大戸古窯跡群検討委員会編 『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題』 1992年
各務原市教育委員会 考古・民俗編 考古 1983年
財団法人千葉県文化財センター 『千葉県文化財センター研究紀要10-10周年記念論集-』 1986年
財団法人茨城県教育財団 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6 木葉下遺跡Ⅰ(窯跡)』 1983年
静岡県教育委員会 『静岡県の窯業遺跡』本文編 1989年
静岡県湖西市教育委員会 『大沢・川尻古窯跡調査報告書』 1966年
静岡県湖西市教育委員会 『静岡県湖西市大沢第4・5地点遺跡発掘調査報告書』 1985年
静岡県湖西市教育委員会 『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』 1987年
富山大学人文学部考古学研究室 『越中上末窯』 1989年
北陸古代瓦研究会編・桂書房発行 『北陸の古代寺院-その源流と古瓦』 1987年
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 『京都府埋蔵文化財情報』 1990年

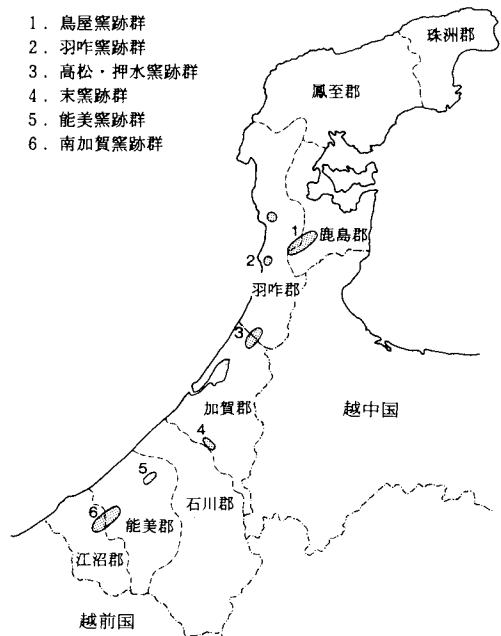
第2節 高松・押水窯跡群の8世紀の展開に関する一考察

1. はじめに

正友ヤチャマ窯跡が属する高松・押水窯跡群（以下、同窯跡群と略する）は、河北郡宇ノ気町北部から同郡高松町、羽咋郡押水町南部の丘陵部一帯に分布する同地域の中核的な土器生産遺跡群である。現在、総基数は60基以上にのぼり、7世紀前半～10世紀前葉までの継続した操業が想定されている。本節では、同窯跡群の中での正友ヤチャマ窯跡の位置づけをおこなうため、窯跡分布、土器様相、消費状況から8世紀の同窯跡群の展開に関して述べる。8世紀の同窯跡群の展開を考える上で、その歴史的背景として国域の変遷を考慮する必要がある。能登国は養老2（718）年に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を分離して立てられる（第1次能登立国）が、天平13（741）年には越中国に併合される。再び立国（第2次能登立国）するのは天平勝宝9（757）年で、弘仁14（823）年に越前国から江沼郡・加賀郡を分割して加賀国を立国するまでの間は、越前国・能登国という区分になる。現在、その国境線は不明確であるが、昭和29年の市町村合併により羽咋郡^{おがみ}大海村が河北郡高松町に、また羽咋郡河合谷村が河北郡津幡町に編入されるまでは、第53図で示したラインが能登と加賀の境となっていることが参考となる。ちょうど^{ながら}長柄台地を分水嶺とするように、大海川水系に属する地域が能登国羽咋郡に、「フゴ（不湖）」と呼ばれる低湿な沼状地形⁽¹⁾と河川を使った内陸舟運により河北瀧につながる水系に属する地域が加賀国加賀郡になる。この国境線が8世紀代まで溯ると仮定するならば、同窯跡群は越前国（もしくは加賀国）加賀郡と、能登国（もしくは越中国）羽咋郡という「国」をまたぐ地域に分布したことになる。

2. 須恵器編年と基準資料

同窯跡群における8世紀を含む編年案は既に何度か提示されている⁽²⁾。それらに新資料を加え、訂正・再整理し、まとめたものが第17表である。現在のところ、田嶋明人氏による編年案⁽³⁾Ⅱ₃期には野寺1号窯資料、紺屋町ムカイノ窯灰原採集資料、八野ガメ山1号窯灰原資料を、Ⅲ期には八野ガメ山1号窯窯内資料、八野ガメ山2号窯灰原資料を、Ⅳ₁期前半には八野ガメ山2号窯窯内資料、正友ヤチャマ1号窯資料を、Ⅳ₁期後半には若緑ホウダン3号窯灰原資料を、Ⅳ₂(古)期は若緑マツタケ山2号窯跡資料、旧若緑6号窯採集資料等を、Ⅳ₂(新)期は若緑ヤキノ2号窯資料をそれぞれ指標と考えている。そして各期とも更に小段階の設定が可能と思われるが、資料数の不足によりⅢ期の八野ガメ山1号窯窯



第52図 県内の古代主要窯跡群

内資料から八野ガメ山2号窯灰原資料への変遷を除けば、明確に提示することができない。

3. 窯跡分布の変遷

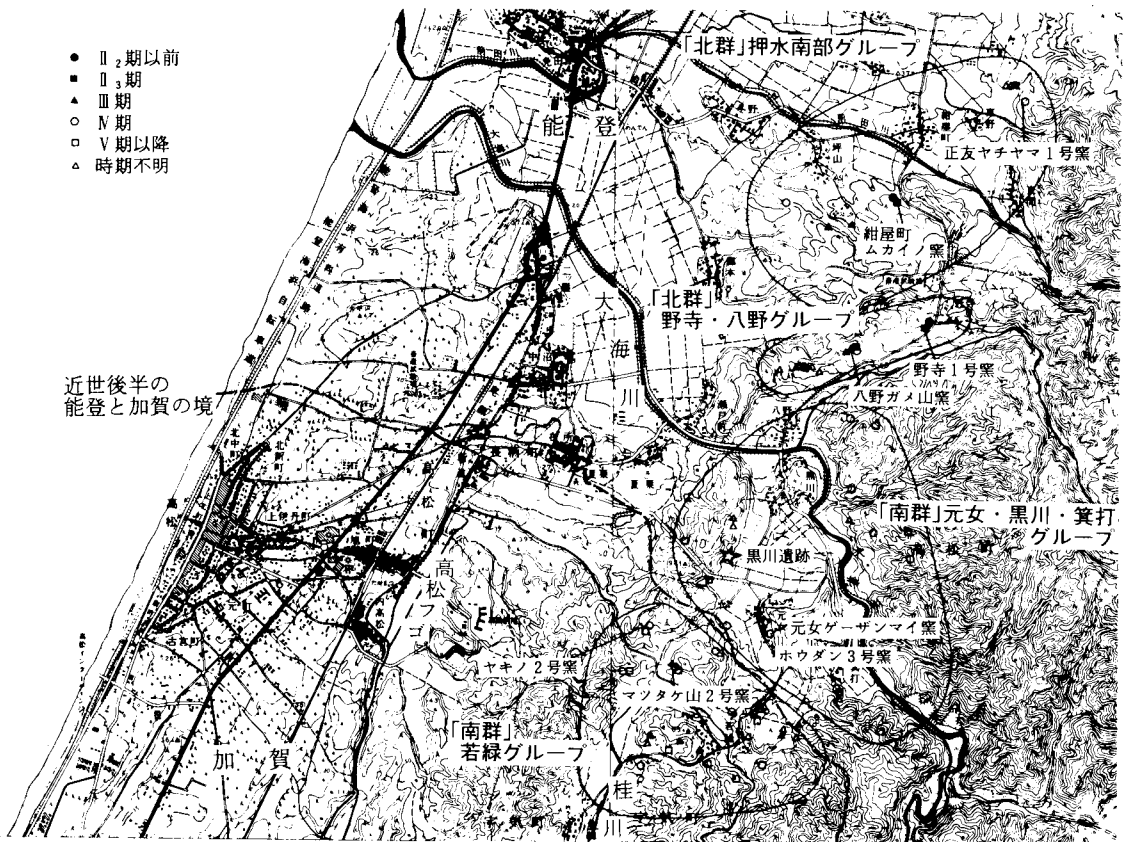
第53図のとおり同窯跡群は、押水町南部～高松町北部の丘陵に分布する「北群」と、高松町北部～宇ノ気町北部の丘陵に分布する「南群」に大きく二分でき、能美窯跡群と同様に「北群」から「南群」へ移動したことが明らかとなっている。さらに窯跡の分布・立地状況などから大海川水系に属する「北群」は、押水南部グループと野寺・八野グループに分けられる。押水南部グループが押水平野に舌状にのびる低丘陵谷部斜面裾に距離を隔てて点在する傾向をもつものに対して、野寺・八野グループは大海川支流である野寺川右岸の同一丘陵斜面上部～中腹に2基程度を基本構成単位とするように継続して築かれる傾向をもつ。一方、「南群」は元女・黒川・箕打グループと若緑グループに分けられる。元女・黒川・箕打グループは大海川本流に面した急峻な丘陵中腹の谷部(標高50～100m)に点在するのに対して、若緑グループは河北潟に注ぐ小河川(桂川)と低丘陵が複雑に入り組んだ地域の低丘陵斜面裾部に複数基ずつ近接して分布する傾向が強い。

現在確認されているところでは、7世紀の開窯期からⅢ期までの窯跡は全て「北群」に属する。そしてⅡ₃期には、押水南部グループで紺屋町ムカイノ窯、野寺・八野グループで野寺1号窯と八野ガメ山1号窯が併存し、確実に「北群」の両グループとも生産をおこない、生産の安定化傾向がみてとれるとともに、両グループ間で別生産単位の存在を想定可能である。Ⅲ期は現在野寺・八野グループに属する2基(八野ガメ山1、2号窯)が確認できる。このような伝統的な生産域は、Ⅳ₁期前半に変化し始める。「北群」では従来の生産域に加え、正友ヤチャマ1号窯が離れた地点で生産し⁽⁴⁾、また「南群」の元女・黒川・箕打グループ⁽⁵⁾で元女ゲーザンマイ窯等が開窯する。窯跡数も5基程度が確認でき、生産は拡大傾向を維持するようだ。これらからⅣ₁期前半に窯跡分布に拡散傾向が現れ、従来からの伝統的な生産体制に何らかの変化があったものと推定できる。また当期の窯跡の分布域はⅣ₁期後半以降の分布域と重複せず、あくまで流動的・過渡的な印象を拭えない。Ⅳ₁期後半には、窯跡の拡散傾向がほぼ「南群」の大海川水系(能登国)に属する元女・黒川・箕打グループと、河北潟に注ぐ水系(越前国)に属する若緑グループに収束・再編され、以降9世紀代に続く同窯跡群の生産域に転ずる。その意味では、8世紀後半以降の同窯跡群は国を挟んだ「みかけ上の一群」とも扱えられる。また操業域も含んだ生産体制全般の再編は、国を挟んだ特殊性故に、同様の時期に大きく転換する他窯跡群と比べても、広範囲に規格性をもった形で貫徹された可能性が高い。なおⅣ₁期後半～Ⅳ₂期の窯跡は両グループで現在16基程度確認でき、生産規模は引き続き増加傾向を維持する。

生産単位に関しては、上記の分布状況に加え、第17表のとおりⅡ₃期以降に継続して窯跡が並存することから、少なくとも2生産単位が併存した可能性が高い。この「北群」の中での2つの生産単位間の交流は、正友ヤチャマ1号窯と八野ガメ山2号窯の極めて近似する有台坯の存在や、9世紀以降の器種組成の共通性などから、積極的に想定すべきであろう。ただし「南群」では元女・黒川・箕打グループの様相が不明であるが、若緑グループに属する若緑ヤキノ2号窯の器種組成は豊富な印象が強く、将来的には消費地の動向を反映したグループ間の器種の質的な差を指

第17表 高松・押水窯跡群の8世紀編年試案

田嶋氏 編年区分	北 群		南 群	
	押水南部グループ	野寺・八野グループ	元女・黒川・箕打グループ	若緑グループ
Ⅱ ₃ 期	紺屋町ムカイノ窯灰原	野寺1号窯 八野ガメ山1号窯灰原		
Ⅲ期		八野ガメ山1号窯窯内 八野ガメ山2号窯灰原		
N ₁ 期前半	正友ヤチャヤマ1号窯 冬野オオクボ窯	八野ガメ山2号窯窯内	元女ゲーザンマイ窯 元女新開山窯	
N ₁ 期後半			黒川E地点	若緑ホウダン3号窯灰原
N ₂ (古)期		(八野アカサカ窯?)	黒川A地点	若緑マツタケ山2号窯 若緑タケヤマ窯 若緑旧6号窯資料
N ₂ (新)期			黒川B、C地点 箕打タカンニヤマ1号窯	若緑ヤキノ2号窯



第53図 高松・押水窯跡群分布図 (S=1/50,000)

摘できるかもしれない。

4. 各期の様相 (第54～57図)

上記のとおり、8～9世紀は「北群」・「南群」とも2生産単位が併存する可能性をもつ。本来ならばグループごとに器種構成などの変遷をみるべきであるが、現在その準備ができていない。そのため、比較の様相の明らかな窯跡で代表させ、供膳具を中心に変遷を記する。以下、Ⅱ₃期は紺屋町ムカイノ窯、野寺1号窯、Ⅲ期は八野ガメ山1、2号窯、Ⅳ₁期前半は正友ヤチャマ1号窯、Ⅳ₁期後半は若緑ホウダン3号窯、Ⅳ₂(古)期は若緑マツタケ山2号窯、Ⅳ₂(新)期は若緑ヤキノ2号窯を取り上げる。なおⅣ₁期後半～Ⅳ₂期は「南群」若緑グループでの様相となる。

(a) 器種組成と特徴

供膳具ではⅡ₃期とⅢ期の間で有蓋器種から無蓋器種への転換が認められる。Ⅱ₃期は明瞭な数字を示せないが、無台坏に比べ有台坏がかなり多いのに対して、Ⅲ期でその比率が大きく逆転⁽⁶⁾、Ⅳ₁期前半の正友ヤチャマ1号窯窯内資料で約1:5(口縁部計測法)、Ⅳ₂(新)期で約1:3(破片数計測法)と、無台坏が完全に主体となる。また組成からみれば、Ⅱ₃期は有蓋有台坏2法量+無蓋(?)有台坏1法量+無台坏3法量、Ⅲ期には有台坏2法量+無台坏2法量であったものが、Ⅳ₁期前半に有台坏2法量+無台坏1法量2タイプに整理され、Ⅳ₁期後半以降の有蓋有台坏3法量+無台坏1法量+(高坏+盤)への転換を果たす。ただし盤・高坏は8世紀を通じて同窯跡群の主要器種を構成せず、比較的産する若緑グループでもわずか数%の比率を占めるにとどまる。この点で加賀地方の他窯跡群とは異なり、能登地方・越中の様相に包括される組成を示すことは、既に指摘されているとおりである⁽⁷⁾。また7世紀以降の伝統的な形態の高坏・盤に加え、新タイプの高坏・盤の出現はⅣ₁期後半で確認できる。

壺・瓶類は、資料数にばらつきをもち不明な点が多いが、8世紀を通じて長頸瓶、短頸壺、横瓶が主要な器種となる。新器種はⅢ期～Ⅳ₁期前半に段階的に多くが出現、また7世紀以来の器種は大部分がⅢ期のうちに消滅、一部Ⅳ₁期後半まで残る。現在、Ⅲ期に広口瓶、東海系の注口付瓶、短頸壺、広口短頸壺、浄瓶、鉄鉢等が、Ⅳ₁期前半に台付短頸壺、平鉢が、Ⅳ₁期後半に底部静止糸切り技法の鉄鉢が、Ⅳ₂(新)期に双耳瓶がそれぞれ出土している。また特殊器種ではⅣ₂(新)期の若緑ヤキノ2号窯で環状鈕をもつ坏蓋が目立つ存在となる。供膳具を含めた器種は、越前国に属する若緑グループがより豊富な組成をもつ印象が強い。

土師器は、Ⅲ期に須恵器窯跡に近接した小型平窯で長甕・鍋類を焼成し、須恵器と土師器の一体的生産が始まる。Ⅳ₁期以降は長甕・鍋類を須恵器窯で焼成し、須恵質に還元された長甕・鍋類の出土は普遍的なものとなる。ただし、後述するようにⅣ₁期は過渡的な状況を呈し、生産が不安定な印象を払拭できない。なおⅣ₁期以降は須恵器窯に近接した小型平窯は検出できず、別地点での「住み分け」ともいえる分布を示すことが予想される。

(b) 各器種の変化

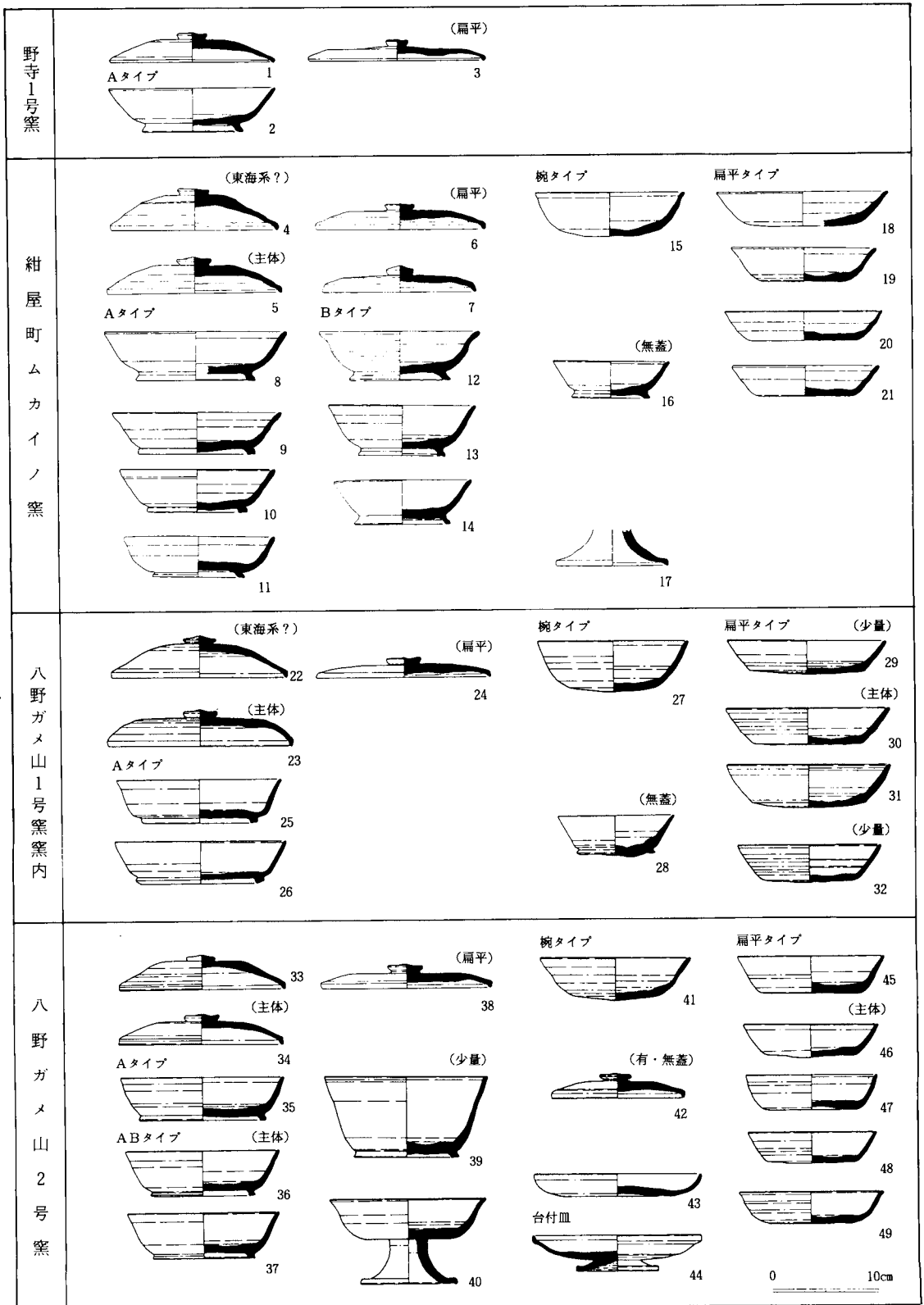
坏蓋・有台坏

Ⅱ₃期は有蓋有台坏2法量+無蓋有台坏1法量を基本とする。野寺1号窯では偏平なAタイプ

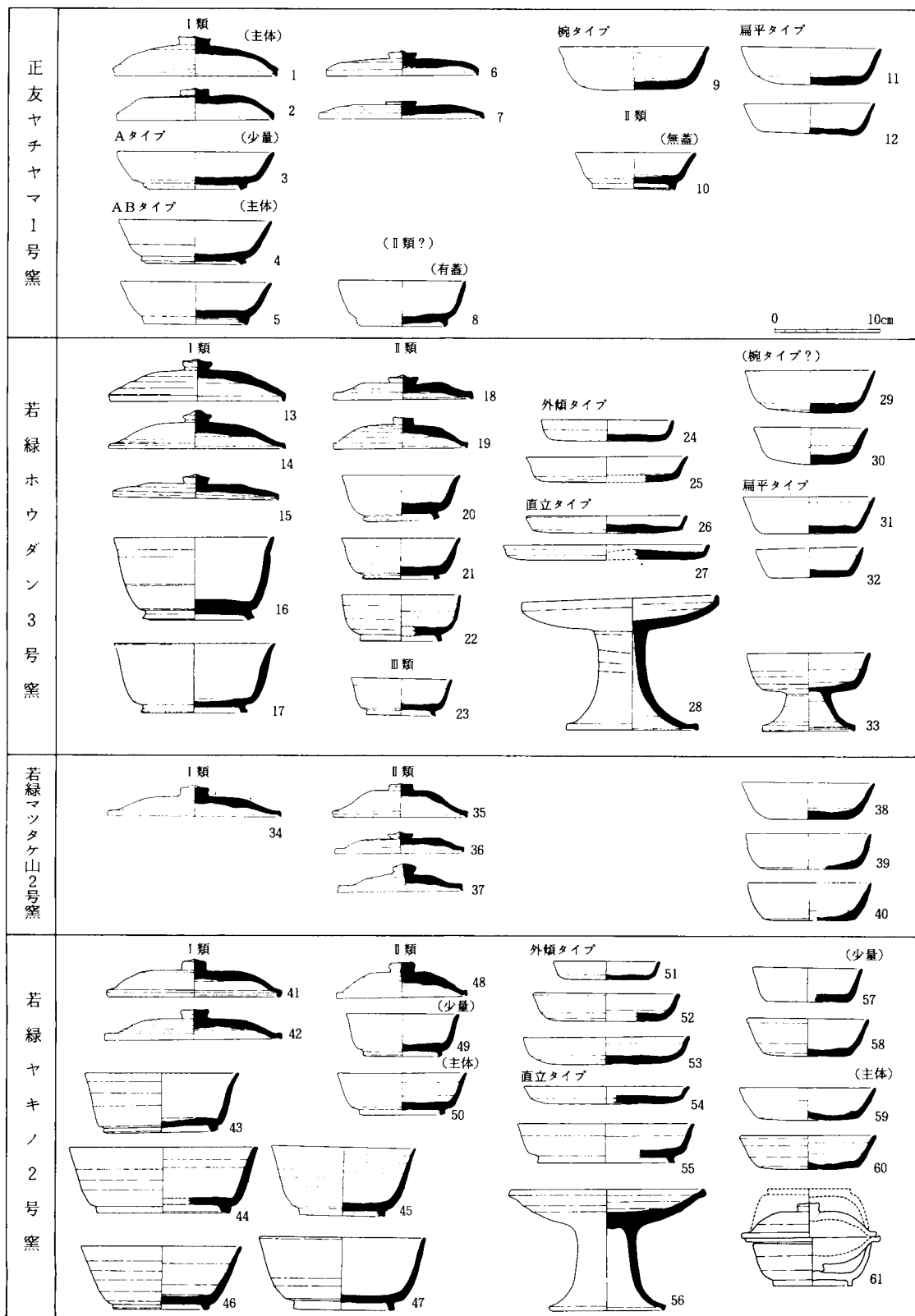
の有蓋有台坏が確認できる。外側に開きながら長くのびる体部と強く外展する台部を特徴とする。紺屋町ムカイノ窯では扁平なAタイプ（器高4cm前後）に加え、深身で底径の小さいBタイプ（器高4.5～5cm）が定量存在する。Bタイプは腰が張り、口縁部が大きく外反する個体と体部が直線的にのびる個体が併存する。口径はともに、15.5～17.5、14～15cmに分布、後者が主体となる。坏蓋は天井部に丁寧なケズリ調整を幅広く施すことを基本とし、口縁端部を丸く仕上げる個体が多い。天井部にケズリ調整を施すことはⅣ₁期まで続く。形態は平笠タイプが主体で、扁平タイプ、東海系に近い山笠タイプも認められる。無蓋有台坏は量的に少なく、第54図16で口径11cm、器高3.1cmを測る。なお折戸靖幸氏のご教示によれば、八野ガメ山1号窯灰原は紺屋町ムカイノ窯に準じるが、若干口径が小さく、また直線的にのびる体部の有蓋有台坏が主体をなす点で若干様相が異なる。Ⅲ期は基本的に有蓋有台坏1法量+無蓋有台坏1法量で、深身の有台坏（第54図39）が極く少量存在する。八野ガメ山1号窯窯内では口径15～16cm、器高4cm強を測る扁平なAタイプのみが確認できる。下半の張らない体部はほとんど外傾せず、外展度合いの弱い低い台部を付す。坏蓋は前期と同様3タイプ存在し、天井部の広い平笠タイプが主体となる。八野ガメ山2号窯灰原の有蓋有台坏は、A、Bタイプの折衷的な形態（ABタイプ）が主体となり、口径14～15cm、器高4.5cm弱と口径は縮小化にむかう。Aタイプは少量のみ残ると考えられる。また口径12cm前後の蓋の存在から、無蓋有台坏の一部は有蓋となるようだ。坏蓋は前期の様相と同様に3タイプ確認でき、天井部のケズリ調整を丁寧に施す。

Ⅳ₁期前半はⅣ₁期後半とは深身の器種が存在しない点で大きく異なる。有蓋有台坏（Ⅰ類）は外展度合いの弱い台部をつけたABタイプが完全に主体となり、Aタイプは極く少量残存するにとどまる。ABタイプは口径13～15cm、器高4～4.5cmと、さらに口径の縮小化が進んだ個体が目立つ。坏蓋は平笠タイプが主体で、山笠タイプは存在しない。またボタン状の鈕をつける個体が増加する。口径10～11cmを測る有台坏Ⅱ類は定量存在し、本来有蓋器種であるにもかかわらず選択的に無蓋を指向したと考えられる⁽⁸⁾。Ⅳ₁期後半は深身の有蓋有台坏3法量と以降に続く組成に大きく転ずる。ただしⅢ類はⅣ₂期も含めてほとんど確認できず、本質的に2法量といえる。Ⅰ類で口径14～17cm、器高6～8cm、Ⅱ類で口径11～12.5cm、器高4～5cm、Ⅲ類で口径10～11cm、器高3.5～4cm前後を測り、外展する台部をつけたⅡ類が主体となる。Ⅰ類では第55図17のタイプが大部分を占め、直立気味の体部は口縁部で小さく外反する。Ⅱ、Ⅲ類は肉厚で腰の張った印象を受け、底部外面未調整に近い個体が5割程度を占める。また台部は比較的背が高い傾向をもつ。坏蓋は依然として天井部にケズリ調整を施す。Ⅰ類坏蓋の大部分が平笠タイプを呈するのに対して、Ⅱ類は口縁基部に平坦面をもつようになる。また大部分は崩れた宝珠形の鈕をつける。

Ⅳ₂(古)期は口径が最も縮小し、調整の簡略化が進む時期と考えている。有台坏は第55図43、45につながる2タイプが併存するようだ。直立もしくは外展度合いの弱い断面方形の台部をつける。坏蓋は全体に器高を減じ、Ⅰ類が天井部にケズリ調整を施すのに対して、Ⅱ類は大半をナデ調整で済ませる。ともにボタン状の鈕をつけ、口縁基部に平坦面をもつ個体が増加する。Ⅳ₂(新)期は口径が拡大傾向に転じることで、有台坏は扁平な印象が強まる一方、Ⅴ期につながる底径の縮小したタイプ（第55図46）も出現する。直立もしくは内屈した台部が目立つ。Ⅰ類はバラエティー



第54図 高松・押水窯跡群の8世紀の変遷(1) (S=1/6)



第55図 高松・押水窯跡群の8世紀の変遷(2) (S=1/6)

をもち、口径14~16cm、器高6cm前後、Ⅱ類は口径11~13cm強、器高4cm前後をそれぞれ測り、明確なⅢ類は確認できない。やや器高の増した坏蓋は大部分がボタン状の鈕をつけ、口縁基部の平坦面がより明瞭となる。Ⅰ類坏蓋は天井部のケズリ調整を省略した個体が主体になり、Ⅱ類が全てナデ調整であることとあわせ、調整の簡略化が一層進む。なお第57図のような環状鈕をもつ坏蓋が定量存在する。口径18~20cmで断面三角形の環状鈕を付すタイプと、口径14~16cmで断面方形の環状鈕を付すタイプが認められる。

無台坏

Ⅱ₃期は偏平タイプ2法量、椀タイプ1法量が確認でき⁽⁹⁾、いずれも底部外面を若干のナデ調整で仕上げる。偏平タイプは口径15~16、13.5~14cmを測り、前者は体部と底部の境を円滑に仕上げる個体が多いのに対して、後者は明瞭に屈曲させる個体が多い。椀タイプは口径14cm前後、器高3.4~4.4cmを測り、口縁部で急激に薄くなり、端部を小さく外反させる特徴をもつ。Ⅲ期以降は無台坏が供膳具の主体に転ずることは前述のとおりである。八野ガメ山1号窯内では偏平タイプ1法量、椀タイプ1法量が存在し、偏平タイプが主体となる。体部と底部の境を明瞭に屈曲させる偏平タイプは、外傾する体部が長くのびる。口径13.5~15.5cm、器高3cm強~4.5cmと、前期の法量を残す個体(第54図29)が残存する一方、より深身の個体(同30、31)が主体となる。また口径の縮小した個体(同32)も少量認められる。椀タイプも器高が増し、底部の突出は弱まる傾向を示す。八野ガメ山2号窯灰原では両タイプの法量がかなり接近する。主体を占める偏平タイプは口径12cm弱~14cm、器高3~4cmと口径の縮小が進み、器高も若干低くなる傾向にある。また丸底風を呈し、体部の外傾度合いがかなり弱くなる個体も認められる。その比率をかなり減ずる椀タイプも同様な傾向を示す。

V₁期前半は前期の様相を色濃く残すものの、椀タイプが偏平タイプを指向することから、両タイプの形態・法量は区別がつかないまでに近似してくる。主体を占める丸底風の偏平タイプで口径12.5~14cm、器高3~4cm弱、椀タイプで口径13~14.5cm、器高3.2~4.2cmを測る。V₁期後半は口径11~12.5cm、器高3~4cmと、前期より口径の縮小が一段と進むことで、深身の印象が強まり、椀タイプと偏平タイプは区分できない。体部下半が張る丸底風の個体が主体を占める一方、平底風を呈する個体も少量確認できる。V₂(古)期は器高は変わらないものの、口径は11~12cmと最も縮小する時期と考えられる。下半に若干の膨らみを残した体部はほとんど外傾せず、平底風につくった個体が主体をなす。V₂(新)期は口径が拡大傾向に転ずる。前期の法量・形態をもつ個体が少量残るものの、外傾する体部が直線的にのびる偏平な平底または平底風を呈した個体にはほぼ統一される。またV期につながる底径の縮小がみられる個体も存在する。法量は口径11.5~13cm弱、器高3cm弱~3.5cmが中心で、底部はナデ調整を施すものが大部分を占める。

高坏・盤等

前述のとおり、供膳具に占める比率はかなり低い。Ⅲ期までは7世紀の系譜をひく高坏・無台盤が極く少量生産される。また八野ガメ山2号窯で東海系の台付皿(第54図44)が出土している。V₁期前半の正友ヤチャマ1号窯では高坏・盤の出土をみない。V₁期後半は伝統的な小型低脚タイプ、中型中脚タイプの高坏に加え、新器種として倒蓋長脚タイプ(坏下部にケズリ調整)が出

現する。また無台盤でも内湾タイプ（金属器模倣）に加え、外傾タイプや直立タイプが新出する。底部外面にはナデ調整を施す。Ⅱ₂(古)期は資料が少なく詳細不明であるが、末窯跡群に出土例のある底部ケズリ調整の椀が確認できる。Ⅱ₂(新)期の若緑ヤキノ2号窯では比較的高坏・盤は目立つ。高坏は倒蓋長脚タイプが大部分を占め、中型中脚タイプが少量残存するようだ。無台盤は外傾タイプと目される体部と底部の境に丸く仕上げたタイプが大部分で、極く少量直立タイプが出土している。底部外面はナデ調整となる。また同窯跡群で初例となる有台盤や、仏器などの特殊品と考えられる小型台付坏（第57図）が極く少量出土している。

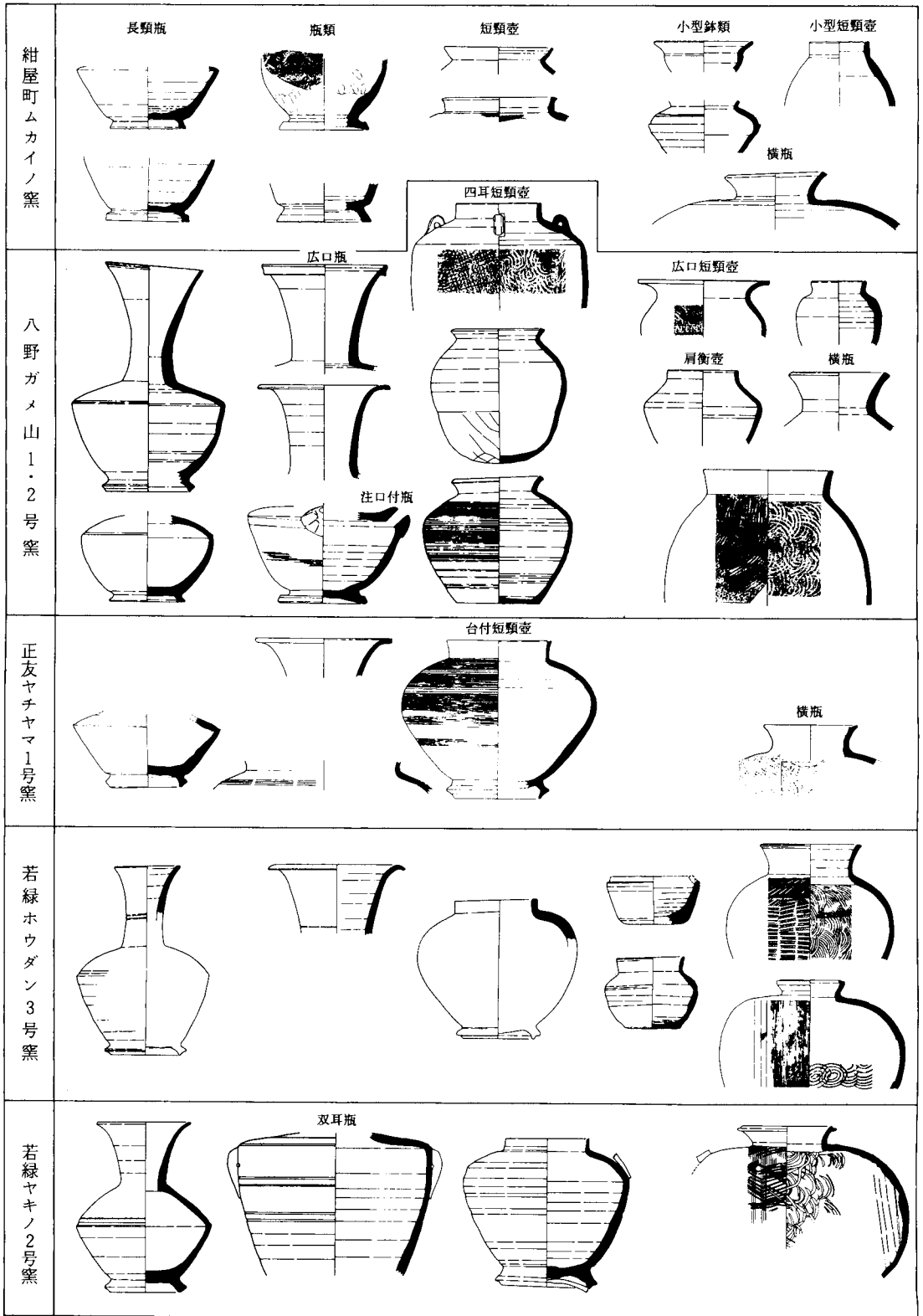
壺・瓶類（第56、57図）

8世紀を通じた主要な器種として、長頸瓶、短頸壺、横瓶がある。長頸瓶はⅡ₃期では強く踏ん張り長くのびた台部が、Ⅲ期にはやや弱くなり、また肩部に丸味をもつタイプが確認できる。Ⅳ期以降は、器高の低下とともに口頸部が短くなり、また肩部の下がったものへと変化する。短頸壺はⅢ期に無台の新タイプが、Ⅳ₁期に台付の新タイプが出現するようだ。後者は球胴形を呈し、胴部上半に最大径をもつ。横瓶は完形品が少なく、詳細不明。

Ⅲ期に新たに出現すると考えられる器種は、広口瓶、東海系の注口付瓶、広口短頸壺、水瓶、鉄鉢がある。広口瓶としたものはⅣ₁期以降も口径が比較的小さく、また口頸部は長くのびる印象を受ける。東海系の注口付瓶はしっかりとした台部をつけ、他の時期に確認例はない。広口短頸壺も同様である。口縁部は大きく外反した平底を呈し、肩部に波状文を付す個体もある。水瓶は判然としないがⅡ₂(新)期にも存在するようだ。焼成量はほとんどない。Ⅲ期の鉄鉢は、つくりの丁寧なタイプ（下半にケズリ調整？）であったものが、Ⅳ₁期前半に無調整に簡略化されたタイプが出現、両タイプともⅡ₂期まで窯差をもちながら併存する。なお鉄鉢は同窯跡群では普遍的な出土をみる。Ⅳ₁期前半に新たに確認できる器種として、頸部でくびれるタイプの平鉢と、底部からやや内湾しながら直線的にたちあがるタイプの平鉢がある。またⅣ₁期後半には底部から直線的にたちあがる平鉢が存在し、把手を付す個体も確認できる。前後の時期に出土例がなく、詳細不明。Ⅱ₂(新)期に双耳瓶が確認できるのは、前述のとおりである。出現がⅣ₁期まで溯るか否かは不明である。逆に、Ⅱ₃期の内に古いタイプの短頸壺、小型の鉢類が、Ⅲ期のうちに小型肩衝壺、ナデ肩の小型短頸壺、平瓶、四耳短頸壺が、それぞれ消滅するようだ。また小型の壺類の一部はⅣ₁期後半まで残存すると考えられる。

甕

大甕（口径50cm以上）、中甕（同40cm前後）、小甕（同20～25cm）の3法量が存在し、中甕が主体となる。大・中甕は、Ⅳ₁期前半まで嘴状にのびる口縁端部直下内（外）面に突帯をつけ、口頸部を波状文・沈線で加飾する個体が主体となる。Ⅳ₁期後半の口縁端部は斜め下方向に嘴状にのび、口縁部内面の突帯はなくなる。口頸部の加飾は数条の波状文のみとなり、無文も定量存在する。Ⅱ₂(新)期は判然としないが、口縁端部を斜め下方向に長くひきのばす傾向と突帯貼付は維持するようだ。また口頸部の加飾は無文が主体となり、乱れた1条の波状文を施す個体は少量残存する程度となる。小甕はⅡ₃期に口縁部に突帯をもつ個体や口頸部にカキメ調整を施す個体が少量存在するものの、無文が主体である。Ⅲ期以降は全て無文となり、形態変化に乏しい。



第56図 高松・押水窯跡群の8世紀の変遷(3) (S=1/8)

土師器

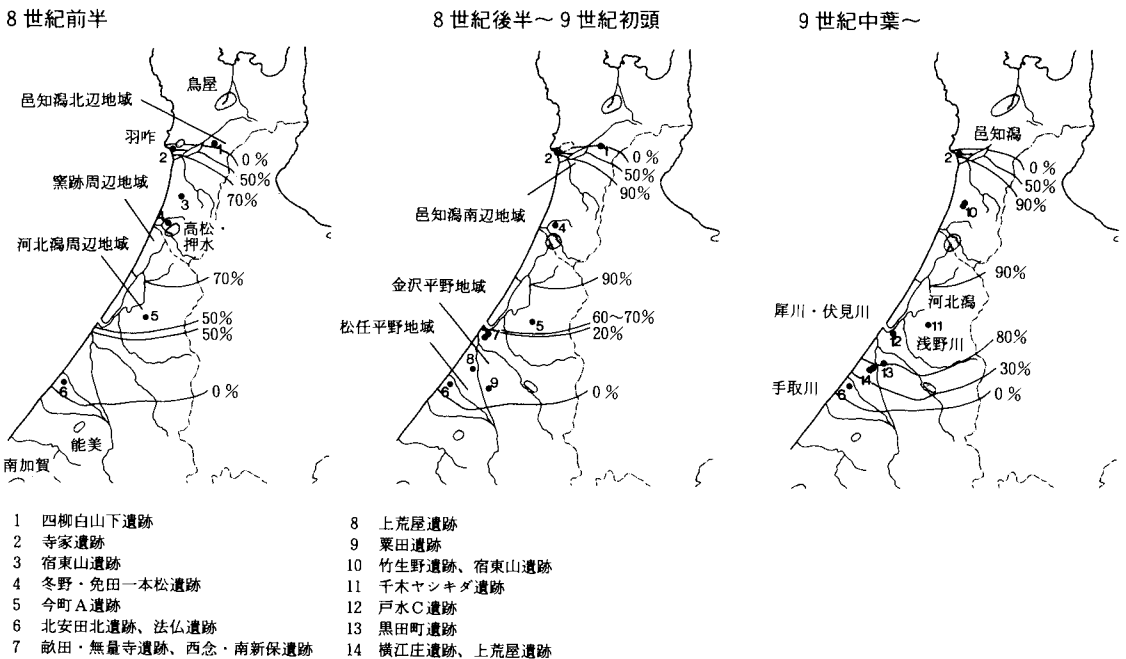
Ⅲ期以降に土師器との一体生産が確認できる。八野ガメ山1号窯では近接して小型平窯が検出され、ハケ調整の長甕が少量出土している。また八野ガメ山2号窯でも同様にハケ調整の長甕と北陸型鍋を小型平窯で定量生産するようだ。いずれも土師質に焼成される。Ⅳ期以降は須恵質に焼成された長甕の出土は普遍的になる一方、須恵器窯に近接した小型平窯の検出例はなくなる。Ⅲ期に確立した生産体制に変動が生じた可能性が高い。ただし、Ⅳ期は前半で北陸型長甕のみの須恵器窯での生産が確認できる一方、後半でも北陸型長甕・鍋に加えてハケ調整の長甕が一部残る。これはⅣ期での一体生産が不安定な状況を示すとともに、グループ間または工人編成の在り方の相違を示唆するのかもしれない。Ⅴ期以降は北陸型長甕、鍋の安定的な定量生産をみる。

(c) 製作技法の変化

資料に偏りをもち、体系的に述べる段階まで至っていない。

有台坏と蓋の重ね焼きは、Ⅲ期まではⅠ類重ね焼きのみで、Ⅳ期前半の正友ヤチャマ窯でⅡa類重ね焼きが初めて確認でき、かつ主体となる。Ⅳ期後半～Ⅴ期の若緑グループではⅡb類重ね焼きが主体を占め、正友ヤチャマ1号窯と異なる技術系譜をとる。このことから、同窯跡群でⅣ期以降は、Ⅱa、Ⅱb類重ね焼きが併存、中でも若緑グループでⅡb類が卓越する可能性をもつが、今後の資料の増加をまって再考したい。

ヘラ記号はⅡ期～Ⅳ期前半まで点数・種類とも類例に乏しいことに特徴をもつに対して、



第58図 高松・押水窯跡群産須恵器の流通概念図

N₂(新)期は種類が豊富である。Ⅱ₃期の紺屋町ムカイノ窯では有台坏底部外面に1点「/」、Ⅱ₃期～Ⅲ期八野ガメ山1号窯で少量、N₁期前半の正友ヤチャヤマ窯で無台坏に1点「/」、N₁期後半の若緑ホウダシ3号窯で無台坏底部外面に「/」が少量確認できるのみである。またⅢ期の八野ガメ山2号窯では、胎土・形態とも近似した無台坏の一群の底部外面に「/」「×」「//」の3種のヘラ記号が多く認められる他は、坏蓋内面に「×」が1点確認できるのみである。一方、N₂(新)期の若緑ヤキノ2号窯では、かなり多くの種類のヘラ記号が確認できる。報告によればV₂期の資料も含む中で、ヘラ記号は総出土量の約1.8%（蓋3.5%、有台坏3.9%、無台坏1.5%）を占める。種類では「+」「/」を主体に「||」「大」など62種類が確認できる。また形態とヘラ記号の種類にある程度の相関関係が復元でき、ヘラ記号のもつ意味から注目される事例といえよう。

糸切り技法の採用は、N₁期後半に鉄鉢底部（静止糸切り技法）で確認され、同窯跡群の初例となる。N₂(古)期には椀（ケズリ調整を加えるため技法不明）に、N₂(新)期には鉄鉢（静止糸切り技法）で確認できる。あくまで金属器模倣の特殊器種に限って採用された技法と考えられる。

5. 流通（第58図）

窯跡群の消長を知る方法として消費地の様相が一方の視点となる。消費地からみた須恵器の流通に関しては、主に加賀地方を中心に須恵器胎土の蛍光X線分析や肉眼観察による産地同定に基づき、流通圏の復元が活発におこなわれている。そこで出越茂和、木田 清両氏⁹⁰の研究に立脚しつつ、同窯跡群の流通の変遷について考えたい。なお、以下で使用する邑知潟北辺地域は余喜を含む旧鹿島郡を、邑知潟南辺地域は余喜を除く羽咋市北部を、窯跡周辺地域は羽咋市南部～河北潟北端を、河北潟周辺地域は河北潟縁辺～金沢市北部を、金沢平野地域は浅野川流域～犀川・伏見川流域を、松任平野地域は扇頂部を除く旧手取川を南限とする地域を目安に設定している。

同窯跡群が開窯する7世紀は消費遺跡の様相が極めて不明瞭である。7世紀後半～末には窯跡周辺地域では近接する冬野・免田一本松遺跡で同窯跡群産が過半を占めるものの、鳥屋窯跡群産が定量流通し、厳密な意味での一元的な供給体制を実現していない。この状況は8世紀前半の窯跡周辺地域でも確認でき、8世紀前半までの一般的な様相と考えられる。一方、松任平野地域では鳥屋窯跡群・羽咋窯跡群と同質の流通の在り方を示し、遺跡・器種を限定した点的な形で数%の比率で出土する。これらのことから、必ずしも完全な一元的な供給体制を実現できない狭域流通と限定的な中域流通が併存する、ある意味での流通の二重構造を呈する。また同時期には、同窯跡群の須恵器生産の終焉を迎える10世紀までほとんど変わらない邑知潟南辺地域を北限、松任平野地域を南限とする流通圏を確立した可能性が高い。

8世紀前半（おおむねⅡ₃期～Ⅲ期）には、邑知潟北辺地域の四柳白山下遺跡が、ほぼ全てが鳥屋窯跡群産であること、邑知潟南辺地域の寺家遺跡では同窯跡群産が半数程度存在することから、邑知潟南辺地域を北限に流通量を増加させるようだ。窯跡周辺地域では、近接する宿東山遺跡で高松・押水産約75%、鳥屋産25%の比率を示し、必ずしも絶対的な存在ではない。この状況について田嶋明人氏は「食器の須恵器化」に対して「その需要を満たせない未熟な須恵器生産状況との、狭間の不安定な供給状況」のあらわれと指摘している⁹⁰。河北潟周辺地域では今町A遺跡で

確実に主体を占め、南加賀窯跡群産・鳥屋窯跡群産などが補完する関係にある。松任平野地域では、北安田北遺跡で3%、法仏遺跡で約4%の比率を占め、鳥屋窯跡群産・羽咋窯跡群産と同様に、主な供給をおこなう南加賀産・能美産を補完する位置にある。これらの点から、消費遺跡の増加に対応して供給量を増加しつつあるものの、7世紀後半以降と同質の次元での供給状況を設定せざるを得ない。そして、かつて考えた7世紀後半～8世紀前葉の同窯跡群の「第1のピーク」¹⁰²は、あくまで近接地域での生産・流通の安定化を達成したにとどまる可能性が高い。

8世紀中頃以降9世紀初頭（おおむねⅣ期）には、窯跡数の増加から供給量は引き続き増加傾向を維持し、かつ消費遺跡の状況からも一つの画期と考えられる。窯跡周辺地域～河北潟周辺地域では、冬野・免田一本松遺跡等の例から、ほぼ一元的な供給圏を達成したと想定できる。邑知潟南辺地域では羽咋窯跡群の衰退化によっても画期的な供給量の増加をみず、鳥屋窯跡群産がその比率を増加させるようだ。金沢平野地域では同地域の開発と集落の増加に対応すると考えられる末窯跡群の生産が9世紀初頭まで活発であるとともに、同窯跡群産の比率も最大4割程度に飛躍的に増加する。ちなみに金沢平野地域では末窯跡群産が4～6割程度を占める。松任平野地域では粟田遺跡で約15%、法仏遺跡で約13%を占めるように、各器種とも相対的に比率を増加させるが、あくまで南加賀窯跡群産・能美窯跡群産を補完する立場に変化はない。これらのことから、同窯跡群の窯跡数の増加は、主にⅣ₁期以降の窯跡周辺地域、河北潟周辺地域に加え、金沢平野地域の小・中規模開発等に起因する新たな需要の増加に対応したともいえ、松任平野地域の開発等に起因する消費遺跡の需要の増加に必ずしも対応したものではないとも理解できる。またⅣ₂期の松任平野地域北端では賜田系荘園と推測される上荒屋遺跡が成立する。同遺跡では約61%と高い比率を占め、地理的状况に加え、一般的な集落遺跡と異なる需給関係を構築した可能性をもつ。

9世紀前葉末には、前述のとおり越前国より分割され加賀国が立国する。その国府はいくつかの候補地が存在するが、遺跡の密集度などから河北潟周辺地域（大野川河口地域）の戸水C遺跡周辺が有力視されている。また9世紀中葉以降には末窯跡群・能美窯跡群が急速に衰退・消滅に向かう。このような状況の中で、Ⅴ期以降に同窯跡群は邑知潟南辺地域、窯跡周辺地域から国府推定地を含む河北潟周辺地域ではほぼ完全な一元的な供給を確立するのに加え、末窯跡群産の減少を補完する形で金沢平野地域でも急増し、確実に主体を占めるようになる。この傾向は後半以降さらに顕著となる。このことからⅤ₁期に供給面での大きな画期を設定できる。しかし松任平野地域では法仏遺跡で9%、北安田北遺跡で15%、東大寺領横江荘家跡比定地で約30%と、それ程比率に大きな差異は認められないことは前期の在り方と一致する。

6. 小結

以上、同窯跡群の8世紀の展開に関して述べてきたが、正友ヤチャマ1号窯の属するⅣ₁期を中心に整理し、小結にかえたい。

窯跡分布の変遷では、7世紀以来の伝統的な生産体制がⅣ₁期前半に生産域の拡散化の形で変化が顕著に現れ、Ⅳ₁期後半には越前国加賀郡と能登国（越中国）羽咋郡に別々の生産単位を設定できるような生産域および体制に転換する。窯跡数ではⅣ₁期前半以降も増加傾向を示し、Ⅳ₂期

もその傾向を維持する。また土師器焼成遺構である小型平窯が須恵器窯に近接する生産の在り方はⅢ期のみであり、 N_1 期以降は小型平窯の未検出と須恵器窯での土師器の焼成が一般化する。

供膳具の器種組成では、 N_1 期前半はⅢ期の様相を色濃く残し、 N_2 期へ続く組成への転換は N_1 期後半を待たねばならない。その意味では加賀地方の他の窯跡群とは、極めて異なる様相を示すといえよう。また高坏・盤の生産比率に関しても同様である。壺、瓶類はⅢ期と N_1 期に新器種出現の画期が想定でき、古い器種は大部分が N_1 期後半のうちに消滅するようだ。土師器では、Ⅲ期に非ロクロ技法による土師器と須恵器との同一地点での生産が確認できる。 N_1 期は、土師器甕の調整方法に窯ごとの違いをみせ、過渡的な状況を呈する。厳密な意味でのロクロ技法による須恵器窯での生産は、 N_2 期に達成される。また製作技法では、量産化を目指した有台坏と坏蓋のⅡ類重ね焼きが N_1 期以降に普遍化する。糸切り技法の採用は N_1 期後半以降に特殊器種に限って採用される。

消費遺跡での流通からみれば、おおむね N 期以降に手取川扇状地より以北の地域～邑知瀧南辺地域を主たる流通圏として、その量をかなり増加させる。

これらから、 N_1 期前半の正友ヤチャマ1号窯はⅢ期以降の器種組成の様相を色濃く残しながらも、 N_1 期後半にはほぼ達成される生産体制の再編、新製作技法の導入、消費遺跡への流通の増加へ向けた一連の動きへの過渡的な様相を示すといえよう。そして、第1節で述べられた窯体構造の評価も加えて、新しい様相が出現することを強調しておきたい。また土器様相から平城Ⅲ並行に比定でき、その実年代は広岡公夫氏による考古地磁気年代が示す730年±10年にかなり近似した値を示すと考えられる。

註

- (1) 『石川県宇ノ気町史』によれば、19世紀後半の「河北瀧古図」に河北瀧に注ぐ河川とともに横山フゴ、高松フゴが記載されている。そのうち、高松フゴに関しては『加賀志徴』下巻に「内高松瀧」、「内高松不湖」の名称で記載され、その規模は文化5（1808）年の調書によれば「長さ百七十三間程、幅百十五間程」を測る。なお、同地域の古墳時代以降の内陸舟運のあり方に大きく規定された旧国域や首長層の展開に関しては、松山和彦氏が『押水町冬野遺跡群』で詳細な論考をおこなっている。
- (2) かつて提示した編年試案〔川畑1987、1990〕と異なる理解として、紺屋町ムカイノ窯、正友ヤチャマ1号窯、元女ゲザンマイ窯があり、また八野ガメ山1、2号窯は灰原、窯内で資料を区分する必要があることを、折戸靖幸氏より御教示を受けている。
- (3) 田嶋明人「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988年
- (4) 正友ヤチャマ1号窯の西側に御館ヘライバシ1～3号窯が存在する。損壊のため、その操業時期は不詳であるが、1基はⅢ期以前の可能性が高い。とすれば、複数基併設される在り方は紺屋町ムカイノ窯に近く、現在のところ正友ヤチャマ1号窯の操業形態とは同質に扱えないと考えている。
- (5) 従来、元女・黒川・箕打グループはⅤ期以降の窯跡の拡散化の中で理解していた。しかし高松町教育委員会の分布調査により、Ⅳ期に属する窯跡が多数点在することが明らかとなり、その評価を変更する必要性が生じている。
- (6) 折戸靖幸『八野古窯跡群発掘調査概要報告書』高松町教育委員会 1985年
- (7) 吉岡康暢「奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会、調査団 1983年
- (8) 西井龍儀氏の御教示によれば、富山県砺波郡の安川天皇山窯で法量・形態とも正友ヤチャマ1号窯に極めて近似する資料が採取されている。その内、口径11cm前後の有台坏は有蓋である。このことから高松・押水窯跡群 N_1 期前半の同器種は、Ⅲ期と同様に需要を反映した「有蓋・無蓋」の選択的な生産をおこなっている可能性をもつ。
- (9) 折戸靖幸氏の御教示によれば、八野ガメ山1号窯灰原資料は法量の面から紺屋町ムカイノ窯と異なる分化の様相を示す。

- (10) 木田 清『松任市法仏遺跡』 松任市教育委員会 1991年
出越茂和『金沢市末窯跡群』 金沢市・金沢市教育委員会 1989年
- (11) 田嶋明人、小嶋芳孝「加賀・能登における古代手工業生産の様相」『北陸の古代手工業生産』 北陸古代手工業生産史研究会 1989年
- (12) 川畑 誠「高松・押水窯跡群について」『宿東山遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1987年

引用・参考文献

- 『石川県高松町史』 町史編纂委員会・町役場 1974年
- 『石川県宇ノ気町史』 町史編纂委員会・町役場 1970年
- 森田平次『加賀志徴』 石川県図書館協会 1936年
- 松山和彦「第2章 位置と環境」『押水町冬野遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター 1991年
- 平田天秋・村井一郎他『押水町箕打・みやの古窯』 石川県教育委員会、箕打・みやの古窯発掘調査委員会 1976年
- 折戸靖幸『八野古窯跡群発掘調査概要報告書』 高松町教育委員会 1985年
- 西野秀和他『高松町若緑ヤキノ窯跡』 高松町教育委員会 1985年
- 折戸靖幸・木立雅朗「能登地域の須恵器生産」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』 報告編 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988年
- 木立雅朗「竹生野遺跡出土須恵器について」『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター 1988年
- 川畑 誠「高松・押水窯跡群について」『石川考古学研究会々誌』第33号 石川考古学研究会 1990年
- 吉岡康暢『日本海域の土器・陶磁 [古代編]』 六興出版 1991年
- 村井一郎「押水町紺屋町ムカイノ窯跡、御館ヘライバシ窯跡の紹介」『石川考古学研究会々誌』第37号 石川考古学研究会 1994年

第6章 結 び

窯業・製鉄・製塩など古代の生産遺跡は、当時の社会における生産活動に従事する集団の存在や、生産・加工技術のレベルを示す実に重要な資料を我々に与えてくれる。のみならず、製品・物資が各地の官衙から一般集落までさまざまな階層・性格の消費遺跡に流通する過程を追求する作業は、生産体制と流通機構の在り方を通して当時の社会構造へ一步踏みこむ画期的な検討を可能にするものである。この作業は、近年は特に北陸古代土器研究会が窯業において試行し、昭和63年度に行われたシンポジウム「北陸の古代土器研究の現状と課題」においてその成果の結実を見た。また相前後する時期に組織された北陸古代手工業生産史研究会は窯業・製塩・製鉄の各部門において考古・日本史・自然科学の各視点から総合的に生産・流通に関する討議を重ね、平成元年に行われた日本考古学協会富山大会シンポジウム「北陸の古代手工業生産」において、北陸における古代手工業生産の展開とその意義を論じた。両シンポジウムが、北陸の古代史研究を全国的に見てもかなり高い水準に引き上げたモニュメントとなることはもはや疑いえない。同時にその功績は少数人に帰するものではなく、かつ一朝一夕に形作られたものでもない。それは、シンポジウム以前から研究に携わってきた多くの研究者・愛好者の方々の熱意の積重ねからなるものであり、その視点の正しさを証明するものともいえる。生産遺跡の資料とその分析が、以上のような検討の基礎データとなり、古代社会の復元に益するところ大であることは繰り返すまでもなく、これ以上多言を要しないものであろう。

押水町正友ヤチャマ窯跡の発掘調査直前の段階は、シンポジウムの熱気いまだ冷めやらぬ頃であった。担当者は、ここで得られるであろう成果が今後の研究の進展を促す一資料となって蓄積されることを切に願いつつ、発掘調査に着手した。調査が終了し、遺物整理が進み、調査報告書が刊行された現在もその気持ちに変わりはない。しかしながら生産遺跡の扱いに不慣れた担当者は調査から整理作業、報告書作成に至るまで、多くの試行錯誤を繰り返し、その都度自分の力量不足を痛感する毎日であった。

発掘調査はまだ梅雨が明け切らない平成2年の7月初旬から、秋深まる10月末日までの約4ヶ月、当初予定していた期間を少し超過して行われた。昨今、梅雨らしい雨、夏らしい暑さ、秋らしい晴天といったごくあたり前ながら季節感あふれる天候が巡ってくるのが少なくなった。この年も夏期の天候不順が続き、調査の進展を妨げた要因の一つになった。また未熟な担当者は窯体の検出に難渋し、その存在が確実であるはずの1号窯にさえも検出にかなりの日数を費やした。もう1基以上の窯体の存在も予想されており、丹念な精査と確認作業を行ったつもりであるが、とうとう検出されることはなかった。現在は、正友ヤチャマ窯跡を1基の須恵器窯窯体とその灰原で構成された窯跡と理解しているのであるが、調査時は大いに当惑した事を記憶している。また、調査区が谷の中にあるため風通しが悪い箇所での作業は関係者一同、苦痛であった。調査が進み地下式である1号窯がその全貌を表してくると窯内での作業が頻繁になったが、汗が滴り落ちるほどにさらに蒸し暑いものであった。窯内での作業は凶化と掘下げの追いかけあいのような

ものであり、段取りの悪さからやや作業が停滞したこともあった。反省したい。担当者のあせりと不安と疲労が交錯しつつ日々が過ぎ行く中、それでも一定の調査成果を得て現地説明会を行い、無事調査を終了できたのは、担当者を丁寧に根気よく指導して下さった同僚の皆さん、そして炎天下・悪天候下でも細かい指示に淡々とよく従ってくれた作業員・調査補助員の皆さんのおかげである。今も深く感謝している。

整理作業では、一字一句省略することがないラベル通りの注記にこだわり、委託先の(株)石川県埋蔵文化財保存協会の職員の方々に腕を奮っていただいた。出土遺物については1号窯内外の小地区別で計量分析を行い、その分布状況をより詳細に表す予定であったが、時間的な余裕がなく果たせなかった。残念である。

本報告書では発掘調査の事実をできるかぎり正確にかつ客観的に記載するよう努めたつもりである。また、調査・整理を通して明らかになった正友ヤチャマ1号窯の特徴的な窯体構造、製品のあり方については、他地域・他時期の窯跡と比較することで紙数の多くを費やした。窯体構造では、全国的にも少数派である階段状床面構造を選択し、土器・石による焼き台を複合させた焼成技術を想定した。製品のあり方では鉄鉢の量産や供膳具主体組成への転換の始動、新技術の導入など伝統的な在り方を払拭しつつある点を評価した。これらの土器生産体制が新たな形を求めた動きは、巨視的に見れば8世紀中頃の社会全般にわたる大きな「転換」に連動したものであることは、論を待たない。しかしながらよりミクロな視点では、正友ヤチャマ1号窯の地域的・时期的な評価を正しく下しえたかどうかは容易に結論が得られない。担当者の力量不足によって発掘調査時から始まっている不備、また比較資料に見られた量的な制約等は、今後当窯跡の評価に付随する問題点となろうが、今後の課題として担当者が責任を持って検討していくことで御容赦願いたい。また、自然科学分野からの視点として、広岡公夫、酒井英男両氏には調査時からデータ採取のために現地へご足労願ひ、報告書刊行に際しては玉稿をいただいている。特に酒井英男氏による磁気探査は、多様な可能性を持つにもかかわらず、担当者の理解不足から現地調査を含めて限定的な調査報告となり、たいへんご迷惑をおかけした。この場を借りてお詫びしたい。

最後に、調査期間中・報告書作成全般にわたり特に有益な御教示をいただいた下記の方々に重ねて感謝申し上げますと共に、先輩諸兄の御叱責を願うものである。

宇野隆夫、折戸靖幸、垣内光次郎、柿田祐司、北野博司、木立雅朗、木田清、小西昌志、田嶋明人、出越茂和、西井龍儀、服部敬史、前田清彦、村井一郎、村井伸行、望月精司、宮下栄仁、渡辺博人（敬称略、五十音順）

版 图



調査前風景（北から）



1号窯表土除去後状況（北から）



1号窯跡1・2-3・4区間土層断面（北から）



1号窯跡1・3-2・4区間土層断面（北東から）



1号窯3・4・5・6区間土層断面（北から）



1号窯5・6・7・8区間土層断面（北から）



1号窯全景（北から）



1号窯遺物出土状況（舟底ピット付近、北から）



1号窯遺物出土状況（階段床面、北から）



1号窯遺物出土状況（窯尻、北から）



1号窯舟底ピット土層断面（北東から）



1号窯舟底ピット（北から）



1号窯窯尻、煙道土層断面（北東から）



1号窯階段状床面に配された石（北から）



1号窯たちわり（12m地点東側壁、北西から）



1号窯たちわり（12m地点西側壁、北東から）



1号窯たちわり（10.5m地点東側壁～床面、北西から）



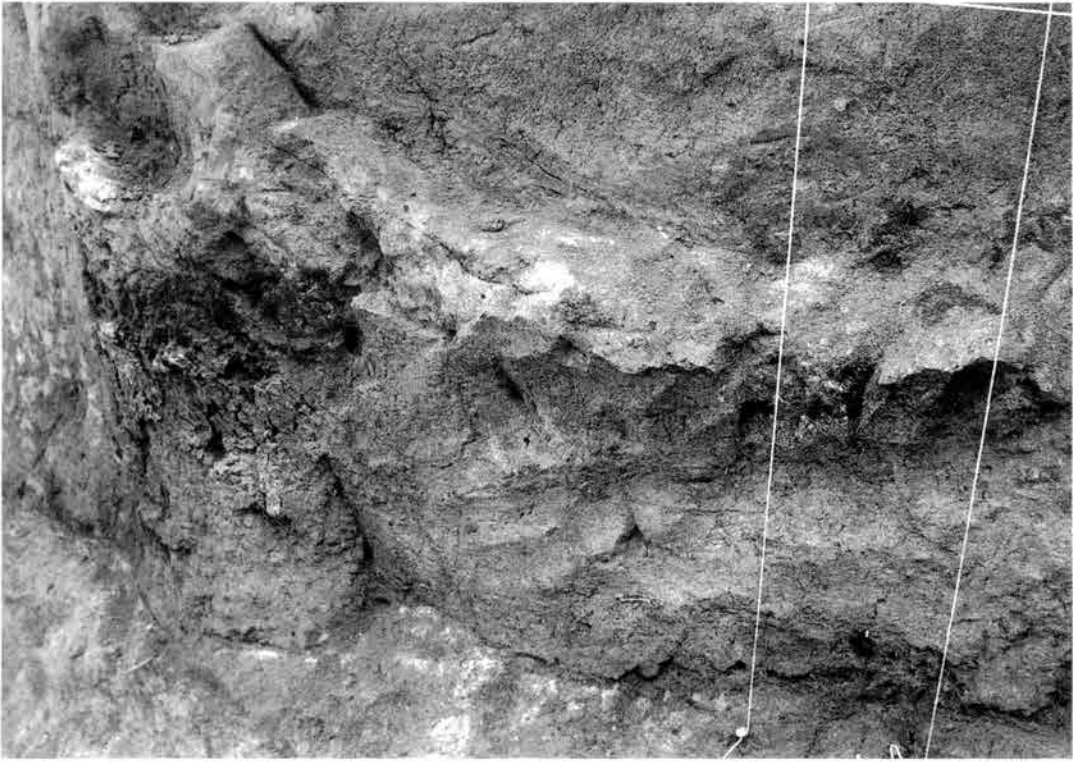
1号窯たちわり（10.5m地点西側壁～床面、北東から）



1号窯たちわり（9m地点東側壁～床面、北西から）



1号窯たちわり（9m地点西側壁～床面、北東から）



1号窯12m地点側壁粘土貼り付け（東側壁、西から）



1号窯たちわり後全景（北から）



調査区斜面東部調査前（北から）



調査区斜面東部調査後（北から）



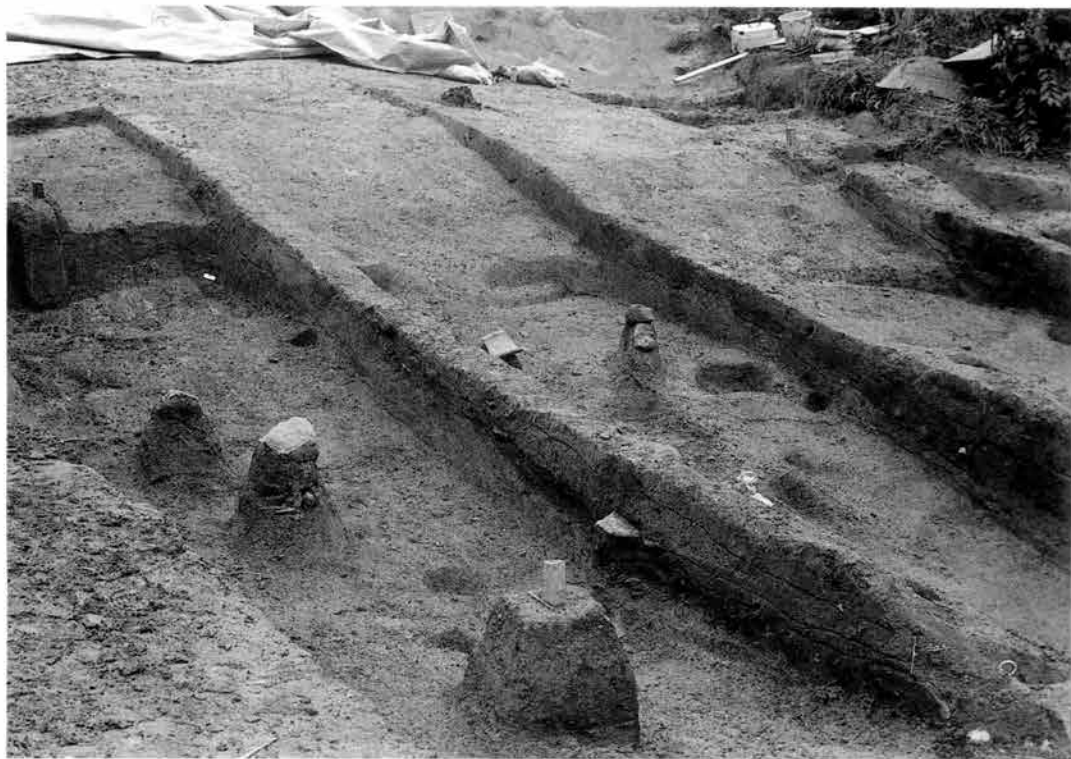
調査区尾根部全景（西から）



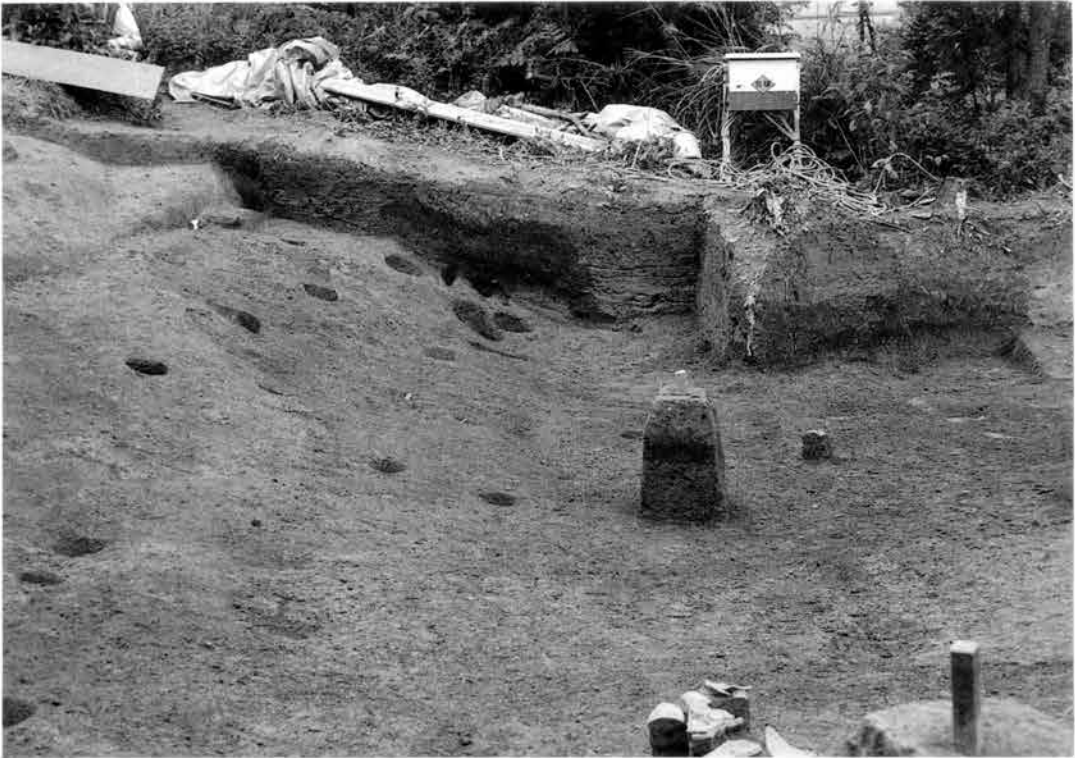
調査区谷部たちわり状況（南から）



灰原の調査（北から）



灰原 d-e ライン土層断面（北東から）



灰原調査後（東から）



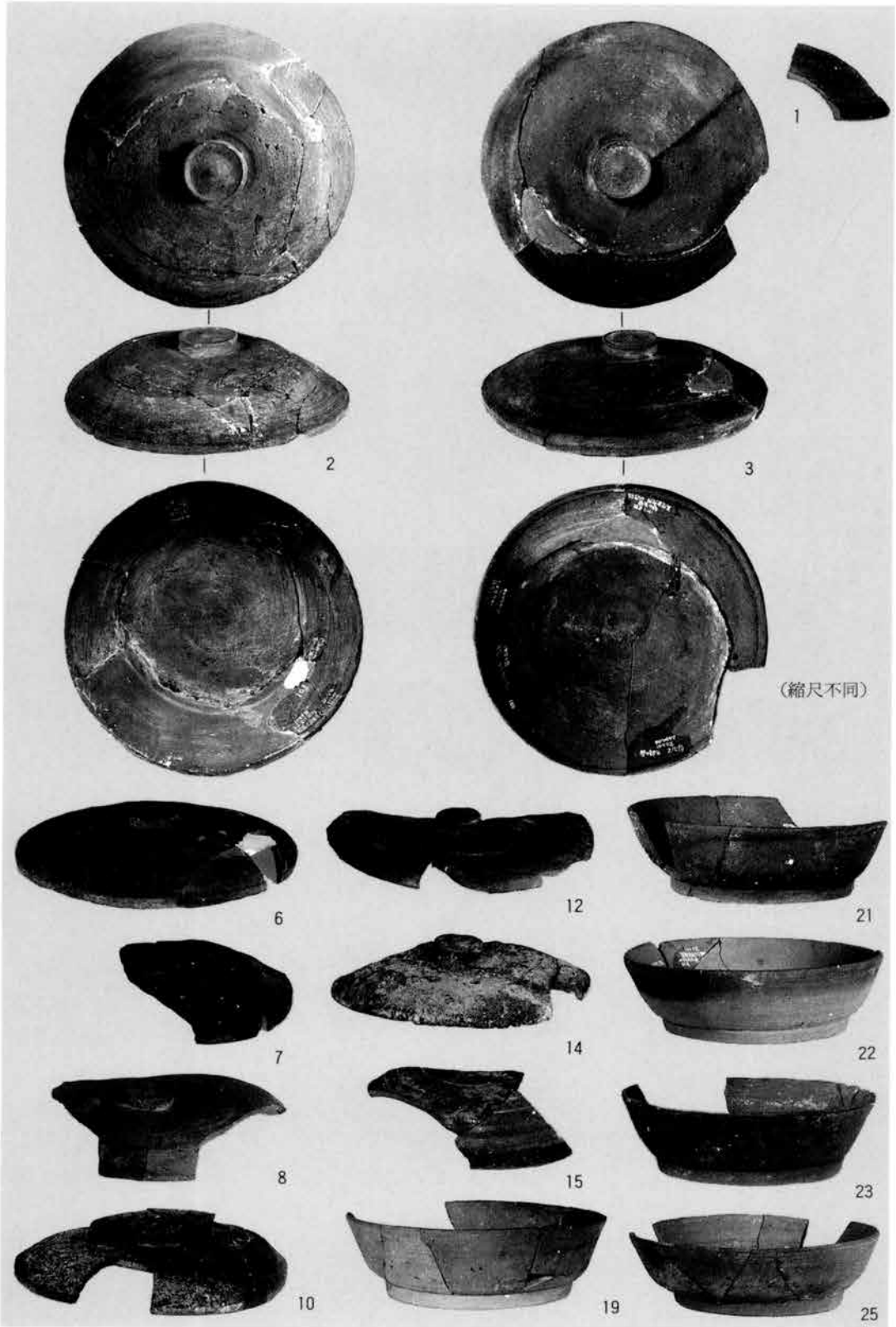
灰原調査後（北から）



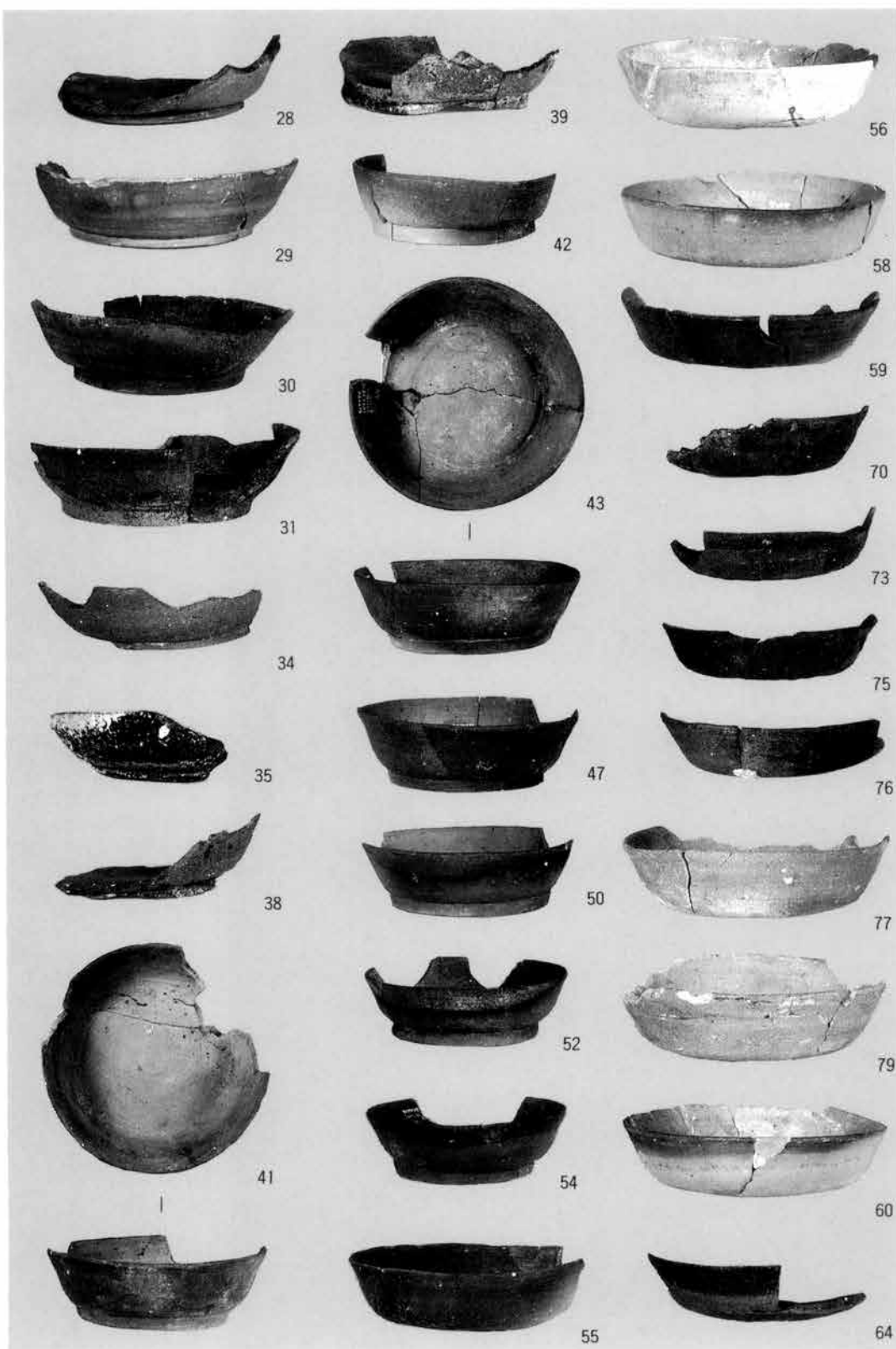
正友ヤチヤマ窯跡調査後全景（上空から）

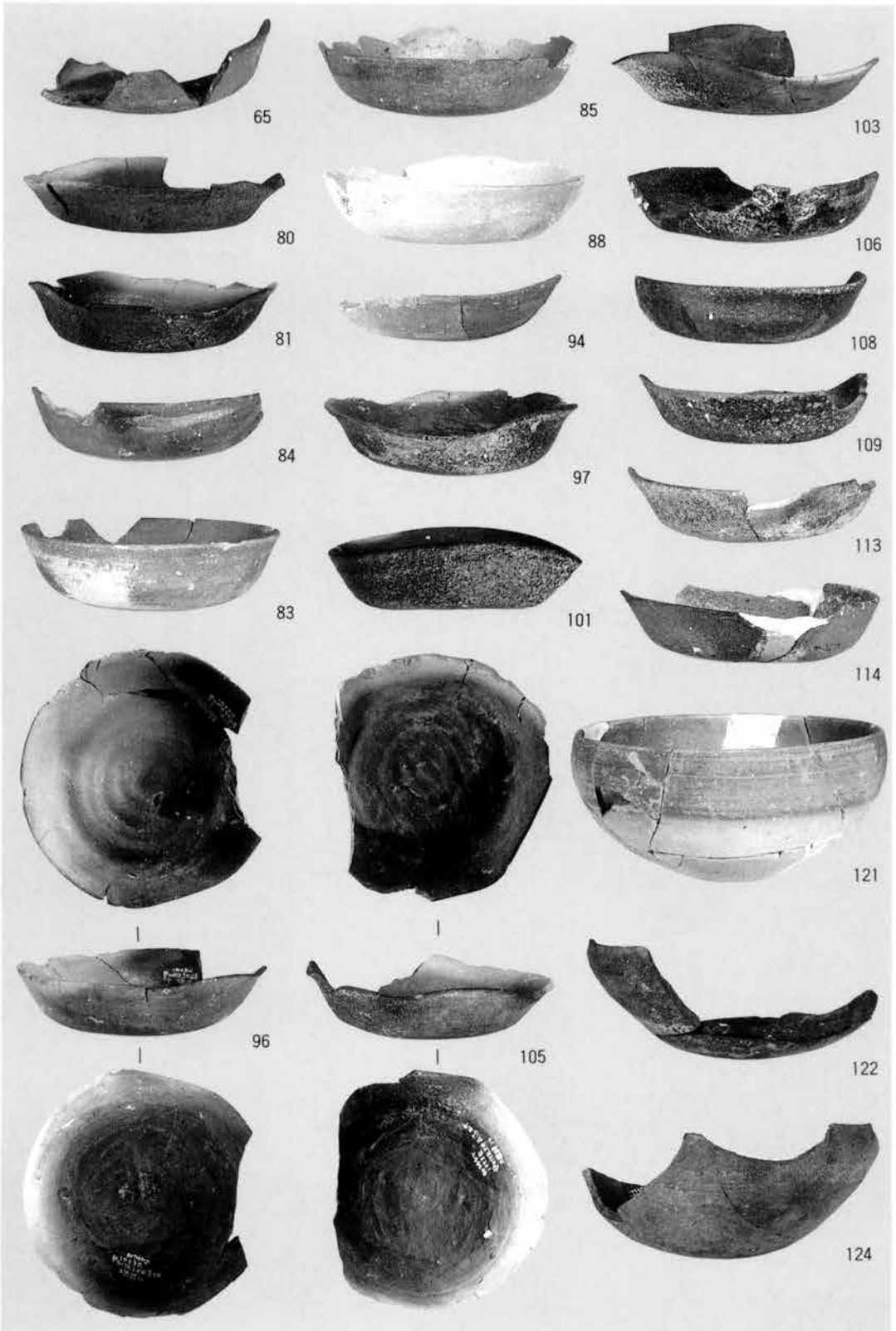


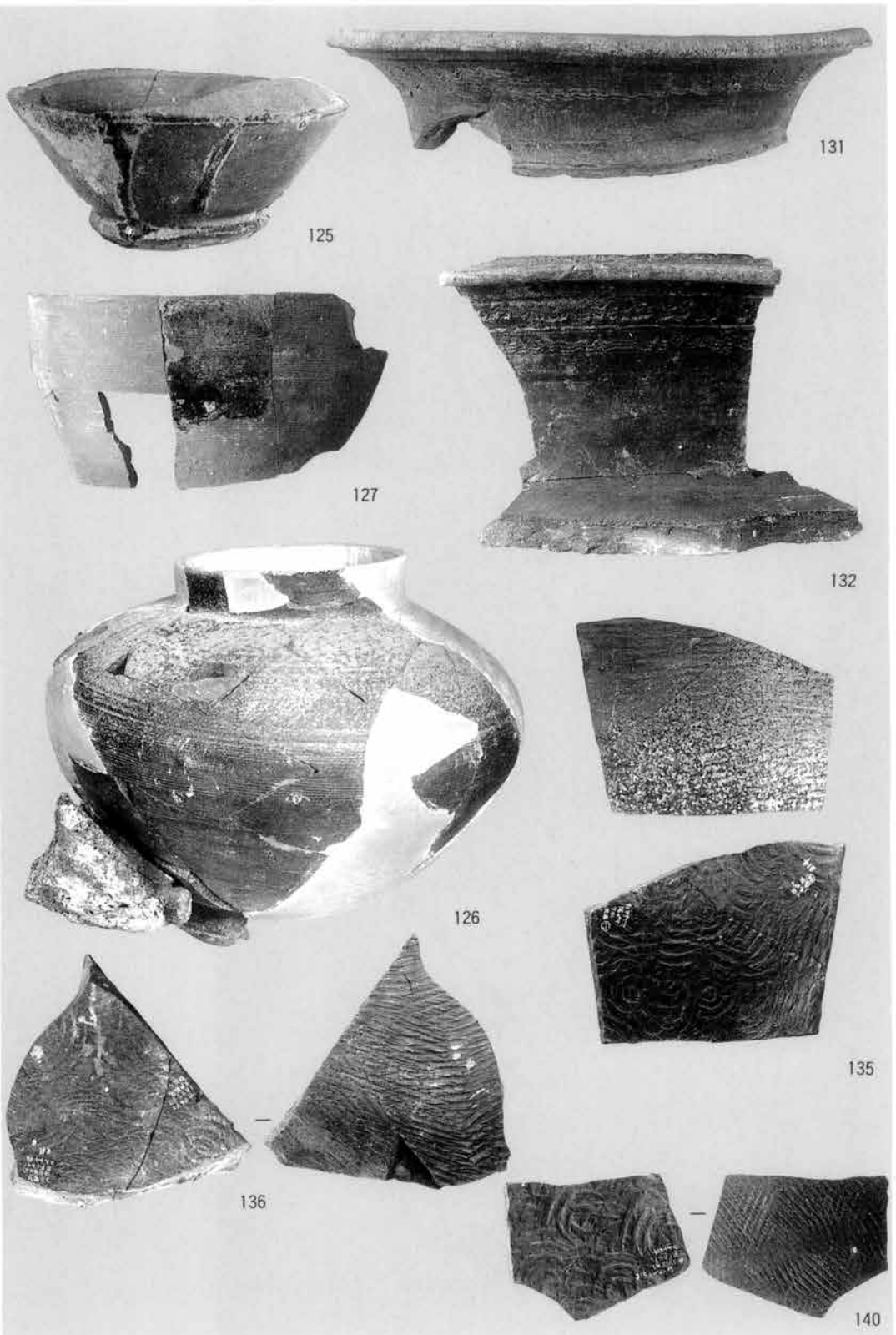
正友ヤチヤマ窯跡調査後全景（北から）

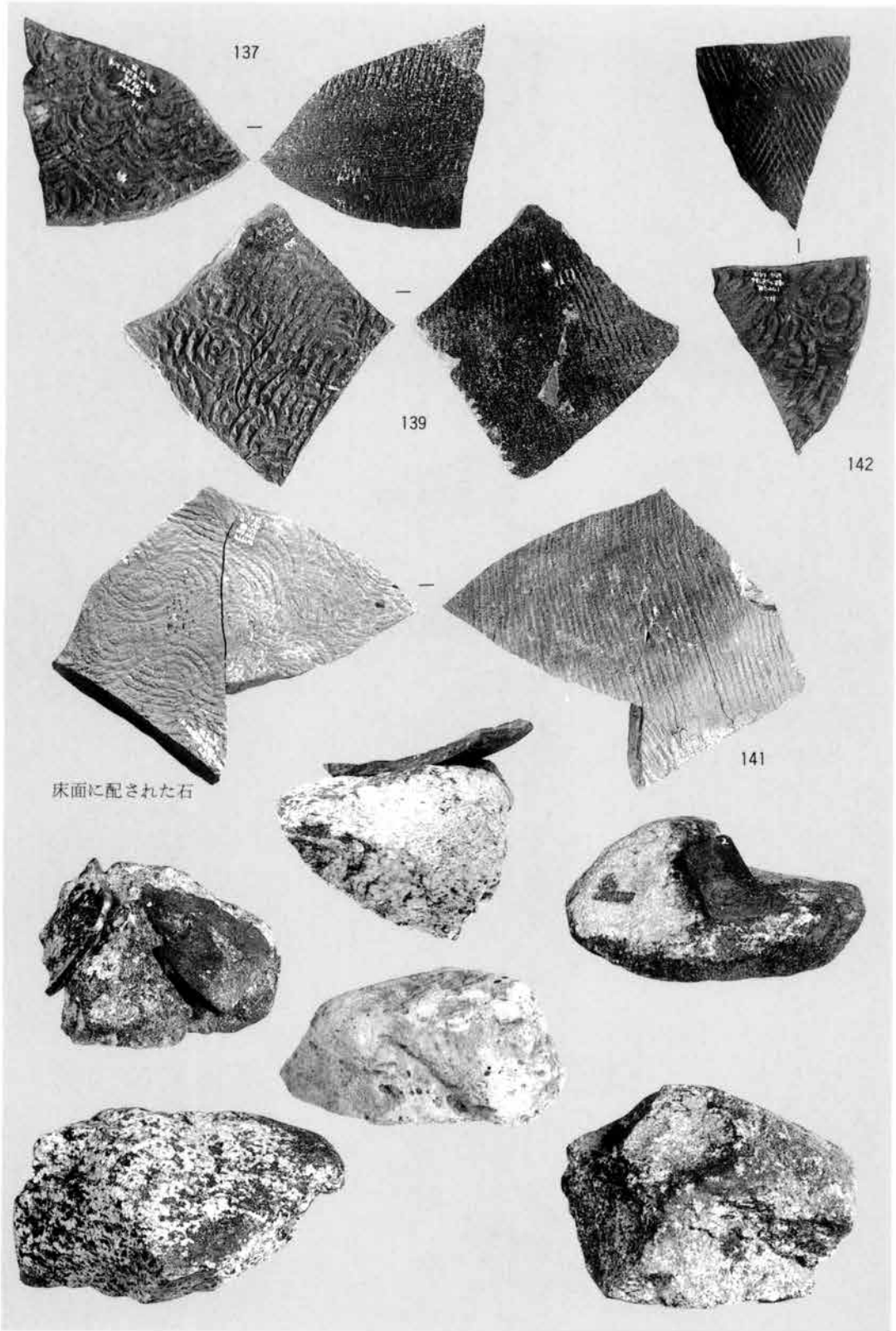


(縮尺不同)









137

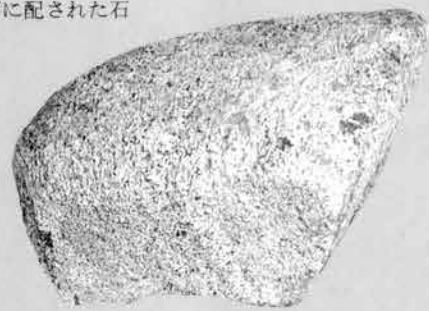
139

142

141

床面に配された石

床面に配された石



146



155



164



149



156



159



151



157



162



152



158



165



170



169



174



173



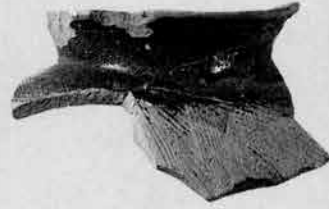
180



182



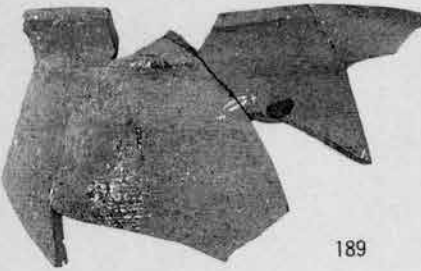
184



186



188



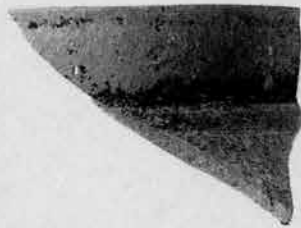
189



190



191



197



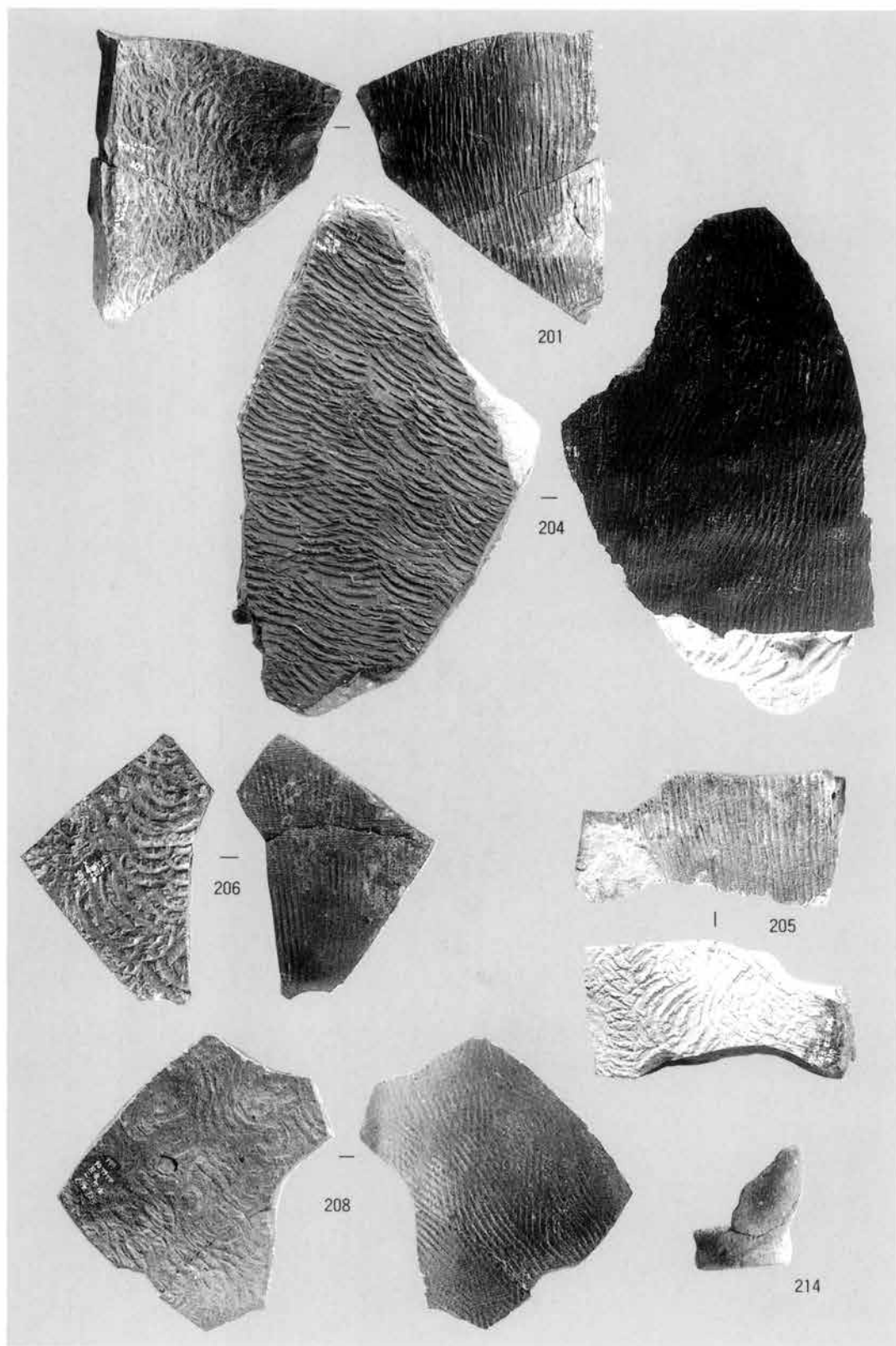
202



199



198



正友ヤチヤマ窯跡

広域営農団地農道整備事業羽咋地
区に係る発掘調査報告書(その2)

平成6年 3月 18日 印刷

平成6年 3月 30日 発行

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921 電話 (0762) 43-7692番代

印 刷 能登印刷株式会社
